



Title	OUFCブックレット 第21巻
Author(s)	吉成, 哲平; 三好, 恵真子
Citation	OUFCブックレット. 2026, 21, p. 1-133
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106306
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



Osaka
University
Forum
on
China

「記憶の継承ラボ」写真展の記録
「戦後」の生活者の思想的営為の
記憶とその現在

吉成哲平 編
三好恵真子 監修

OUFC
BOOKLET
vol.21
2026/9



長崎 城山小学校平和祈念館 2021 年 8 月 © Teppei Yoshinari



沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」 2024 年 10 月 © Teppei Yoshinari

OUFC BOOKLET
Vol.21

「記憶の継承ラボ」写真展の記録
「戦後」の生活者の思想的営為の
記憶とその現在

吉成哲平 編
三好恵真子 監修

刊行に寄せて

「ポスト体験時代」へと向かういま問い直す「戦後」 の生活者の思想的営為

吉成 哲平*

1. はじめに

アジア・太平洋戦争の終結から今年 2026 年で 81 年を迎えた。沖縄、広島、長崎をはじめとする各地域では、先の大戦により亡くなった人びとへの鎮魂と、生き残った先人たちがこれまで長年にわたり積み重ね続けてきた平和への切実な祈りが、この夏もまた捧げられていた。しかしその一方で、2022 年 2 月に開始されたロシアによるウクライナ侵攻や、2023 年 10 月のイスラム組織ハマスによるイスラエルへの攻撃を端緒とした報復の応酬、さらには、今年 2 月のアメリカによるイラン攻撃など、世界各地で立て続けに発生している戦争は、地域的な紛争の次元を超えて次の世界大戦へと拡大しうるかもしれない可能性を、私たちに茫漠とした不安と共に実感させているのではないだろうか。

転じて、終戦から 80 年以上が経過した東アジアを巡る国際情勢に目を向けてみても、日本と近隣諸国との関係性は必ずしも安定的であるとはいえないように見受けられる。特に、東アジアにおいてはこれまで経済的、文化的な相互依存関係が進展してきたにも関わらず、依然としてアジア・太平洋戦

* 大阪大学人間科学研究科・特任助教

争を巡る歴史認識が相克していることが地域協力を阻んでいる¹。つまり、私たちは先の大戦を巡って「「過去は死んでいない。過去にさえなっていない」という事実」²に今なお直面し続けていると言える。しかし、「戦後 80 年」という長い歳月を経て、アジア・太平洋戦争を体験した人びとの高齢化や逝去が進むことにより、その直接的な証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」³へ突入しつつあるという今日の現状に鑑みれば、私たちがこれらの戦争・戦後体験と向き合いながら「記憶の継承」を模索しつつ、さらには東アジアに暮らす人びととの対話と連帯の可能性を探っていく必要性は、より一層高まっていると考えられる。

後述する通り、こうした社会的背景のもとで、これまで筆者らは 2023 年 6 月より大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」（代表：三好恵真子 [大阪大学人間科学研究科]）を展開してきた⁴。「記憶の継承ラボ」では、戦争体験者がいなくなっていく「ポスト体験時代」へ差し掛かりつつある現在、体験や記憶の継承に向けた各地での交流活動を通じて、特に次世代を担う学生たちの主体性に期待しながら、戦争・戦後体験の意味を問い、未来への展望を描いていくために、国境を越えた対話（グローバル・ダイアログ）と連帯への可能性を生活の次元から模索していくことを目指している。すなわち、それは、私たちの生活の中で実感し、身体に刻み込まれた様々な経験や記憶の重みを踏まえながら、文化的背

¹ 油井大三郎 2020 「東アジアの地域協力と歴史和解の可能性」『学術の動向』25(9)、10-13 頁。

² テッサ・モーリス＝スズキ 2014 『過去は死なない：メディア・記憶・歴史』岩波書店、5 頁。

³ 蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編 2021 『なぜ戦争体験を継承するのか——ポスト体験時代の歴史実践』みずき書林；上野千鶴子 2022 「ポスト体験時代の戦争研究の課題」『学術の動向』27(12)、36-40 頁。

⁴ 大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」HP <https://relay-memories.hus.osaka-u.ac.jp/>

景の異なる人びとも含めた他者と「共にある」という「生活者の思想的営為」を未来へと継承していく試みに他ならない。特に、本プロジェクトではこれまで長崎や沖縄の現場へのフィールドワークを毎年積み重ねていきながら、各地の実践者たちとの協働の作品づくりとして、公開シンポジウムの開催ならびにその総括としてのブックレットを刊行してきた⁵。そして、これら「記憶の継承」の現場からの貴重な示唆をより幅広く社会に向けて発信していくための新たな試みとして、昨年 2025 年 7 月 28 日（月）から 30 日（水）にかけて、写真展「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」（主催：大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」；大阪大学大学院人間科学研究科環境行動学研究分野、於 大阪大学人間科学研究科本館 1 階・インターナショナルカフェ）を実現することが出来た。本書は、昨年写真展における空気感を残しながら展示写真を再構成するのみならず、本展への参加者から寄せられた応答も収めることにより、その成果報告として結実したブックレットとなる。本書の刊行に際して、以下では「ポスト体験時代」へ向かう今日において戦争・戦後体験を問い直していく必要性から「記憶の継承ラボ」の立ち上げへと至った背景を踏まえた上で、私たちがこの展示に込めた志とその学術的な位置づけについて、整理しておきたい。

⁵ 三好恵真子・吉成哲平編 2024『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（「21 世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ②）』OUFC Booklet Vol.18、大阪大学中国文化フォーラム。 <https://hdl.handle.net/11094/94661>

三好恵真子・吉成哲平編 2025『ポスト体験時代の記憶の継承—アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアローグ（「21 世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ③）』OUFC Booklet Vol.19、大阪大学中国文化フォーラム。 <https://hdl.handle.net/11094/100627>

中谷碩岐・瀧口隆・吉成哲平編、三好恵真子監修 2025『出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる』OUFC Booklet Vol.20、大阪大学中国文化フォーラム。 <https://hdl.handle.net/11094/102323>

2. 「ポスト体験時代」へ向かう今日、なぜ「戦後」を問い直す必要があるのか

前述したように、アジア・太平洋戦争の終結から 80 年以上が経過している現在、「体験者なき時代」が到来しつつある。その一方で、戦後の東アジアにおいて繰り返されてきた近隣諸国間との緊張と緩和は現在も継続したままであり、その根底には、先の大戦を巡るきわめて複雑な歴史問題が横たわっている。容易には解決の道を拓くことの困難なこの問いと向き合う上で、恐らく筆者を含めて私たちの多くは、1945 年の終戦ののち、占領期における 1951 年のサンフランシスコ平和条約の締結によって日本は国際社会へ復帰することで、戦災からの復興と高度経済成長という平和と繁栄がもたらされたと考えがちであるのではないだろうか。しかし、こうして米ソの冷戦が本格化する時代へ向かう中で決せられた戦後処理は、朝鮮半島や台湾海峡問題に加え、北方領土、竹島、尖閣諸島、南沙諸島等の領土問題、さらには沖縄の地位や基地を巡る問題など、今日の私たちが直面している様々なひずみもまた共通して生み出してきたこと⁶は見過ごせない。つまり、私たちはアジア・太平洋戦争終結後としての「戦後」を、様々な激動がありながらも、総じて見れば「平和」な時代として学習する機会が多いように思われる。しかし、そうした言わば歴史教科書における一頁として綴られる戦後史の裏側には、敗戦後の「豊かな社会」の達成と共に忘却されていった実に数々の出来事があり、それらは私たちの暮らしている「いま」を歴史の深部から規定し続けていると言えるのではないだろうか。太平洋戦争における趨勢の分岐点となったミッドウェー海戦（1942 年）での日米双方の死者たちの足跡を丹念にたどり直した作家の澤地久枝氏は、次の通り記していたことを、ここで改めて思い起こしたい。

⁶ 原貴美恵 2015 「継続するサンフランシスコ体制」、成田龍一・吉田裕編『記憶と認識の中のアジア・太平洋戦争』岩波書店、74 頁。

「歴史とはどんなものなのか、誰も手でさわってみた人はない。薄い皮膜のようなものが何十億枚とかさなってゆく。その一枚々々は人間のいとなみであり、「事実」でもある。それがあつた層を形づくったとき、ひとつの時代、ひとつの歴史となつてゆくのではないだろうか。その層の間には無数の忘れられた人生があり、事件がある。」⁷

より具体的には、事実上の対日単独占領を実施したアメリカが第二次大戦後の国際環境における圧倒的な覇権を背景として、日本を冷戦下の西側陣営に組み込むために「寛大な講和」を推し進めたことで、戦後日本社会は戦争責任を巡るアジア諸国からの要求を直視せずに経済復興と成長の道へ邁進することが可能であった⁸。特に、中国革命や朝鮮戦争を経て本格化した冷戦期におけるアメリカの東アジア戦略の下で、韓国、台湾、ベトナムは「反共」の軍事的防波堤としての役割を担った反面、日本はその補完的役割として、沖縄を軸に基地を提供しつつも東アジアの経済的中心として位置づけられてきた⁹。言い換えれば、戦後日本社会はこうした冷戦期東アジアにおける「分業体制」のもとで戦災からの復興と高度成長を遂げてきたのである¹⁰。それゆえ、沖縄出身の作家・目取真俊氏が終戦から 60 年という節目である 2005 年に刊行した『沖縄「戦後」ゼロ年』において、「「戦後」＝第二次大戦後という国が、アジアにどれだけあるのでしょうか」¹¹と問いかけていたことは、それからさらに 20 年以上が経過した現在も依然として色褪せることなく重く響いている。さらには、こうした軍事的・経済的な外部要因に留ま

⁷ 澤地久枝 1984『滄海よ眠れ—ミッドウェー海戦の生と死(四)』毎日新聞社、8 頁。

⁸ 吉田裕 2005『日本人の戦争観—戦後史のなかの変容』岩波書店、22 頁。

⁹ 道場親信 2008『抵抗の同時代史—軍事化とネオリベリズムに抗して』人文書院、145 頁。

¹⁰ 西川長夫・大野光明・番匠健一編 2014『戦後史再考—「歴史の裂け目」をとらえる』平凡社；道場親信 2021『占領と平和—〈戦後〉という経験』青土社。

¹¹ 目取真俊 2005『沖縄「戦後」ゼロ年』NHK 出版、12 頁。

らず、文化的な大衆消費の次元でも、人びとは戦時期までの東アジアにおける日本の帝国主義を引き継いでいった「アメリカ」に魅了されていくことで、アジアとの関係を忘却しがちであった現実¹²があることも想起したい。

そして、「記憶の継承」という観点においてなにより見逃せないのは、こうした冷戦体制に媒介された戦後処理と地域間の分断的状況の固定化こそが、日本を含むアジア各国におけるアジア・太平洋戦争の記憶のなされ方を強固に方向付ける側面を有してきたことである。とりわけ、東アジアではアジア・太平洋戦争の終結を契機に独立を遂げた国々が多かったため、各国においてその記憶は概して「ナショナル」な文脈から語られがちであった¹³。さらには、冷戦体制がもたらした東アジアにおける国家間の分断によりアジア大陸の戦争犠牲者同士の接触が制限されたことは、「記憶の分断」も招くこととなった¹⁴。従って、このように日本と近隣諸国間の「ナショナル」な境界を固定化する危険性も孕んでいる「加害」と「被害」という二項対立的な図式の隘路へと陥ることなく、「トランスナショナル」な連帯へと拓くことで、「狭隘な「ナショナリズム」に基づく「記憶」を溶解させてゆく」¹⁵ことが、「戦後 80 年」を経た現在もなお不可欠であることは間違いない。

それゆえに、敗戦後の日本社会において、これまで各地域の現場から「戦争と戦後」を問い直してきた人びとの模索は、戦争体験者たちの去りゆく今日を生きる私たちにとって豊かな示唆に富んでいると考えられる。例えば、戦後日本社会では戦場や敗戦の焼跡における日本の民衆の原体験が十分に吟味されないまま次第に見失われつつあることが危惧される中で、草の根のレベルの人びとの営為の内に、戦争責任やアジアに対して敗戦後も残存する自民族中心主義的な意識を克服しようとする活路がこれまで見出されてき

¹² 吉見俊哉 2007『親米と反米—戦後日本の政治的無意識』岩波書店、16-20 頁。

¹³ 油井大三郎 2005「世界戦争の中のアジア・太平洋戦争」、倉沢愛子ほか編『なぜ、いまアジア・太平洋戦争か』岩波書店、267-268 頁。

¹⁴ テッサ・モーリス＝スズキ 2005「暴力を語ることは可能か」、前掲『なぜ、いまアジア・太平洋戦争か』303 頁。

¹⁵ 油井大三郎 (2005)、前掲書、117 頁。

た¹⁶。さらには、朝鮮戦争やベトナム戦争など、戦後日本社会の経済的繁栄の影で見落とされがちな第二次大戦後の東アジアにおける様々な戦争との結びつきを巡っては、とりわけ 1960 年代から 70 年代にかけて高揚したベトナム反戦運動に象徴されるように、冷戦体制下において引かれた地域間の分断線を人びとが乗り越えようとしながらアジアとの連帯を希求していったこと¹⁷も特筆すべきである。

しかしながら、昨今の日本社会において主にメディアにより媒介されながら「継承」され得るこれらの戦争体験や記憶は、日本とアジア諸国間よりも日米関係に限定される傾向にあり、特に戦争体験や記憶の継承が近年喫緊の社会的課題として主題化される中で、そうした傾向はより増幅される危険性さえもが示唆されている¹⁸。また、こうして戦争体験の継承が急がれる余り、敗戦後に戦争体験世代と戦後世代との間で先鋭化してきた当時の複雑な対立や、戦場体験の過酷さゆえに当事者が抱えてきた語り難さなどが等閑視されることで、戦争体験にまつわる記憶が現在の立ち位置から定型的なストーリーとして再定置されたものとして「継承」されてしまう危険性¹⁹にも留意したい。それゆえに、「ポスト体験時代」へと向かう現在、戦後日本社会の各地域に暮らしてきた人びとの複雑な経験を、「東アジア」という歴史空間へと位置付け直しつつ、さらには「戦時」から「戦後」への連続性の中で凝視していく必要があると考えられる。その模索は、私たちが「いま」を相

¹⁶ 吉見義明 2022『草の根のファシズム—日本民衆の戦争体験』岩波書店；吉見義明 2024『焼跡からのデモクラシー—草の根の占領期体験（上）（下）』岩波書店。

¹⁷ 大野光明 2014『沖縄闘争の時代 1960／70—分断を乗り越える思想と実践』人文書院；平井一臣 2020『ベ平連とその時代—身ぶりとしての政治』有志舎；道場親信（2008）前掲書；道場親信 2011「ポスト・ベトナム戦争期におけるアジア連帯運動—「内なるアジア」と「アジアの中の日本」の間で」、和田春樹ほか編『ベトナム戦争の時代：1960-1975 年（岩波講座東アジア近現代通史）』岩波書店、97-127 頁。

¹⁸ 米倉律 2018「「戦争体験・記憶」の継承をめぐるポリティクス：“戦後七〇年”関連テレビ番組の内容分析を中心に」『政経研究』54(4)、469-497 頁。

¹⁹ 福間良明 2020『戦後日本、記憶の力学—「継承という断絶」と無難さの政治学』作品社。

対化し、別様な可能性を学びとること」²⁰へと拓かれていくはずである。

3. 「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」の立ち上げとこれまでの活動成果

以上で述べた「ポスト体験時代の記憶の継承」という喫緊の課題を念頭に置きながら、筆者らは「記憶の継承ラボ」の活動を開拓してきた。とりわけ、その活動基盤として重要となるのは、それ以前より十数年以上にわたって蓄積されてきた「大阪大学中国文化フォーラム」（代表：三好恵真子〔大阪大学人間科学研究科〕）²¹における実績である。第二次世界大戦後の東アジア地域秩序の再編による歴史の重層性を踏まえながら本学における様々な部局の有志の教員により 2007 年に組織化された本フォーラムでは、中国の変容を中心・周辺（core-periphery）関係の再編過程とみなし、「中国」を中華人民共和国と等値せず、「多元的多民族社会と華人社会」という空間的拡がりおよび「近現代の軌跡と前近代からの逆照射」という歴史的射程から、その特質を捉えることを特徴としている。その上で、グローバル大国化しつつある中国および日中関係を含む東アジア地域秩序に関わる諸課題は、従来の国家間関係のもとではもはや解決しえないことを認識し、東アジアの国際公共財形成への基盤としての「人間の安全保障」に一つの方向性を見出してきた。すなわち、東アジアの緊張関係が揺れ動く社会情勢下においても、face to face の相互の信頼を糧にしながら、アジア地域史の文脈からの理解とその対話の重要性を再確認しつつ、さらに世代を越えて議論を展開しうる実践的基盤が整えられてきた²²。「記憶の継承ラボ」においても、こうして「大阪

²⁰ 道場親信（2008）、前掲書、18 頁。

²¹ 「大阪大学中国文化フォーラム（OUFC：Osaka University Forum on China）」

HP <https://relay-memories.hus.osaka-u.ac.jp/oufc/>

²² これらの取り組みは、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト（研究拠点構築型）「21 世紀課題群と東アジアの新環境：実践志向型地域研究の拠点構築」（代表：三好恵真子）としても活動をさらに深化させてきた。
<https://www.gjs.osaka-u.ac.jp/project/2022b/>

大学中国文化フォーラム」が長年重んじてきた東アジアにおける連帯の可能性を踏まえながら、さらに各地の現場での模索に学ぶことで、記憶の継承の可能性を展望していることを強調しておきたい。

以上の活動基盤の元で「記憶の継承ラボ」を立ち上げる直接的な契機をなしたのは、敗戦後を生きる人びとの暮らしを生涯撮り続けた写真家・東松照明（1930-2012）の足跡（本書「第一部に際して」にて詳述）をたどり直すために訪問した長崎を皮切りとして、沖縄や水俣、福島などの各地を訪れる中で、その経験と記憶の継承、真の平和に向けて日々力を尽くしながら活動が続けている人びととの貴重な出会いがあったことである。中でも、被爆校舎から長崎の原爆体験を伝え継いでいる城山小学校平和祈念館では、被爆者やその遺族の方々が「8月9日」の日を、一年、また一年と無事に共に迎えられた喜びを分かち合いながら再会する姿、すなわち被爆による苦悩を絶えずその心に抱き続けながらも人びとが生きようとする生の営みに心を打たれていた。その一方で、生き残った被爆後の社会に暮らしていく中で味わう多層的な苦悩に苛まれながら、沈黙を貫く人びとの眼差しに触れることもあり、それは被爆以後、原爆が今なお人間に何をなし続けているのかという、今日まで流れ続けているその時間の厚みを痛感させるものでもあった。

さらには、「基地の街」、「戦後沖縄の縮図」とも形容され、朝鮮戦争の勃発する1950年代初頭に建設が本格化した沖縄の嘉手納基地の門前町として発展する中で、独自の文化を築いてきた街として知られる沖縄市コザでは、沖縄が数世紀にわたり経てきた歴史の厚みを受け止めつつも、現在も同地で起きている出来事を巡り複雑な葛藤を抱かざるを得なかった。ただし、市史編集に精力的に取り組む現場の実践者の方々は、そうした私たちに対して、様々な背景を持ってコザに暮らす一人ひとりの模索やエネルギーによりこの街がつくられてきたのだという戦後史を諭して下さった。そこには、これからの街をつくっていくために、コザに多くの人びとが訪れてその歴史を知ってほしいという、コザに暮らす人たちの視座による「戦後史」の継承への願いが託されていたのである。

このように、これまで私たちが「記憶の継承ラボ」の活動を通じて各地の

現場から受け止めてきたのは、忘れてはならない戦争体験であると同時に、敗戦後の目まぐるしく変容する社会と向き合いながらも懸命に日々の暮らしを営み続けてきた一人ひとりの「戦後」という経験の重みでもあった。すなわち、アジア・太平洋戦争における死者の数だけそれぞれの日常の暮らしがあったように、大戦を生き残った人びとの分だけ「戦後」を生きる中での葛藤や苦悩と模索があり、それらは私たちが暮らしている「いま」へと弛むことなく繋がっていることへの内省を、次第に深めていったのである。それは、私たちが日頃様々なメディアを介しながら過去の出来事を客体的に認識することとは異なり、まさにそのような「過去」が生み出してきた「現在」の中に「連累」²³しているという実感でもあった。そして、その際に各地の実践者たちは、体験者の「伴走者」として地域の中で共に生きていくことで、戦争を生き残った体験者が抱え続けている身心の傷跡や語り得ない思いとの距離を徐々に埋めながら、歳月をかけて記憶の継承の担い手となってきた時間の重層性もまた浮かび上がってきたのである。

先述のように、こうした各地の現場から得てきた数々の重要な示唆を社会へと拓いていくために、「記憶の継承ラボ」では、長崎や沖縄の実践者たちとの協働による未来への作品づくりとして、公開シンポジウムの実施に加えて、その総括としてのブックレットを制作してきた。具体的には、長崎の城山小学校平和祈念館にて被爆体験を語り継ぐ実践者である山口政則氏と松尾眞一郎氏をお招きしたシンポジウム「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」²⁴を2023年に開催した。また、翌2024年には、沖縄市戦後文

²³ 「わたしたちは過去の出来事に連累（インプリケーション）している。過去によって創られた制度、信念、組織のなかに生きているからである。しかし同時に、過去がわたしたちのなかに生きているからでもある。意識して、あるいは無意識のうちに、たくさんのメディアから吸収してきた歴史知識によって、誰に共感するか、現在のどの出来事に喜び、同情し、怒るのか、そうした出来事にどう対応するかが決定される。」（テッサ・モーリス＝スズキ 2014『過去は死なない：メディア・記憶・歴史』岩波書店、309頁。）

²⁴ 主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「21世紀課題群と東アジアの新環境：実践志向型地域研究の拠点構築」；大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト「記

化資料展示館「ヒストリート」に携わりながら市史編集に尽力している職員である恩河尚氏と伊敷勝美氏をお迎えして、シンポジウム「ポスト体験時代の記憶の継承—アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ—」²⁵を実現することも叶った。いずれのシンポジウムにも国内外から 100 名以上の参加があり、時宜を得た以上の反響を得ており、また成果物として冊子体と電子版により刊行したブックレット²⁶も非常に多くの閲覧数を獲得していることを大変有り難く受け止めている。加えて、当時、博士前期課程であった大学院生たちの企画により、分野を横断する若手研究者たちが中心となって、戦争や災禍が人びとに刻み込む出来事の「表象不可能性」を巡る困難と向き合うために、ホロコーストを経験した「語り得ない」生還者たちを写した重厚な記録としても知られる映画『SHOAH』（1985 年）を手がかりに討議を重ねたシンポジウム「出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる」（2024 年）を開催し、その総括としてのブックレットを発刊してきたこと²⁷も特筆しておきたい。

「ポスト体験時代」の到来を前に近年活発化する戦争研究においては、「戦後の平和」が日本にローカルな文脈でしか成立し得ないことを念頭に、「あの戦争」か、継続する戦争か」が重要な論点の一つをなしている²⁸。以上で概観した通り、「記憶の継承ラボ」の活動においても、アジア・太平洋戦争とその「戦後」の暮らしを、過去の出来事としてのみならず、今日の私たちが直面している様々な「戦争」の現実とも応答させながら捉え直していくことを重んじている。すなわち、時代や場所を超えて、常に戦いの犠牲となる

憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」、共催：城山小学校被爆校舎平和発信協議会；大阪大学中国文化フォーラム。

²⁵ 主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「21世紀課題群と東アジアの新環境：実践志向型地域研究の拠点構築」；大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」、共催：沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」；大阪大学中国文化フォーラム。

²⁶ 三好・吉成編（2024）、前掲書および三好・吉成編（2025）、前掲書。

²⁷ 中谷・瀧口・吉成編（三好監修）、前掲書。

²⁸ 上野（2022）、前掲論文。

のは、日常を生きる市井の人びとであることを常に忘れることなく、心に留め続けていきたい。

3. 写真展「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」に込めた志

以上の活動成果を踏まえた上で、「ポスト体験時代」へと向かういま、体験者の「伴走者」として記憶の継承に尽力する現場の実践者たちからの学びをより幅広く社会へ伝えつつ、さらには、戦争・戦後体験やその記憶にまつわる対話の場²⁹を構築していくために昨年 2025 年 7 月に開催したのが、写真展「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」である。本展は、これまで「記憶の継承ラボ」が各地のフィールドにて撮影してきた写真に基づく展示とギャラリートークを介して現場を伝え、表現することにより、戦中戦後の生活を絶えず切り拓こうとしてきた人びとの模索の歴史の上に今日の現実があるという、東アジアへと拓かれた過去からの重層的な時間の連続性について、参加者それぞれが自身の立ち位置から考えられることを目指した。この写真展の学術的な位置づけとして、以下の二点について述べておく。

一つに、記憶の継承に尽力する現場から得てきた示唆を、本展ではこれまでの書籍や研究論文等の形だけではなく、「写真表現」により伝えていくことに挑んだ重要性である。その学術的背景として、「ポスト体験時代」に入りつつある昨今、戦後派あるいは戦無派世代による戦争研究が活況を呈している³⁰。中でも近年の戦争体験や記憶の継承を巡る研究動向の特徴の一つと

²⁹ 特に、これら東アジアへと拓かれた各地域の戦争・戦後体験やその記憶の継承活動にまつわる対話の場の構築に関しては、以下のプロジェクトとして活動を昇華させていくことへ挑戦している。

大阪大学グローバル日本学教育研究拠点（研究拠点構築型）「東アジアへ拓かれた「戦後日本」の記憶の継承：地域間を結ぶ対話と歴史実践の拠点構築」（研究代表：吉成哲平）<https://www.gjs.osaka-u.ac.jp/project/2025c/>

³⁰ 上野（2022）、前掲論文。

しては、それまで語られてこなかった記憶が「戦後 80 年」という時間を経ることにより徐々に浮かび上がる中で、戦無派世代の表現者たちによる戦争記憶の表現の試み³¹が増えつつある点が挙げられる³²。そして、その際に戦争の記憶と密接に結びついている今日の現場を撮影し、再解釈していく実践的な表現の試みが進展しつつあることも見過ごせない。具体的には、ビジュアルな表現手法を取り入れた社会調査³³への関心が高まる中で、例えば 8 月 6 日の広島平和記念公園で祈る人びとを記録したビジュアル・エスノグラフィ³⁴や、戦争体験者自身がかつての戦場を再訪し映像を制作する過程で自らのトラウマ体験を相対化してきた過程に関する研究³⁵に見られる通り、戦争の傷跡を残す場所を現在の私たちがいかに受け止めているのかを、映像作品の制作を通じて再帰的に表現することを模索していく研究動向が窺える。特に近年の関連研究では、体験者（当事者）の抱える計り知れない経験との相互作用を通じて非体験者（非当事者）が自己や社会への「問いなおし」を重ねることで、従来の戦争体験が喚起してきた教訓やスローガンの「凡庸化・陳腐化」³⁶を乗り越えつつ、継承への新たな可能性を拓きうること³⁷が論じ

³¹ 大川史織編 2021『なぜ戦争をえがくのか—戦争を知らない表現者たちの歴史実践』みずき書林。

³² 上野（2022）、前掲論文、38 頁。

³³ 松尾浩一郎 2017「社会調査のなかの表現—失われた技術の再発見を」『社会と調査』19、5-12 頁。

³⁴ 松尾浩一郎・根本雅也・小倉康嗣編 2018『原爆をまなざす人びと—広島平和記念公園八月六日のビジュアル・エスノグラフィ』新曜社。

³⁵ 西村明 2020「架橋としての視覚物—戦地訪問映像を中心に」『日本オーラル・ヒストリー研究』16、27-37 頁。

³⁶ 「「風化」という言葉の意味が、かつて起こった出来事の記憶が薄れゆくことを指すのではなく、記号としてのヒロシマがこれまで呼び起こしてきたさまざまな意味や警告やスローガンの凡庸化・陳腐化ということを指しているとすれば、「ヒロシマの風化」は否めない事実にちがいない。」（米山リサ〔小沢弘明・小澤祥子・小田島勝浩訳〕 1999=2005『広島：記憶のポリティクス』岩波書店、viii 頁。）

³⁷ 小倉康嗣 2017「参与する知を仕掛けていくパフォーマンス的な調査表現：関わりの構築へ」『社会と調査』19、44-55 頁；小倉康嗣 2021「「亡くなる記憶」をサバイブする—＜触れられない経験＞の積極性をめぐって—」『サバイバーの

られており、以上のビジュアルな表現を活用した既存研究もこうした文脈上に位置付けられると考えられる。よって、「記憶の継承ラボ」による写真展も、戦争・戦後体験やその記憶にまつわる各地の現場に撮影行為を介して「参与」しつつ、さらには展示の制作や参加者との対話を通じて内省を深めていく点で、上述した関連先行研究との共通項を有していると言える。

ただし、本展では既存研究の多くで用いられる傾向にある「映像（動画）」ではなく、「写真（静止画）」の持つ可能性に期待を託している点が特徴的である。すなわち、一見すると写真はある光景の一瞬を切り取った静止画であるため、映像（動画）のほうが現場のリアリティを写真よりも豊かに伝えることが出来ると考えられがちであるかもしれない。しかし、逆説的ではあるものの、そうした一枚一枚の写真のフレームには収めきれない現実の複雑性や歴史性に直面する中で写真は残されつつ、未来へと託されていくからこそ、それらを眼差す私たちはそこに写されたものだけではなく、「写されていないもの」や「写し切れなかった事柄」など、それぞれの写真の背後にある様々な文脈を、自身の経験とも応答させながら主体的に想起していくことが出来るのではないだろうか。例えば、沖縄や長崎、アウシュヴィッツなど、世界各地の戦禍の現場を長年撮影し続けてきた写真家の大石芳野氏は、社会学者の鶴見和子氏との対談において以下のように述べている。

「写真って一枚一枚だと見る人が向かい合って対話することができる、写っている人と。私のはドキュメンタリー写真ですから、キャプションをつけます。それを読みながら写真を見て、そして本人が自分なりに想像力をふくらませて、一生懸命に対話してくれるんです。それを後ろの方から眺めていて、こちらもいろいろ考えさせられます。」³⁸

本書の各地の現場を見つめた写真表現から、今は目には見えないものの、確

社会学』ミネルヴァ書房、47-104 頁。

³⁸ 大石芳野・鶴見和子『魂との出会い—写真家と社会学者の対話』藤原書店、122-123 頁。

かに現在へと続いている戦争と「戦後」の出来事やその記憶について、それぞれの形で思いを巡らせて頂ければ幸いである。

そして二つに、この写真展では、各地域において激動する「戦後」という現実と向き合い続けてきた「生活者の思想的営為」にとりわけ力点を置きながら表現を試みている。私たちの多くが普段自明なものとして捉えがちな「戦後」という時間的、空間的な枠組みを各地域から相対化していくべき必要性については既に述べた通りである。その上で、アジア・太平洋戦争を辛くも生き残った人びとの「戦後」の出発点における思想的営為に内包されていた複雑さとその可能性、さらには、私たちの生きる現在への連続性を再想像していくことが、「ポスト体験時代の記憶の継承」に向けた重要な手がかりの一つとなりうることを本展では提起したい。すなわち、敗戦による廃墟から出発し、非軍事化した戦後日本社会を生きる人びとは、大戦へと雪崩れ込んでいった戦前までの観念的な考え方とは一線を画しつつ、常に緊張感に満ち、具体的な思考を要求する各々の現場から、自らになしうることを模索していった³⁹。その際に、とりわけ大戦を生き残った人びとが重んじたのは、戦時下に日陰に置かれてきた生命を含む「暮らし」である⁴⁰。言い換えれば、そこには戦前まで理想視されてきた禁欲的な「強い」個人ではなく、生活の現場を持つ一人ひとりが「弱さ、あいまいさ、あやうさ、もろさ」⁴¹を抱える「弱い」個人として、自らの生きる現実と絶えず折り合いをつけながら行動してゆく思想的な営為が息づいていたと言える。容易なことではないものの、そこには再び戦争を繰り返さないために体験や記憶の継承を切り拓いてきた人びとによる、「弱さ」を介した連帯の可能性も見出すことができるのではないだろうか。ゆえに、こうした戦争、敗戦、占領という未曾有の歴史的経験の意味を問い直しながら日常の生活を懸命に繋ぎ続けてきた人びと

³⁹ 桜井哲夫 2007『可能性としての「戦後」—日本人は廃墟からどのように「自由」を追求したか』平凡社、230-242 頁。

⁴⁰ 鹿野政直 2002『日本の近代思想』岩波書店。

⁴¹ 天野正子 1996『「生活者」とはだれか—自律的市民像の系譜』中央公論社、184 頁。

の見過ごされがちな模索の中に、「ポスト体験時代」における記憶の継承の可能性を丁寧に読み取り直していきたい。

4. 本書の構成

昨年の写真展の会期中は、連日の猛暑にも関わらず、学内外から 50 名以上の参加者に来場して頂くと共に、「記憶の継承ラボ」の一員としてこれまで撮影を続けてきた筆者から撮影写真に関するギャラリートーク（各回 30 分程度）も毎日実施する中で、それぞれの写真に込めた思いについて詳細な解説を実施した。参加者の方々が熱心に耳を傾けて下さると共に、各自にとって身近な地域での戦争や「戦後」の経験について対話させて頂く機会にも恵まれたことを、改めて厚く御礼申し上げます。以上を踏まえ、最後に本書の構成について述べておきたい。第一部「＜「記憶の継承」の現場からの写真報告＞「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」は、会期中の展示をもとに、その後の活動も加えて再構成しつつ「記憶の継承」の現場を表現した写真記録である。具体的に、第一部ではまず「記憶の継承ラボ」が長崎や沖縄などの各地へのフィールドワークを重ねる契機となった写真家・東松照明の足跡から見えてきた「戦後」の暮らしについて概観していく。特に、文字資料や口述記録に比べて従来あまり活用されてこなかったビジュアル資料に近年関心が高まる中で、日本近現代史を中心として従来の歴史叙述の対象外とされてきた庶民の生活を浮き彫りにし得る写真の可能性に期待が寄せられている。しかし、写真資料は依然として十分に活用されているとは言い難く、さらには、これらの既存研究において写真は過去の特定の時代や社会を描写するための客体的な資料として用いられがちであった。つまり、東松ら写真家たちが「戦後」の現実の衝撃から撮影へと駆り立てられていく中で何を未来へ託そうとしていったのかは見過ごされたままであるという課題が見えてきたのである。そこで、ここでは写真家の撮影行為を介した当時の視点からその生活の現実を捉え直す独自の方法論として筆者らが開拓してきた「写真実践」より、東松が伝え継いでいった「戦後」の生活者の経

験について具体化していく。その上で、私たちが実際の現場に身を置く中で「写真」と「ことば」の両面から表現することを試みた「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」について描いていきたい。とりわけ、本展では、体験者と非体験者を繋ぎながら各地域の中で共に生きてきた「伴走者」としての実践者の方々による模索を眼差している。

そして、「第二部＜応答＞ 写真展に参加して」では、当日の写真展に参加してくれた 8 名の若手研究者や実践者たちによる展示への応答を収録することが出来た。まず、社会学の視点から藤阪希海氏（大阪大学人間科学研究科 DC／日本学術振興会特別研究員 DC2）、上官世聰氏（大阪大学人間科学研究科 DC）、また、哲学や現象学の視点から織田和明氏（大阪大学人間科学研究科助教）、中谷碩岐氏（大阪大学人間科学研究科 DC／日本学術振興会特別研究員 DC1）、瀧口隆氏（高校教員）、環境学・地域研究の視点から冷昕媛氏（大阪大学人間科学研究科 DC）、朝木日力格氏（大阪大学人間科学研究科 DC）、そして表現活動の現場から井上恵子氏（イロリムラギャラリー）が、写真展における各々の経験を内省しつつ、「戦後」の記憶とその表現について更に思考を巡らせてくれた。さらに、本書の監修を務めて頂いた三好恵真子氏（大阪大学人間科学研究科）には、情報化がより一層加速していく昨今の社会状況を前にして、ヒューマニズムに基づいた一人ひとりの経験を見つめ続けていくべき重要性を「監修者の言葉」として寄せて頂いた。是非、味読して頂ければ幸いである。

近代日本における 1868 年の明治維新からアジア・太平洋戦争の終結する 1945 年までの 70 数年という時間よりも、それから現在へと至る 80 年以上の時の流れのほうの方が長さを有しているという事実は、「戦後」という歳月の重みを私たちに改めて実感させる。その一方で、これまで戦争と「戦後」の体験を命がけで語り継いできた人びとや、彼ら彼女たちを日常の暮らしの中で支えながら共に生きてきた人びとが年を追うごとにこの世を去っているという、避けられない現実がある。いま、「ポスト体験時代」の戸口に立つ私たちが、戦争と「戦後」にまつわる記憶の継承とその対話の可能性を拓いていくために、ささやかながら本書がその一助となることを祈念したい。

目 次

刊行に寄せて「ポスト体験時代」へと向かういま問い直す「戦後」の生活者の思想的営為	吉成哲平 i
--	--------

第一部 <「記憶の継承」の現場からの写真報告> 「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在

第一部に際して

写真家・東松照明が伝え続けた「戦後」と向き合う人びとの暮らし——「写真実践」よりたどり直すことで見えてきた表現への模索	吉成哲平 7
---	--------

写真報告

「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在	吉成哲平 25
------------------------	---------

第二部 <応答> 写真展に参加して

レスポンス①

届かない海のおいと、見る身体	藤阪希海 55
----------------	---------

レスポンス②

伴走する写真家へ	織田和明 63
----------	---------

レスポンス③

生活者はいかに「生き延びる」のか——コザと内モンゴル、狭間に生きる人びとの思想	朝木日力格 67
---	----------

レスポンス④

写真を通じて「平和」を考える——日常の記憶と市民のつながりから	冷昕媛 77
---------------------------------	--------

レスポンス⑤

写真展を契機とした生活者の思想の継承と実践者の役割に関する一考察.....上官世璵 81

レスポンス⑥

イメージが出来事を保存するために.....瀧口隆 87

レスポンス⑦

カントと一緒に写真展に行く.....中谷碩岐 91

レスポンス⑧

写真の力.....井上恵子 95

コラム

その他参加者の声.....97

監修者の言葉「多層的な「歴史の厚み」への回路——矛盾や葛藤を抱え傷ついた人々の暮らしに寄り添い共に生きるということ」
.....三好恵真子 99

附録:写真展案内用チラシ.....127

執筆者紹介.....129

あとがき.....吉成哲平 133

第一部 <「記憶の継承」の現場からの写真報告>

「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在



沖縄市 2025 年 12 月 © Teppei Yoshinari

「私が試みているのは、戦争というものと、そのために命運を賭けなければならなかった人間とを、よりひらけた視野のもとで、戦後の時代を見通した展望のもとで、見直そうとすることである。今日のわれわれは、あの戦争を戦ったわれわれと同心同体であり、それ故にあの戦争が自分にとって真実何であったかを改めて発見することが、いまわれわれが戦争とは無関係な場でどのような批判を持とうとするかに先立って、緊要な課題であると私には思われるのである。」

吉田満『戦艦大和ノ最期』（1974 年）

「戦争は私たちに多くの傷を負わせ、その一人一人に深い孤独をもたらしました。戦争を通じて、私たち一人一人の間には理解しがたい断絶が置かれ、その断絶のおのおのの側で私たちは深く自分の内部を見つめ、自分の力で自分自身の魂にかかわる問題を解決して行かなければならなくなりました。／このような場所で、私たちが相互の内部にある孤独を理解しえないまでも、たがいに尊重するようになるとき、私たちの間に深い真剣ないみでの連帯が回復されるという確信は、とりわけ、現代のような不幸な精神的状況のなかで、真剣な問題意識をもって生きて行こうとする場合に、大きな意味をもって来ます。」

石原吉郎「肉親へあてた手紙」『望郷と海』（1972 年）





長崎 爆心地公園 2020 年 3 月 © Teppei Yoshinari



沖縄 平和祈念公園 2023 年 3 月 © Teppei Yoshinari

第一部に際して

写真家・東松照明が伝え続けた「戦後」と向き合う人びとの暮らし——「写真実践」よりたどり直すことで見えてきた表現への模索

吉成 哲平*

1. はじめに

本書「刊行に寄せて」において触れたように、私たち「記憶の継承ラボ」が各地において戦争・戦後体験やその記憶の継承に尽力する人びとと出会う重要な契機をなしたのは、「戦後写真の巨人」とも称され、被爆後の長崎や「復帰」に揺れる沖縄をはじめ敗戦後を生きる人びとの暮らしを見つめ続けた写真家・東松照明（1930-2012）の撮影表現の軌跡を、長崎と沖縄の現場からたどり直していったことであった。従って、第一部「＜「記憶の継承」の現場からの写真報告＞「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」に際して、ここではまず写真展示の背景として、これまで筆者らが後述の「写真実践」という独自の方法論を開拓することで明らかにしてきた、東松照明の表現し続けた「戦後」の生活（吉成・三好 2021, 2022a, 2022b, 2022c, 2023a, 2023b, 2025b, 2026）について概観しておきたい。

「写真実践」という独自の方法論の構築に関しては筆者らの既報（吉成・三好 2024, 2025a）にて詳述しているが、近年、映像アーカイブズの整備に

* 大阪大学人間科学研究科・特任助教

伴い過去の記録映像へのアクセスや研究の検証が容易となってきたこと（石田 2015）も背景としつつ、既存研究では見過ごされがちであったビジュアル資料への関心が高まっている（安岡 2020）。しかし、とりわけ写真資料を用いた先行研究では、人びとの戦争や戦後の体験を記録した写真資料は依然として十分に活用されているとは言い難い現状にある。加えて、その際に写真資料が客体的に用いられることで、激動する社会と向き合いながら刻々と撮り続けていく写真家たちの撮影行為を介した「思索の深まり」が、概して見落とされがちであったことが浮かび上がってきた。

そこで、これまで筆者らは自身の十数年にわたる撮影経験での身体感覚にも後押しされつつ「写真実践」（吉成 2021）という独自の方法論を開拓してきた。ここで言う「写真実践」とは、写真家たちが刻々と残していった多様な表現媒体を渉猟し、当時の歴史的状況も踏まえた上で、彼ら彼女たちが撮影行為を介して受け止めながら表現し続けた現実を体系的に捉え直す方法論である。この方法論は、現在から過去を回顧するのではなく、写真家たちが見えない未来を眼差しつつ撮影を続けていった当時の視点に降り立つことに加えて、彼ら彼女たちの見つめた現場に筆者らが足を運びつつ、再帰的な撮影活動も積み重ねながら相補的に論証していくことを特徴としている。言い換えれば、自らも現場に赴きカメラを構えつつ、写真家たちが撮影行為を介した当時の視点に接近しながら、彼ら彼女たちが「なぜシャッターを切っていたのか」を問い直している。

よって以下では、まず第2章において既存の写真研究における写真資料の用いられ方を確認し、これらの先行研究においては見過ごされがちであった視角として、写真資料を残した写真家たち自身の記録への葛藤や模索にこそ目を向ける必要があることを、とりわけ彼らが社会を意識的に記録し始めていった1930年代から戦中戦後への連続性を辿り直すことで把握していく。その上で、東松の写真家としての歩みとその記録表現を巡る模索もまた、敗戦後の社会が再建されていく激動する時代状況と不可分に結びついていたことを踏まえつつ、彼の見つめ続けた「戦後」の暮らしを「写真実践」より体系的に捉え直していく必要があることを具体的に論じたい。そして、第3

章では以上の「写真実践」より浮かび上がってきた、東松照明が表現し続けた「戦後」の生活について、筆者らがこれまで明らかにしてきた研究成果を紹介する。最後に、第4章では東松照明らがいつかこれらの写真が眼差される「未来」へ託していった事柄について考察しつつ、彼の足跡を辿り始める中で次第に拓かれていった「記憶の継承ラボ」による写真報告へと繋げていきたい。

2. 近代日本における写真家たちの社会への眼差しを踏まえた日本写真史における東松照明の位置付け

これまで写真研究は、写真史や写真論における著名な写真家の作家論が中心であり、「表現の歴史」としての側面に光が当てられてきた。他方で、1980年代の写真史料の社会史的研究（佐藤 1994；多木 1988=2002）を契機としてこうした既存研究とは一線を画しつつ、写真研究は社会学や歴史学、民俗学、建築史等の諸領域へ展開してきた（葦名 2008）。とりわけ、歴史学（日本近現代史）においては被写体の持つ記録や歴史史料としての価値の高さが注目され、文字資料や口述記録では記憶されない庶民の生活を解明し得ること（島津 2009；有馬 2010）に期待が寄せられている。しかし、総じて写真資料の活用は依然として途上にあり、それは戦後史の叙述においても同様であること（大門 2012）が分かる。

こうした社会学や歴史学の領域への写真研究の開拓に敬意を払いながらも見過ごすことが出来ないのは、これらの既存研究では、当時の社会における写真の受容や、その時代の全体像を描くための客体的な資料として写真が位置づけられがちな点である。具体的には、写真には撮影者や編集者による選択と編集が加えられることや公表されない危険性もある等、「強い政治性あるいは志向性をもつ史料」（井上 2016: 48）であるため、写真の撮影場所や時間を含む来歴などの歴史的、社会的な文脈を精査する必要性（島津 2009；井上 2016）が論じられてきた。こうした指摘は重要であるものの、それらを残した当の写真家自身が撮影行為を介して眼前の現実をいかに記

録し、表現しようとしたのかについては見落とされがちな課題が浮かび上がってくる。とりわけその際に、社会的存在としての写真家が、戦時から戦後への社会変容を前に、絶えず自らの写真表現や記録のあり方を模索していきながら刻々とシャッターを切っていった側面にも目を向けていく必要があると考えられる。

そこで、写真家たちはいかに社会と向き合いながら記録していくようになっていったのかについて、ここでは関連先行研究（楠本 2008；金子 2012）を踏まえながら簡単に確認しておきたい。まず、その大前提として把握しておく必要があるのは、日本社会では、アジア・太平洋戦争へと突入していく 1930 年代以降に、写真による社会の記録が本格化していった点である。具体的には、幕末・明治期の日本への写真技術の導入後、写真の持つ記録性を社会に活用しようと様々に試みられ始めたものの、写真が社会的な伝達メディアとして機能するためには、それを精密に大量複製することが可能な写真印刷技術というインフラの整備を待つ必要であった。そのため、日清・日露戦争を経た 1920 年代に入ると、「グラフ雑誌」に象徴されるように、写真はその独自の表現力を駆使することで世論を喚起する視覚メディアとして発達していくことになる（金子 2012: 82-83）。いわゆる「グラフ・ジャーナリズム」の成立である。さらには、その後 1930 年代前半にかけてヨーロッパを軸に写真表現が革新されていった同時代状況にも刺激を受けながら、日本では「報道写真（ルポルタージュ・フォト）」¹というジャンルが形成されていった。ここにおいて、社会の現実を写真によって意識的ないし批判的に捉えつつ、さらには社会全体を導いていこうとする意識や方法が芽生えていったのである（金子 2012: 84；楠本 2008: 127-128）。

¹ 「報道写真（組写真）」は、編集者であり写真家でもあった名取洋之助が第二次大戦前の 1930 年代にドイツから日本へ導入した「ルポルタージュ・フォト」を源流としている。それは、文章が中心であった従来の記事誌面へ新たに写真を中心に据えて組むことで、社会的な出来事をストーリーとして説明することを試みるという新たな写真の使い方を指す手法であった（楠本 2008: 127）。

しかし、1931 年の満州事変の勃発以降、日本が国際的な孤立を深める状況を打開するために対外宣伝政策が強化されていく過程で、「報道写真」は戦争遂行のプロパガンダとしての役割を担わざるを得なくなっていた。ただし、ここで留意すべきは、とりわけ濱谷浩や土門拳ら当時の写真家たちは、「戦争宣伝」という限られた伝達の枠組みの中にありながらも、一人の写真家として「写真の社会性をいかに獲得し実践するか」（金子 2012: 90）という切実な課題と格闘していったことである。こうした戦時下における模索は、その後、敗戦からまだまもない 1950 年代前半にかけて社会の現実を克明に記録しようとした「リアリズム写真運動」へと繋がっていく（金子 2012: 90）。このように戦前、戦中、戦後の時代を貫きながら、それぞれの写真家たちの社会への眼差しが形成されてきた中で、東松照明も敗戦後の「リアリズム写真運動」からの刺激と戦争報道を担った「報道写真」への反発を抱えつつ、1950 年代から本格的に写真家としての活動を展開していったことは、彼が残した写真表現を今日読み解き直す上で見逃せない。

そしてその際に、東松が激動する社会を見つめていくことを可能にした当時の歴史的状況としては、戦後復興期におけるカメラ技術の急速な大衆化もその活動を後押ししていたと考えられる。特に、1950 年の朝鮮戦争の勃発に伴い戦争報道が活発化する中でアマチュアたちの間でカメラ・ブームが生じた（山田 2003: 160）。さらには、こうしたカメラ市場の拡大に伴う 1950 年代以降の写真雑誌や週刊誌の刊行ラッシュにより、写真家たちは新たな活動の場を開拓していった（鳥原 2008: 71-73）。同じく 1950 年には日本写真家協会（Japan Professional Photographers Society : JPS）も創設されるなど、この時期にかけて「写真家」という職業の社会的な基盤が整っていったこと（鳥原 2008: 58）が分かる。次章で述べるように、こうして写真表現の新たな時代が到来する中で東松も学生時代にカメラ雑誌への投稿を始め、その後、「報道写真」を開拓した名取洋之助が編集長であった『岩波写真文庫』に数年間勤務したのち、1956 年からフリーランスの写真家として列島各地で精力的に撮影を展開していった。すなわち、戦時期と対日占領期における出版や表現の自由を巡る制約を経ながらも、敗戦後の社会が立ち上がっていく

「ダイナミズム」を広く伝えていくことが可能となっていた時代と軌を一にするようにして、東松は「アマチュア」から出発しながら「戦後」の暮らしを撮り続けていったのである。

その一方で、既報（吉成・三好 2021）にて論じた通り、戦後日本写真史（岸 1974；飯沢 2008；鳥原 2013a）において、東松照明は前世代までの「報道写真」や「リアリズム写真」に続く写真表現の第二の潮流であり、写真ならではの記録性やレンズの描写力などの視覚的な効果を重視しつつ、「個」としての視点からの映像表現を特徴とする「映像派」の写真家の一人として位置付けられてきた。しかしながら、これらの既存研究では、「戦後」の現実をいかに記録するのかを問い続けた当時の彼の撮影の立ち位置が等閑視されがちであり、概して敗戦後の社会を告発した「社会派」であり「映像派」としての写真家像が定型的に描かれてきたために、その作品は抽象的なイメージとして論じられがちであったことが見えてくる。それは、例えば作家の大竹昭子による後年のインタビューにおいて、「基地を告発しようとも思わない。...違う、違うと言っても、いつも社会派のレッテルを貼られちゃう」（大竹 2004: 12-13）と彼自身が発言していたことから窺える。特に、上述してきた「社会と向き合う中で模索されていく写真家の記録表現」という観点から留意すべきは、東松が 15 歳という「もっとも感じやすい年齢」であり、「少年から青年へと脱皮する時期」（東松 1987: 142）において敗戦と占領を鮮烈に体験したことが、戦後日本社会に対する彼の眼差しを根底から規定していった側面である。従って、「写真実践」という独自の方法論より撮影行為を介した東松の当時の視点へと接近していくことで、その戦争・戦後体験に根ざして表現され続けた「戦後」の暮らしを体系的に捉え直していく必要があることが浮き彫りとなってくる。

3. 東松照明らが表現し続けた、見過ごされた「戦後」の生活者の思想的営為

以上の「写真実践」により東松照明らの足跡を辿り直すことで明らかにし

てきたのは、敗戦後の急速な「アメリカニゼーション」に翻弄され、葛藤を抱えながらも、各地域に暮らす人びとが脈々と営み続けた「戦後」の思想的営為である。詳細は前述した筆者らの既報を参照して頂きたいが、ここではそれぞれの概要について整理することで、東松照明が「戦後」という現実との距離を、撮影行為を介して絶えず埋めていこうとした模索の重みが見えてきたことを具体的に述べておきたい。

1) 東松照明の撮影活動の原点としての敗戦後の「アメリカニゼーション」とその影

まず、戦時中に少年時代を送った東松の撮影活動の原点となったのは、終戦後、故郷である名古屋の町に突如として現れた米軍基地に象徴される「アメリカニゼーション」への鮮烈な衝撃であった。とりわけ 1950 年代から半世紀以上にわたる彼の撮影活動を規定した原体験として注視すべきは、敗戦と占領を通じて、彼が「占領者」であるアメリカへの相反する複雑な胸中を抱えていったことである。後年の東松は、以下の通りそれを「戦争の影」とあると記していた。

「戦後、そして現在もなお、私が引き摺っているのは、戦争そのものの記憶ではなく、戦争の影である。戦争の影には、戦中の被害体験、敗戦の記憶、戦後の飢餓感が色濃く滲んでいる。(中略) 振り返って思うに、私の写真は、おおかた戦争の影に覆われている。一見戦争とは無関係に見える写真でも、深層に戦争が影を落としていることが多い。」
(東松 1987: 142)

すなわち、敗戦後の極度の食糧難による飢餓地獄の中で、それまで大人たちから「鬼畜生」と教えられてきた米兵たちはチューイングガムとチョコレートを配る一方、進駐軍により基地周辺の町は塗りがえられ、そこで東松は駐留する兵士たちとの間に生まれた子どもたちの姿を目にするようになる。他方で、戦争を推し進めた大人たちへの不信感も募らせていた。その根底では、

空襲の廃墟の中で目の当たりにした死者たちの存在を受け止めていたのである。

こうした傷跡としての「戦争の影」を抱えながら、東松が写真家として活動し始めた 1950 年代から 60 年代前半にかけての足跡からは、戦後日本社会が復興から高度成長へと急速に進む変化に直面し、葛藤する人びとの暮らしが浮かび上がってくる。特に敗戦後の日本では、戦時下において軽んじられてきた「暮らし」への関心が高まる中で、彼自身も敗戦を経験した一人の生活者としての共感に根ざしつつ、人びとが生活の中で様々な困難や矛盾を抱えながらも日常を生きて抜いていこうとする様子を刻々と写真に残していった点に留意したい。

しかし、「アメリカニゼーション」のもたらす「豊かさ」に人びとが魅了されていく一方、朝鮮戦争や 60 年安保を経て日米の結びつきが着実に深化する中で、東松は「二つの顔」に分裂したアメリカに直面していくことになる。彼は、次のようにその変化を鋭敏に捉えていたことが分かる。

「敗戦から今日までの 22 年間、世界情勢はめまぐるしく変化してきた。それに合わせて米軍の占領目的が移り、基地は敏感に反応して表情を変えた。敗戦当時、日本の基地は、デモクラシーの番兵の駐屯地だった、とあえていおう。ところが、朝鮮戦争を契機として、そしていまベトナムに飛火した戦争の下で、日本の基地は、米軍の兵站・補給地としてその性格を変えたのである。ここにはぼくたちは、日本にデモクラシーの種子を撒いたアメリカと育ちかけた民主主義の芽をつむアメリカを、時の推移のなかで変貌したアメリカの二つの顔を見る。」(東松 1967)

このように、日本本土では米軍基地が次第に見えにくくなっていきながら、敗戦後の軍事的暴力の記憶が忘却されていくという当時の状況下で、東松は肥大化する国家によって再び翻弄されていく人びとの暮らしを、「傍観者」としてではなく「参加者の眼」から共に見つめていった。それゆえ、東松に

とって戦後の「アメリカニゼーション」には、かつての戦争がもたらした忘れてはならない死が内包されていたことも具体化された(吉成・三好 2022a)。

2)「写真 100 年」への内省から写真家たちが向き合っていた 1970 年前後の現実

さらに、1960 年代後半から 70 年代初頭にかけては、高度成長を成し遂げた「豊かな社会」の影で、学生運動や公害問題、日米安保改定などの各地で様々なひずみが噴出していく。とりわけ、明治維新から 1 世紀という国民国家としての近代日本の発展の歩みが国を挙げて称揚された 1968 年当時、幕末・明治維新から敗戦までの写真表現の歴史を初めて体系化した「写真 100 年—日本人による写真表現の歴史」展を通じて東松ら写真家たちが内省していたのが、「進歩」の影で忘れ去られてきた人びとの窮状である。前章にて述べたように、その際にかつての戦時期の写真家たちがプロパガンダに加担することで「自立した思想の拠点」を持ち得なかったという「負の過去」と向き合わざるを得なかったことに目を向けたい。それゆえ、当時の写真家たちは「写真 100 年」という歴史を内省する中で、一見すると「平和」な日常の中で見過ごされた同時代の現実をいかに伝えることが出来るのかを、それぞれの現場から模索していったのである。すなわち、そこには被写体の「代弁者」として目の前の現実を写真により告発していった桑原史成や、写真の「匿名性」を重視しつつ、記録としての写真を即物的に残そうとした中平卓馬などのそれぞれに異なる撮影の立ち位置の中で、東松は眼前の現実との「距離」を、撮り続けることで絶えず埋めていこうとしたことが浮かび上がってきた(吉成・三好 2023a)。

3)「基地の中に沖縄がある」という現実と向き合う

そして、こうした 1970 年前後の揺れ動く現実と向き合う写真家たちの各々の模索の中で、東松が鮮烈な衝撃とともに直面したのが、当時、米軍統治下にあり、彼自身が「基地の中に沖縄がある」と称した現実であった。すなわち、東松は 1969 年に初めて沖縄を訪問することで、「復帰」に向けた機

運が日本本土においても醸成されながらも、沖縄の現実について「本当のところは、なにもわかっていなかった」（東松 1970: 138-139）ことを内省していったのである。それゆえ、彼は日米の狭間で不安定な生活を余儀なくされる人びとの暮らしを、本土に暮らす「私たち」の問いとして拓いていったことが見えてきた。ここで特に重要であるのは、東松が「本土の人間の一人」として日本本土と沖縄との数世紀にわたる非対称的な関係性の歴史を遡りながら、日米の狭間に置かれた沖縄に生きる人びとの暮らしを凝視していく中で、沖縄の復帰を容易には肯定し得ない複雑な葛藤を以下の通り抱えていた点である。

「ところで、その日本の平和憲法はいま空文化していないか、現体制を支えているのは結局ぼくたち自身ではないか、などと考えるときぼくは、沖縄の「即時無条件全面返還」を願いつつも、祖国の退廃に対して何もし得なかった本土の人間の一人として、性急に「沖縄を返せ」といえないでいる。」（東松 1969: 277）

ただし、同時代の日本社会における状況として見逃せないのは、「豊かさ」が達成される一方、各地域の現場では「表現の自由」が狭まることにより、ジャンルを超えた表現者たちが管理社会化を危惧していたことである。こうした中で、東松は「アマチュアリズム」に根ざしつつ、沖縄で出会った一人ひとりの人生史を聴き取りながら、復帰前後の沖縄での表現を模索していったことが分かる。それは、人間としての生の営為の中で問い続ける撮影を介した表現行為に結実し、現場での「私」の経験から常に生み出してゆく表現（「私性」）を、同じ時代を生きる人びとにだけでなく、未来へと拓こうとする模索（「公性」）であったことが浮き彫りとなってきた（吉成・三好 2023b）。

こうした復帰前後の沖縄での記録を巡る模索の中で、東松は沖縄から東南アジアまで足を延ばしつつ、復帰後の島々の暮らしをさらに深く見つめていく。特に、施政権返還後の沖縄において開発と観光が急速に広がっていくという歴史的状況に鑑みれば、「復帰」により人びとの暮らしぶりが変容を迫

られていくという「複雑なシマの表情」と出会っていったことを特筆しておきたい。すなわち、東松はそれでも脈々と続いていく人びとの日々の暮らしから、都市では失われゆく「生活の実感」を確かめ直しながらも、開発や観光の影で見えにくくなっていく沖縄戦とベトナム戦争という二重の「戦後」の現実を伝えようとしていったのである。例えば、日本本土からの観光客で賑わう久米島の海辺が内包している沖縄戦の癒えない傷跡について学ぶ中で次のように問いかけていた。

「空はあくまで青く、海は透明で美しい。この、のどかな風景から、戦争のイメージを引き出すのは難しい。8月の海辺で、戦争を知らない子供たちが、キャッキッと騒いでいた。ヤマトからやって来た観光客は、有り余る光のなかで肌を焼き、南島の夏を楽しんでいた。」（東松 1980: 127）

ただし、このとき東松は「本土の人間」としての立ち位置から撮影することへの限界性も自覚していたことに留意したい。だからこそ、沖縄で育った写真家たちの表現に期待を寄せながら、自らの立場の中で沖縄の生活の現実を表現し続けていこうとしていたことも明らかとなってきた（吉成・三好 2025b）。特に、復帰運動の高揚していた当時の沖縄では、比嘉康雄や平良孝七ら当時の若手を中心とする写真家たちが激動する眼前の現実を記録していくために活発な活動を展開しており、東松の来沖は彼ら彼女たちを刺激していった。それゆえ、東松を軸に沖縄の写真家たちとの相互の触発とその距離について具体化することで見えてきたのは、比嘉や平良が沖縄闘争において過熱していく報道からは次第に距離を置いていく一方、復帰を挟んで確実に変化し、消えていく日常の暮らしの風景を記録として残しつつ表現し続けていったことであった。すなわち、東松がそうであったように、比嘉や平良もまた「生きること」と「撮ること」が表裏一体となりながら、「生れ島」としての沖縄の生活を伝え継ごうとしていったのである（吉成・三好 2026）。

4)「生活者」としての長崎の被爆者の日常から見出されていった東アジア

さらには、沖縄と並行しつつ、東松が現場における見過ごされた「戦後」の現実の衝撃に突き動かされるようにライフワークとして撮り続けていったのが、1960年代初頭から数十年以上をかけて見つめ続けた長崎に生きる人びとの暮らしであった。その原点には、被爆から十数年が経過し街は復興を遂げながらも、「死をまぬがれた多くの被爆者」が「＜11 時 02 分＞で停止した時と、1945 年 8 月 9 日を基点とする現在進行形の時間」という引き裂かれた二つの時を生きている現実を知った衝撃があったことが分かる。それゆえ、被爆者と非体験者との間に広がる原爆の閃光を「〈見た〉と、〈見ない〉の距離」を、撮り続けることで埋めていこうとしていったのである。

しかし、東松が撮影現場において抱えたのは、筆舌に尽くし難い身心の傷跡を抱える被爆者を写すことへの「ためらい」であった。一例を挙げるならば、被爆者である福田須磨子氏の撮影を巡って、彼女の逝去後、以下の通り顧みていたことがそれを象徴的に表している。

「あのとき、あなたは、気おくれして写真も撮れずにいた私を逆に励ましてくれました。そして、すすんでカメラの前に立ってくださいました。(中略)そう、あなたは、「私でないと出来ないもの」としてカメラの前に立たれました。では、そういうあなたを撮った私自身は、私でないと出来ないこととしてシャッターを切っただろうかと。」(東松 1977: 22)。

このようにして東松は一人ひとりの被爆者との間に関係性を築きながら、代替不能なそれぞれの生と死を写真により「証し」として残していったことが分かる。「(注：被爆者は) 日常はいつもいつも『被爆者』を意識して生きてるわけではない。一人の生活者として生きてるわけですから、私はその生きざまをまるごとつかむ、というふうに変っていく」(東松・中里 2001: 15)と晩年に述べていたことから窺えるように、最も重要なのは、「被爆者」としてではなく、激動する戦中戦後の時代を共に生き抜いてきた「生活者」

として捉え直していったことが見えてきたことである（吉成・三好 2021）。

さらに晩年の東松は、長崎に移住する中で、同地での「町歩き」を深めつつ、その「チャンポン文化」に魅せられていく。つまり、長崎を「被爆都市」として捉えるのみならず、近世の開港以来、長崎の街が経てきたキリシタン弾圧や中国との結びつきなどをはじめとして、様々な出自を持ちつつも数世紀にわたり生きてきたひとびとの暮らしの営みを見つめていった。その過程で、長崎や沖縄、福建（中国）という「東シナ海をめぐるトライ・アングル」を結びながら連綿と続いてきた歴史の厚みを受け止めていったことが具体化されたのである（吉成・三好 2022b）。

4. 東松が未来へ託した写真が今日の私たちに投げかける示唆

以上の通り、独自の方法論としての「写真実践」よりこれまで解明してきたのは、東松自身が少年期に敗戦と占領という未曾有の出来事を潜り抜けていった戦争体験者でありながらも、長崎や沖縄を筆頭に「戦後」の発展の影で忘却されていく暮らしの現実と直面し、一人の写真家としてなしうることを絶えず内省する中で、各地域に生きる人びととの距離を埋めようとしていったことである。つまり、「伴走者」としての眼差しのもとで記録表現が絶えず刻まれていったことは特筆すべきであると考えられる。そして、その軌跡から見えてきたのは、敗戦後に希求された「豊かな社会」の影で見過ごされてきたひとびとが、各々の暮らしの中で抱え込まざるを得なかった矛盾や葛藤であり、それでも各地域の重層的な歴史の上に続いていく日常の暮らしであった。それは、敗戦後の「アメリカニゼーション」がもたらした複雑な現実を受け止めながらも、東アジアを射程に捉えつつ、「現在の状況に対してできるかぎりのことをつづけてゆく」（鶴見 2005: 19）「弱い個人」としての生活者の思想的営為であったと言える。

ただし、その際に看過できないのは、これらの写真が同時代の記録としてに留まらず、いつかそれが眼差される「未来」へと託されていった点である。

例えば、晩年近くにおいて東松は被爆者の「伴走者」として撮り続けてきた自身の足跡を振り返り、次のように記していたことに注目したい。

「私は原爆反対、核廃絶というスローガンは掲げないけれど、被爆者の日常や非日常を撮り続けることで、その役割が果たせたらいいと思う。一枚の写真が何だか心に引っかかって忘れられずに、原爆問題を考えるきっかけになるような…。21 世紀に向けて、写真でどういうメッセージが残せるかを自分に課している。」（「21 世紀の英知に望み託して 写真家 東松照明さん＜下＞」『長崎新聞』1999 年 7 月 31 日）

概して写真は、過ぎ去った一瞬を切り取った表現媒体として捉えられがちである。しかし、東松ら写真家たちが投げかけていた事柄として忘れてはならないのは、写真に写る過去の出来事をみる「現在」の私たち自身の経験と応答させながら、一人ひとりが次の「未来」への模索を続けていく重要性ではないかと思われる。それは、歴史の産物としての社会に日々生きている私たち自身の過去に対する眼差しとその限界性（モーリス＝スズキ 2013）を問い直すことにも通じていく。

既報（吉成・三好 2025a）で詳述した通り、筆者らも東松の撮影表現の軌跡を長崎と沖縄から辿り直しつつ再帰的な撮影行為も介することにより、当初の現場で鮮烈に実感した被爆や沖縄戦後の出来事と、現在との断絶にも似た距離が徐々に結び直されていった。さらには、シャッターを切っていく一つ一つの風景には、現在の視点からは見えにくい当時の人びとが抱えていた矛盾や葛藤、そして沈黙の中で生きられた歴史が内包されていることも受け止めていくようになった。その際に、日常の暮らしの中で体験者たちを支えつつ記憶の継承に尽力し続けてきた「伴走者」たちから多くの貴重な示唆を得てきたことが、その核心を支えている。以下に続く、現場からの写真報告である「「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」は、そうした長崎、沖縄、水俣、福島の各地域の実践者たちからの学びを通して次第に見えてきた「戦後」の風景を、未来への更なる記憶の継承を祈念しながらまとめ

たものである。各地域の何気ない日々の景色の中に、名前を持つ一人ひとりの暮らしが営まれ続けてきたこと、そして、いまこのときもそれは営まれ続けられていることを感じ取って頂けるのならば幸いである。

分析資料

東松照明 1967『日本』写研。

東松照明 1969「日本国・沖縄県」『アサヒカメラ』1969年7月号、朝日新聞社、123-138頁、275-277頁。

東松照明 1970f「組写真から群写真へ」『アサヒカメラ教室3 スナップ写真』朝日新聞社、135-147頁。

東松照明 1977「福田須磨子様」『野性時代』4(1)、角川書店、22頁。

東松照明 1980「連載《琉球列島》沖縄諸島（東シナ海）」『日本カメラ』1980年4月号、日本カメラ社、16-27,127頁。

東松照明 1987「原光景」、桑原甲子雄編『日本写真全集(4)』小学館、141-144頁。

東松照明・中里喜昭 2001「対談 撮ることと言葉—『長崎マンダラ』展にみる日本論の再構成—」『葦牙』27、6-25頁。

引用参考文献

葦名ふみ 2008「アーカイブズとしての写真資料—国立国会図書館憲政資料室の事例から—」『国文学研究資料館紀要』4、39-81頁。

有馬学 2010「イメージの史料性」『史学雑誌』119(3)、325-327頁。

石田佐恵子 2015「特集「映像アーカイブズを利用した質的調査の探求」によせて」『社会学評論』65(4)、454-464頁。

井上祐子 2016「史料としての写真—写真史料の広がり」と史料化のための課題」『メディア史研究』39、43-62頁。

大門正克 2012「戦後復興と高度成長を生きる—移動と暮らしの視点から」『飯田市歴史研究所年報』10、8-21頁。

大竹昭子 2004『眼の狩人—戦後写真家たちが描いた軌跡』筑摩書房。

- 金子隆一 2012「リアリズムとプロパガンダ：社会へ向けられた写真家のまなざし」『東京都写真美術館紀要』11、81-91 頁。
- 岸哲男 1974『戦後写真史』ダヴィッド社。
- 楠本亜紀 2008「ドキュメンタリー写真の地平、の一步手前」『写真空間1』青弓社、118-143 頁。
- 佐藤健二 1994『風景の生産・風景の解放—メディアのアルケオロジ—』講談社。
- 島津良子 2009「写真史料の調査と資料化」,全国歴史資料保存利用機関連絡協議会編『劣化する戦後写真—写真の資料化と保存・活用』岩田書院、5-51 頁。
- 多木浩二 2002『天皇の肖像』岩波書店。
- 鶴見俊輔 2005『精神革命』の実像」、中村政則ほか編『[新装版] 戦後思想と社会意識』岩波書店、1-24 頁。
- 鳥原学 2008『時代をつくった写真、時代がつくった写真—戦後、写真クロニクル』日本写真企画。
- 鳥原学 2013a『日本写真史（上）—幕末維新から高度成長期まで』中央公論新社。
- 鳥原学 2013b『日本写真史（下）—安定成長期から3・11 後まで』中央公論新社。
- モーリス＝スズキ、テッサ 2013『批判的想像力のために—グローバル化時代の日本』平凡社。
- 安岡健一 2020「ビジュアル資料と研究文化」,『日本オーラル・ヒストリー研究』16、53-57 頁。
- 山田隆 2003「写真コミュニケーションの社会史」『東海女子大学紀要』22、159-175 頁。
- 吉成哲平（三好恵真子監修） 2021『写真家 星野道夫が問い続けた「人間と自然の関わり」』大阪大学出版会。
- 吉成哲平・三好恵真子 2021「戦争の影」を抱え展開し続ける「写真実践」—東松照明が生活の現場から証した、長崎の被爆者の生と死—『生活

学論叢』39、15-30 頁。

吉成哲平・三好恵真子 2022a「インターフェイス」から捉え続けたひとびとの暮らし—写真家 東松照明の眼に映り込んだアメリカニゼーション—『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』48、147-180 頁。

吉成哲平・三好恵真子 2022b「写真家 東松照明が魅せられた、長崎の中の中国文化—「町歩き」より受け止めていく、東シナ海を巡る歴史の厚み—」『アジア太平洋論叢』24、113-133 頁。

吉成哲平・三好恵真子 2022c「写真家 東松照明が直面した「基地の中の沖縄」—一日米の狭間で揺らぐ復帰前の現実と歴史への責任—」『生活学論叢』41、30-45 頁。

吉成哲平・三好恵真子 2023a「写真家たちが向き合った 1970 年前後の現実—「写真 100 年」展を通じた明治期以来の記録への内省—」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』49、51-84 頁。

吉成哲平・三好恵真子 2023b「「私性」から「公性」へと拓かれてゆく「写真実践」—復帰前後の沖縄での表現を巡る東松照明の模索—」『生活学論叢』43、43-57 頁。

吉成哲平・三好恵真子 2024「「戦後」の生活者の思想を討究する「写真実践」の方法論的可能性—ひとびととの距離を埋めゆく東松照明の重層的経験の意味—」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』50、185-213 頁。

吉成哲平・三好恵真子 2025a「再帰的な撮影行為を介して拓かれていく「記憶の継承」の可能性—写真家たちが表現し続けた「戦後」を「写真実践」より問い直していく意味—」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』51、45-73 頁。

吉成哲平・三好恵真子 2025b「復帰後の沖縄の現実から問い直された「戦後」—写真家 東松照明が島々で確かめていった生活の実感—」『生活学論叢』46、15-29 頁。

吉成哲平・三好恵真子 2026「沖縄を撮り続けた写真家たちの相互の触発とその距離—東松照明を軸に浮かび上がる島々でのそれぞれの内省—」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』52、165-200 頁。

写真報告

「戦後」の生活者の思想的営為の
記憶とその現在

© Teppei Yoshinari



1. 長崎 平和公園 2020 年 3 月



2. 長崎 城山小学校平和祈念館・焼け焦げた木煉瓦 2023 年 10 月

1.

1945 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分に、長崎で原子爆弾がさく裂した。同年 12 月末までに 73,884 人が亡くなっている。「戦後写真の巨人」とも称され、1960 年代初頭の長崎で目の当たりにした被爆後の現実に衝撃を受けることで、生涯にわたり同地に暮らす人びとを撮り続けたことでも知られる写真家の東松照明氏は、「長崎には、＜11 時 02 分＞で停止した時と、1945 年 8 月 9 日 11 時 02 分を基点とする現在進行形の時間がある」と記している。これら「二つの時」を忘れてはならないという東松氏の問いかけは、今も古びていないように思われる。初めて訪れた平和公園にて思わず立ち止まさせられたのは、平和祈念像よりも、むしろその手前に静かに残る旧・長崎刑務所浦上刑務支所の被爆遺構である。私は、原爆のさく裂の瞬間までそこに生きていた人びとのことを考えたことがあっただろうか。

2.

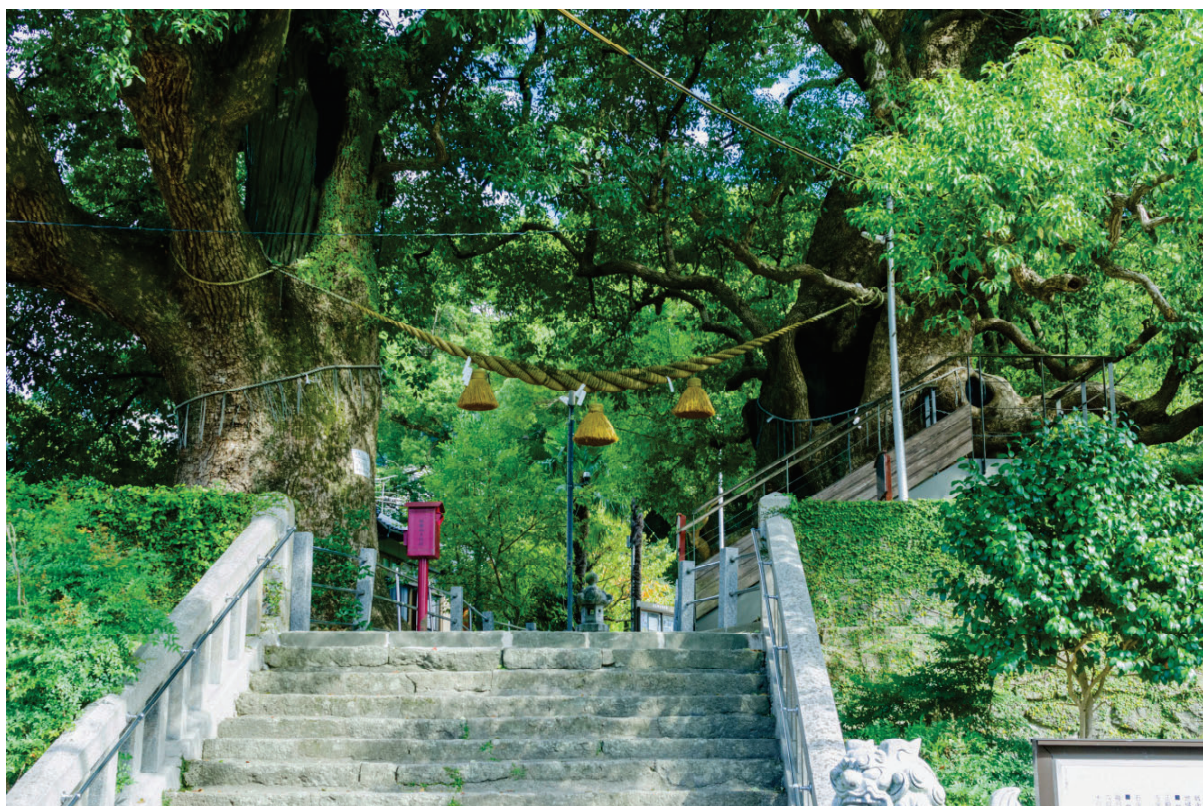
長崎の爆心地から約 500m の距離にある城山小学校（旧・城山国民学校）では、被爆当時、在籍していた約 1500 名の児童のうち 1400 名以上が自宅周辺で亡くなったことが知られている。現在、当時の校舎の一部が保存されており、「城山小学校平和祈念館」として被爆の実相について伝え続けている。爆心地周辺の復元図作成や旧城山国民学校被爆校舎の保存運動に尽力し、被爆者でもあった内田伯氏（2020 年 4 月に逝去）は、次の至言を遺している。

「目から消え去る物は、心からも消え去る。原爆の遺構は、残すこと、見て感じること、伝えることに意味がある。」

城山国民学校では原爆により学籍簿も消失したため、当時の児童の在籍総数は今も不明である。ゆえに、亡くなった人びとの思いとして、一人でも二人でも探していく取り組みが、今日も続けられている。



3. 長崎 城山小学校・嘉代子桜 2021年3月



4. 長崎 山王神社の被爆クスノキ 2023年10月

3.

城山小学校の校庭には「嘉代子桜」が植えられている。この桜は、被爆当時、城山国民学校内にあった三菱兵器製作所の事務室に、学徒報国隊員として働いていた林嘉代子さんの死を悼んで、母親である林津恵さんが植えたものである。植樹から長い歳月を経て老いていく木を、現在は何本もの柱が支えている。嘉代子桜を前にするといつも胸に迫るのは、被爆当日に「仕事へ行きたくない」と言っていた嘉代子さんを送り出してしまったことに対する津恵さんの語り得ない思いである。被爆を生き残った人びとにとって、「戦後」の時間を生きてきたことが、どれほど重いことであったのかを、嘉代子桜は静かに伝え継いでいる。1951年8月9日から毎月9日に城山小学校にて執り行われてきた平和祈念式は、今年2026年8月9日に900回という節目を迎えた。長年、大切に歌い継がれてきた「子らのみ魂よ」が心に響く。

4.

長崎には、国指定史跡「長崎原爆遺跡」として、爆心地、旧城山国民学校校舎、浦上天主堂旧鐘楼、旧長崎医科大学門柱、そして「一本柱鳥居」とも称される山王神社二の鳥居が大切に残されている。いずれも私たちが被爆の実相について学ぶ際には外すことの出来ない場所である。長崎平和案内人として長年尽力している山口政則さんによる案内のもと、以前これらの被爆遺構を巡る中で山王神社の被爆クスノキの前で休憩を取っていた時、「いつか被爆者の最後の一人がいなくなっても、このクスノキは残り、生き続ける」と、山口さんは語って下さった。それは、被爆後の長崎に暮らす人びとと、この地に息づく自然との両者に等しく流れ続けてきた時間の中で生起してきた、それぞれの生と死の一端を感じさせる言葉でもあった。「被爆者なき時代」が目前に迫りつつある今日、今は亡き先人たちが懸命に未来へ託してきた志を、私たちはどのように繋いでいけるのかを、長崎にていつも考えさせられる。



5. 長崎 路面電車 2022 年 8 月



6. 長崎孔子廟 2022 年 8 月

5.

三方を山に囲まれた長崎市内を「町歩き」する時には、路面電車（長崎電気軌道）が欠かせない。長崎の街をひっきりなしに行き交う電車に乗ると気が付くのは、終戦からまだ間もない 1950 年代はじめに製造された車両が、今なお主力として活躍していることである。近年、市の中心部に位置している長崎駅周辺では、大規模な再開発が進んでいる。私たちが長崎への訪問を重ねてきたこの数年の間にも、目にする景色は大きく変化していることに驚かされる。しかし、そうして変わりゆく風景の中で、この路面電車が、長崎に暮らす数多くの人びとを地域の足として運び続けてきたことを想像しながら、被爆者を含む一人一人にとっての「戦後」の日常がどのようなものであったらと思うを馳せていた。

6.

長崎には、16 世紀の開港以来、多様な背景を持ちつつ、海を越えてこの地を訪れてきた人びとの足跡が刻まれている。他方で、キリシタン殉教や出島を通じた交易など、「西洋の窓」としての長崎のイメージの影で見過ごされがちであるのは、「東アジア」との歴史的な結びつきであるかもしれない。被爆の傷跡を凝視し続けながらも、後年には、「歴史の缶詰のような町」である長崎に住まいながら撮り続けた東松照明氏の足跡を辿ると、長崎の「チャンポン文化」に魅せられつつ、長崎・沖縄・福建を結ぶ東シナ海を巡るトライアングルを見出していったことが浮かび上がってくる。起伏の多い坂の街を歩きながら、「被爆地」としての側面に留まらない、東アジアへと拓かれていく人びとの暮らしについて想起しつつ、シャッターを切った。



7. 長崎 城山小学校・遠景 2022 年 8 月



8. 長崎 城山小学校平和祈念館・山口政則さん 2023 年 8 月

7.

2022 年の「長崎原爆の日」にあわせて訪問した城山小学校の被爆校舎では、ウクライナへの平和の願いを込めてライトアップが行われていた。それから 4 年以上が経つ今もなお、和平への先行きは不透明である。さらには、その後のガザやイランなどの各地における戦争も混迷に拍車をかけている。「長崎を最後の被爆地に」という志に突き動かされるようにして、被爆体験の継承活動に長年尽力してきた城山小学校平和祈念館の実践者の方々も、戦争の犠牲となるのは日常を生きる市井の人びとであることへの危機感を吐露していた。

8.

2020 年に初めて長崎を訪れる中でご縁を頂いて以来、私たち「記憶の継承ラボ」にいつも大切な示唆を下さっているのが、城山小学校平和祈念館の山口政則さんである。山口さんは、ご自身が育った環境や人生経験から得た自らの生き様、そして被爆地・長崎の一市民の責務として、若い頃から心していた「戦争の悲惨さと愚かさと被爆実相を伝え、平和を目指す活動」であり、「ボランティア活動への参加」に、定年退職後から深く携わるようになっていったと話して下さる。被爆者の方々に加えて、その「伴走者」として長崎で共に「戦後」を生きてきた人びとによって原爆体験の継承が模索されてきたという時間の厚みが、山口さんの背中には凝縮されているようであった。



9. 那覇市第一牧志公設市場 2023 年 3 月



10. 沖縄 摩文仁 2023 年 3 月

9.

2023 年 3 月に沖縄の那覇を初めて歩くと、コロナ禍が少し落ち着きを見せ、街には活気が戻ってきていた。那覇を訪れる中でとりわけ心に残っているのは、「国際通り」にあるお店で夕食をとっていた時の出来事である。地元の青年たちに偶然声を掛けられて、沖縄の今とその過去について意見交換をしていると、その一人が沖縄島近くの島にて生まれ育ち、いまは自衛官として働いていることを、少しはにかみながら話してくれた。南西諸島の防衛を巡っていま、沖縄が置かれているとても複雑な現実を、県外出身の私はどのように受け止めることができるのか。静かに、しかし鋭く問われているように感じざるを得なかった。

10.

「沖縄戦終焉の地」としても知られる沖縄島南部の摩文仁では、今から約 80 年前に、「鉄の暴風」とも称された米軍による艦砲射撃の中で多くのひとびとが逃げまどい、傷つき、命を落としていった。ひめゆり学徒隊の戦争体験を伝え継いでいる「ひめゆりの塔」（ひめゆり平和祈念資料館）から、早春の日差しの中でゆるやかに道を下っていくと、眼前に海が次第に開けてくる。そこで、いまは静かに波が寄せては返していた。青く透き通った海をぼんやりと眺めていると、水平線の向こうの空から戦闘機の編隊が頭上高くを飛び去っていく。初めて訪れた沖縄で目にしたその光景を、忘れることが出来ない。



11. 沖縄 嘉手納基地 2024 年 6 月



12. 沖縄市コザ ゲート通り 2023 年 3 月

11.

嘉手納基地を一望することが出来る「道の駅かでな」の展望デッキに上ると、耳をつんざくようなエンジンの音を立てながら F16 戦闘機がちょうど離陸するところだった。私を含めて、訪れた人びとは撮り逃すまいと、やにわにカメラを構える。訓練スケジュールは公開されていないため、離着陸がどのタイミングで実施されるのかは分からない。だからこそ、帰り際、耳に入ってきた「見れてよかったなあ」という観光客と思しき人びとの言葉に、「基地」と共に日々の暮らしが営まれている現実との遠い距離を感じ、思わず棘のようにその言葉が胸に刺さった。一方で、時折強い雨が降るなか、同じ「道の駅」の1階では迷彩服姿の米兵たちが昼食を買いに訪れ、また、県内の高校生たちが社会科見学に来ており、コーラを手にした地元の年配の夫婦が一休みしていた。ある一つの側面からだけでは捉えることの難しい暮らしの現実があることを、忘れずにいたい。

12.

冷戦が本格化していく中で嘉手納基地の門前町として発展し、「基地の街」、「戦後沖縄の縮図」とも形容される沖縄市・コザには、基地の第2ゲートから胡屋十字路までの500mほど続いている「ゲート通り」がある。この通りに位置する沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」を初めて訪問した際に、市史編集担当の伊敷勝美さんが伝えて下さったのは、沖縄では一様に「戦後」が始まったわけではないという歴史の重みであった。なぜなら、現在の沖縄市は1945年4月に米軍が沖縄本島に上陸してまもなく占領された一方で、南部の地域では日本軍による持久戦が展開されることで、犠牲者が積み重なっていったからである。言い換えれば、沖縄のそれぞれの地域史をたどることで浮かび上がってくる戦争・戦後体験の複雑さがある。その過去は、「いつからが「戦後」なのか」を問いかけている。



13. 沖縄市コザ 中央パークアベニュー 2024年6月



14. 読谷村 渡具知 2025年2月

13.

沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」に携わりながら、長年にわたり市史編集に尽力している恩河尚さんと伊敷勝美さんは、沖縄市（前身は越來村および美里村）の戦前・戦中・戦後を通して連続する歴史を見つめ直し、伝え継いでいくことに込める思いについて、いつも次のように語って下さっている。

「沖縄戦での悲しい出来事、苦しかったこと、つらいこともあったと思いますが、その人たちがいかにたくましく生きてきたか、そして、コザのまちを、沖縄市をつくってきたかということも、皆さんに知って頂きたい、伝えていきたい。」

それぞれの地域における経験についてお互いに対話することで、理解を深めつつ前進していけたらという言葉にも、いつも大きく励まされている。

14.

沖縄戦における読谷村の米軍上陸地に立つと、約 80 年前に圧倒的な物量と共に戦闘が開始されていったことを、まざまざと実感させられた。一方で、石碑の建つ高台から遠くに目をやると、嘉手納基地の滑走路や格納庫が視界に入ってくる。現在は、公園が広がっているかつての上陸地には子どもたちが賑やかな声を上げながら遊んでおり、周囲の家々の間を歩いていくと、どこかからか三線の音が聞こえてくる。そして、読谷村から嘉手納町に入ると、カフェや公園にて軍人・軍属と思しき家族連れが休日のひとときを楽しんでいた。戦跡の上に、暮らしの複雑な現実が続いていることに考えさせられる。



15. 宮古島 ツヌジ御嶽（下地神社） 2024 年 6 月



16. 沖縄 平和祈念公園 2023 年 3 月

15.

6月の宮古島の強い日差しの中で自転車を漕いでいくと、鳥居が見えてきた。案内板には「下地神社（ツヌジ御嶽）」と書かれ、静かで厳かな空間が広がっている。よく知られるように、沖縄で「御嶽（ウタキ）」は村落の人びとが古来祈りをささげてきた神聖な場所である。一方、この場所から思い起こされたのは、沖縄の近代化における御嶽の「神社化」という戦前の歴史についてであった。ここにもまた、「沖縄」と「日本本土」との間の（そして「沖縄本島」と「離島」との間の）非対称的な関係性の過去とその連続線上の現在があるのではないかと内省させられた。

16.

沖縄島を中心にした地図を眺めると、「日本本土」よりもむしろ朝鮮半島や中国大陆、台湾、そして南方の島々との距離の近さに気付かされる。つまり、「日本本土」と「沖縄」という閉じられた二つの関係性の中だけではなく、「東アジア」へと拓かれた場所に沖縄が位置しているということだ。自分自身の暮らす場所から遠く離れた沖縄で起こった過去の出来事としてではなく、いま、ここに私たちが生きていることと沖縄戦や、あるいはそれ以前からの歴史がどのようにつながっているのかを考えたい、と思う。



17. 沖縄 久高島 2025 年 8 月



18. 沖縄 久高島 2026 年 2 月

17.

施政権返還後の沖縄にて開発や観光が急速に広がっていく中で消えゆく島々の祭祀世界を記録し続けた写真家・比嘉康雄氏（1938-2000）は、とりわけ久高島にて撮影を重ねながら、人びとの生活の中に連綿と生きてきた祭祀を捉えつつ「人間とは何か」を問い続けていった。久高島は、琉球開闢の祖であるアマミキヨが降り立った「神の島」としても知られている。久高島にて島づくりに尽力する実践者の方の案内のもと島を歩く中で、今もなお日常の営為としての祈りが息づいていることの重みを受け止めていた。

18.

2026 年 2 月、旧正月を迎えた久高島では早朝にフェリーが入港してくると、港へ向かって何台もの車が走っていった。道端のどこかから「お元気ですか？明けましておめでとうございます」と、新年の挨拶が聞こえてくる。人びとの一年の健康を祈願する「シャクトウイ」からは、古来、久高島にて生業を営み続けてきた人びとの願いの深さが身体に染みとおってくるようであった。その一方で、まだ沖縄が日本に「復帰」する以前、島に水道や電気、ガスの通っていない時代を経てきた人びとの語りには、今はなき砂浜に並べられたサバニを担いで運んだという往時からの変化も想起させられた。それは、島に生まれ落ち、島で亡くなっていくという暮らしぶりが恐らく変容を迫られてきたこととも根底で繋がっているのかもしれない。「生活」という窓を通して、「沖縄戦後」の時代がまたほんの少しだけ広がりをもって見えたように思われた。



19. 福島 富岡町 2024 年 2 月



20. 福島 浪江町 2024 年 2 月

19.

2011年3月11日午後2時46分に発生した東日本大震災から約15年という時が流れた。福島県の富岡町にある「結まーるの見晴台」からは、現在、廃炉作業が進められている福島第二原子力発電所を遠くに望むことが出来る。ここは、福島の原子力発電所の仕事に長年従事し、自身も3.11で被災した沖縄出身のある技術者の方が、震災から10年の節目となる2021年に建てた場所である。一見すると福島と沖縄は遠く離れているようで、「戦後」の社会変動に伴い構造的に生み出されてきた複雑な現実を今なお抱え続けている点で、二つの土地はつながっているのではないか。それは、私たちの日々の暮らしが果たして何によって支えられているのかを問い直すことにも繋がっている。

20.

東日本大震災から十数年を経た福島の被災地では、かつての生活の場所に今も更地が広がっているところが少なくない。私たちが檜葉町にて滞在した宿には、復興作業員と思われる人びとが多く宿泊し、早朝から仕事に出かけていた。復興に向けて今も毎日の作業が続けられていることは、思えば当たり前のことである。しかし、震災から確実に時が経っていく中で、普段、大阪に暮らしているとなかなか見えにくくなっている現実でもあるのではないかと感じられてならない。



21. 福島 震災遺構 浪江町立請戸小学校 2024 年 2 月



22. 福島 富岡駅 2024 年 2 月

21.

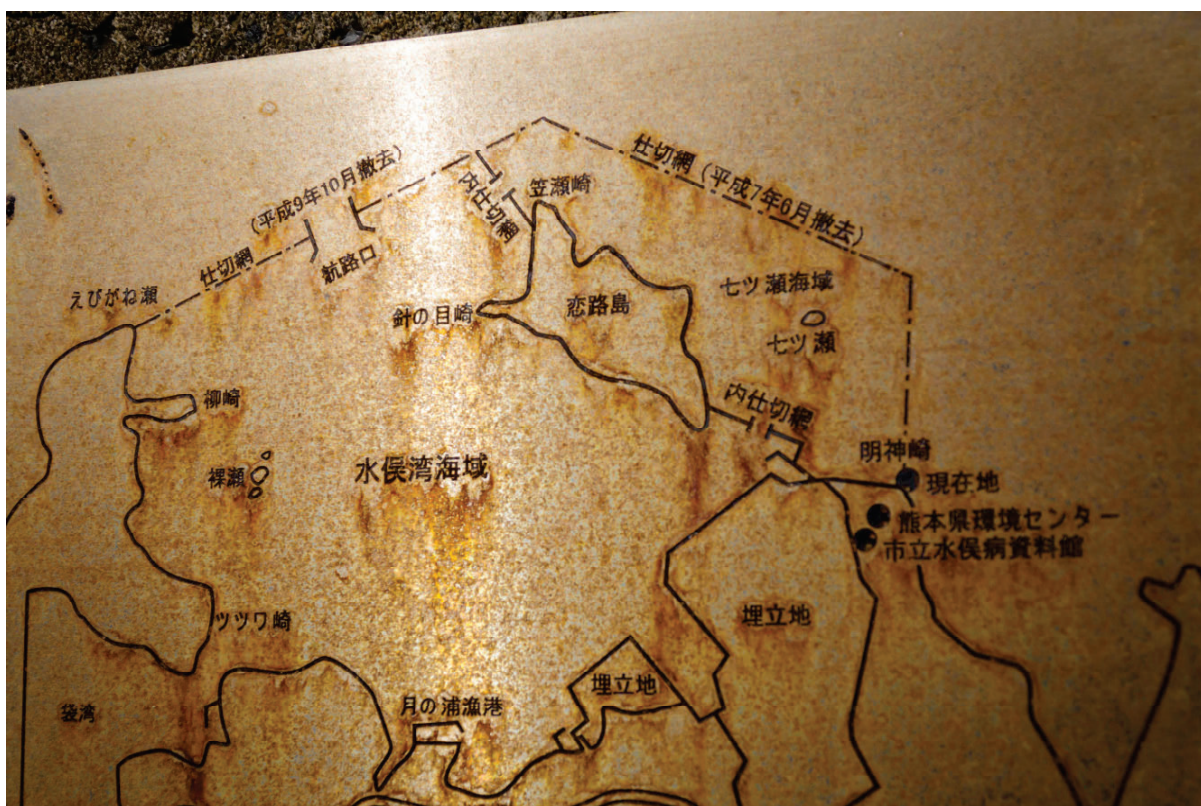
福島の新通りを歩きながら、3.11 後の複層的な時間の中で、人びとの暮らしが営まれ続けていることを受け止めていた。例えば、それは発災直後の津波襲来までに判断を迫られていった分刻みの時間であり、一方で、長期の避難を余儀なくされていった先行きの見えない時間である。そこには、原発の廃炉に要する数十年以上の時間と、さらには放射性廃棄物を最終処分するまでの気の遠くなるような時間も折り重なっている。震災遺構である請戸小学校では、震災前まで盛んであったサケ漁の映像が流れていた。人間と自然との関わりの中で循環してきた生命の時間もまた、3.11 は断ち切ってしまったことを思わずにはいられなかった。

22.

地域で共に暮らしてきた人びとを震災の津波によって亡くし、現在は語り部としてその経験を伝え継いでいるある実践者の方は、震災から一年半近くの間、津波襲来時に自身が置き去りにしてしまったおばあちゃんのことについて語ることが出来なかったという。しかし、ある時、友人の前でそのことを号泣しながら話した時、スーッと気持ちが和らいだことがきっかけとなり、語り部としての活動を始めていった。「あの日の出来事を誰かに話すことで、自分自身が肩の荷を軽くしている」と語って下さったことに、震災の体験を巡る語り難さの一端を垣間見た思いがした。東北の海辺を見つめる時、今なお「語り得ないこと」や「語りにくいこと」を抱える多くの人びとが各地で日常の暮らしを営んでいるのであろうことを、ふと想像させられる。



23. 水俣 魚市場 2023 年 12 月



24. 水俣湾 仕切り網跡 2023 年 12 月

23.

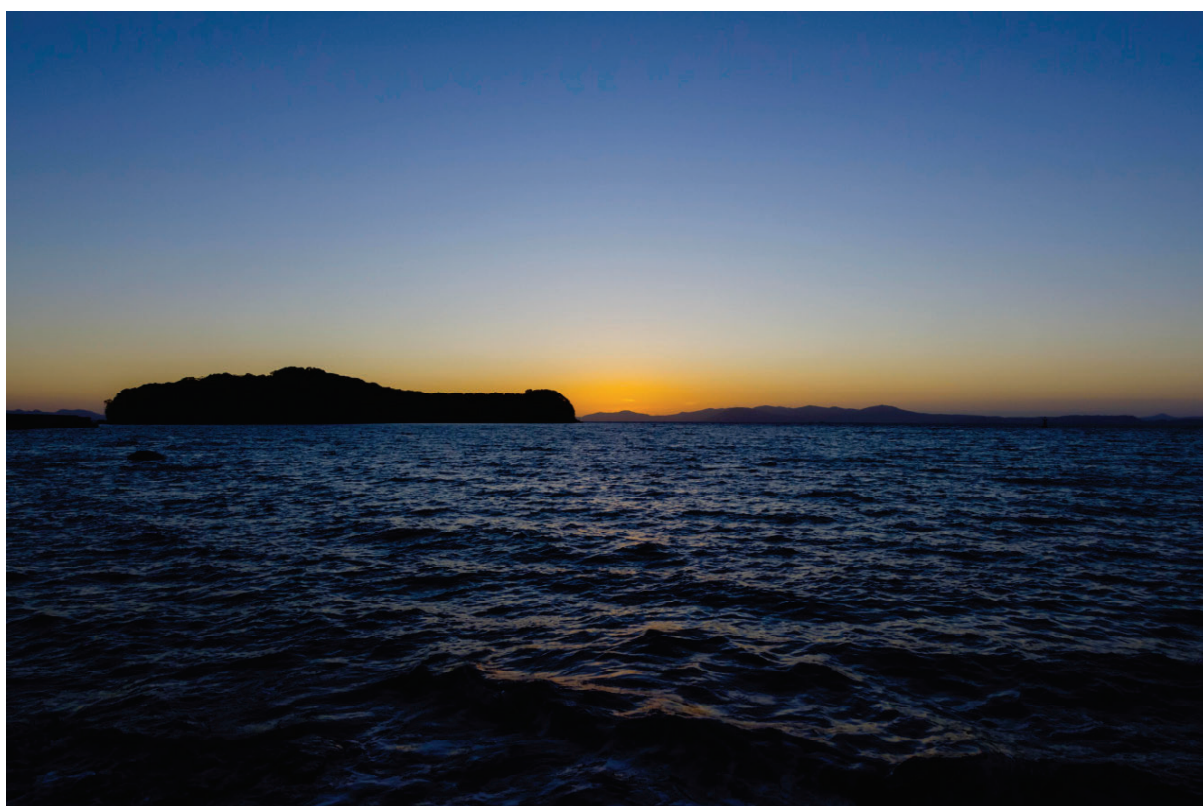
戦後日本社会が高度経済成長を成し遂げていく過程で顕在化した水俣病は、1956年5月1日の公式確認から今年2026年で70年という節目を迎えた。しかし、2023年に、水俣病センター相思社の職員（当時）である葛西伸夫さんに水俣の町を案内して頂きながら歩いた時、今なお水俣病は語りにくいままであるという現実が重く心にのしかかるようであった。長い時間を通して、この出来事が地域社会にもたらしてきた傷跡の深さが、どれほど計り知れないものであるのかを感じずにはいられない。

24.

水俣湾では、公害防止事業として水銀値の高い湾の奥部が埋め立てられると共に、仕切られた海の内側では水銀汚染魚の捕獲作業が実施され、ドラム缶に詰められたのち埋立地へ投入されてきた。現在、水俣湾埋立地は「エコパーク水俣」という公園として整備されており、園内の道の駅も賑わいを見せていた。水俣湾埋立地に広がる風景と、その深部に抱え続けられている水俣病事件の痕跡は対照的であるものの、両者を眼差し続けていく必要があるように思われた。



25. 水俣湾埋立地（エコパーク水俣） 2023 年 12 月



26. 水俣 恋路島 2023 年 12 月

25.

水俣湾埋立地では、水俣病事件における慰霊の難しさについて考えさせられたことも記しておきたい。埋立地にある「水俣病慰霊の碑」では行政が主催する慰霊式が毎年行われる一方で、同じ市内にある「乙女塚」では患者さんとその支援者の人びとにより慰霊祭が営まれている。身内に水俣病患者がいたことを今も語りたくない人がいるという複雑な現実についても教えて頂きながら、「記憶の継承」とは、誰の、いかなる記憶を受け継ぐことであるのかという根本的な問いに思わず立ち戻らされていた。

26.

水俣病センター相思社に併設されている「水俣病歴史考証館」にて、葛西さんがとりわけ熱を込めて解説して下さったのは、戦前の朝鮮半島へのチッソの進出という、教科書では語られることの少ない、東アジアとの関わりにまつわる私たちの過去であった。「水俣病事件から近代史を見渡していきたい」と教えて下さったように、戦前から戦後への激動する社会転換の中で水俣の地で起きてきたことは、「記憶の継承ラボ」の活動を通じて見つめている各地域が経験してきた歴史にも通底する構造的な課題であることを実感する。一歩ずつではあるが、私たちの足元に広がっている見過ごされた生活の歴史を、これからもたどり直していきたい。

第二部 <応答>

写真展に参加して



長崎 平和公園 2026年5月 ©Teppei Yoshinari

届かない海のおいと、見る身体

藤阪 希海*

現在、台北の喫茶店でにんじんケーキを食べながら、この原稿を書いている。2025年8月末から台湾に留学しており、7カ月が経とうとしている。忙しさを言い訳に一向に勉強が進まず、いまだにほとんど聞き取れない台湾華語が飛び交っている。恐怖と重怠さに意識が転落しそうな私を、ナッツの歯ごたえが引き留めている。

吉成氏から本稿の執筆を依頼されたとき、私は純粋に嬉しかった。写真展に伺ったときに言語化されなかった、感じたことをことばにする機会を頂けたと思った。半年前に見に行った写真の内容を鮮明に覚えてはいなかったが、感じたものがことばにならないもどかしさだけは、強く印象に残っていた。

ところが、いざ原稿を書こうと、送っていただいた展示写真と説明文のファイルを開くと、うれしさはすべて引っ込んでいた。写真展のタイトルと主催者の名前が並んだ表紙を開いただけで、怖い、と思った。もう一度写真をじっくりと見ることを楽しみにしていたにもかかわらず、体温が上がって、呼吸が荒くなった。ざっと流すように、半分くらいの写真を見た。写真をスクロールする手を止めた。上着を抜いだ。今日は朝から土砂降りだったので、分厚いパーカーを着ていた。3月の台北は、雨が降ると寒い。

鮮やかな千羽鶴と桜、青々とした葉が茂ったクスノキの色彩が目に入り、吉成さんの穏やかな声と控えめなまなざしを思い出した。そうだ、何も怖く

* 大阪大学人間科学研究科・博士後期課程／日本学術振興会特別研究員 DC2

ない、優しい写真だった、と思いだした。息の出所が深くなり、落ち着いた。涙が出ている。

写真展を見に行った時期の私は、1 か月後に迫った台湾留学の準備や調査に向けた調整などにてんてこ舞いだっただ。私は、疲労が蓄積すると部屋から出るのに苦勞する人で、この時も上手く部屋を出れず、写真展のギャラリートークに遅刻した。「遅れてでも来れて良かった」と「申し訳ない」が頭の中で押し合い圧し合いしていた。吉成さんは、そんな私に、ギャラリートークの正式な時間が終わった後、私のために時間を割いて1枚1枚ていねいに説明してくださった。

沖縄の海のきれいさが、鮮やかに記憶に残っている。白い砂と、青い空と、それより深い色の艶やかな海。きれいであればあるほど、痛い感じがした。そこで亡くなった人が見えなくなるような、逆に刻まれるような。胸が重くなっても、命を落とした人たちの痛みも暑さも寒さも知らない。きれいな海のおいさえ知らない。

かつてたくさんの生命が経たれた場所が、これほど美しいことは、あたたかさであり、冷たさだと感じた。血や埃や煙など連想もしないくらい、植物が背を伸ばし、掃除されていて、生命活動の積み重ねを感じられること。何も知らなければ、ただ美しい景色だと思えること。知らなくても生きてしまえること。それに危機意識を持ちながら、写真を撮った人が目の前にいること。

私は、彼らの痛みを知らなくても生きていける、私の身体を生きていることがさみしい。もどかしい。写真を見れば見るほど、私はその景色も、そこを生きる人も知らないことに気が付く。身体は忙しく反応するのに、私は、何かを持って帰れた気がしない。そもそも私の身体は、ギャラリートークに間に合うように家を出なかった。私の身体は、私の時間と生活を生きている、写真に写る景色と歴史を作った人たちはおろか、撮影し、目の前でことばを紡いだ吉成氏にも届かない。

沖縄、長崎で被爆した朝鮮人の存在、福島の話をお聞きする中で、言説として頻繁に登場する「被害」や「被災」の中にも、植民地主義や周縁化の構

造があること、私も決して無関係でいられないことに、何とも言えない気持ちになった。以前、スタディツアー¹で福島県の浜通りに行った際のことを思い出した。被災者の方に「大阪だったら福井に原発ありますよね」と軽やかに言われたとき、私は初めて、関西電力から毎日電気を買っていることを意識した。私は顔も知らない誰かに、万が一のとき原発事故の被災者となることを暗に要求しながら生きているのだと思った。帰阪し、自分の部屋の電気をつけたとき、怖くなった。身体が動かなくなり、布団を敷けず、漫画を読んで気を紛らわすこともできず、電気を煌々とつけたまま、コートを被って丸まって一晩過ごした。寒かった。

写真展の話に戻る。身体に跡が残っている被爆者、地元に戻れない避難者、自分は地元に戻っても知人が帰ってこない被災者などを考えると、自分の立場性、特権性に苦しくなる。あの晩、福井の人たちを原発事故に遭うリスクに晒して、電気を使わざるを得ないことがあれほど怖かったのに、私は、それを忘れて日々を生きている。正直、忘れないと生きていけない、とも思う。私が、忘れられる距離で生きていることだけが事実だ。

＊

吉成氏は、自らの研究方法論を「写真实践」と呼ぶ。それは「写真家たちが刻々と残していった多様な表現媒体を渉猟し、当時の時代背景も踏まえた上で、彼ら彼女たちが撮影行為を介して受け止めていった現実を体系的に捉え直す方法論」である（吉成・三好 2025: 47）。この方法論は、十数年にわたる吉成氏自身の撮影経験における身体感覚を基盤としており、「調査者という枠組みにあえて立たずに、写真家が生きた現場に足を運び、自らも撮影行為を介することで動態的に表現していく」ことを重視する（同上: 51）。長崎の被爆クスノキ、嘉代子桜、沖縄・摩文仁の海、福島浜通りの更地、水俣

¹ 大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター（未来共生プログラム）・大阪大学社会ソリューションイニシアティブ(SSI)主催「ふくしまスタディツアー2020」

(<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/events/2011210800170244/>)

の市場の猫…。写真展に並んだ写真群は、そうした実践の積み重ね（吉成 2024 ほか）だ。

写真は一瞬を切り取る静止画であるがゆえに、フレームに収まりきらない現実の複雑性に撮影者は絶えずさらされる。だからこそ撮影行為は、対象を記録することではなく、写真家がかつて近づこうとしたものに、自らも身体で近づいていこうとする試みになる。撮る身体でそこに立つことが、この方法論の核心にあると言えよう。また吉成氏は、「写真实践」における身体性・情動性を「注視すべき重要な論点の一つ」と位置付けている（吉成・三好 2025：51）。撮影行為は、身体と情動が不可分に結びついた認識の実践だと言える。

今回の写真展において、私は「見る側」の人間として、それらの写真に出会った。私の身体は、ギャラリートークに間に合うように家を出なかった。疲労が重なれば、どれだけ話を聞きたいと思っても、その奥にある問題に真摯に向き合いたいと思っても、動かない。私の身体は、私の時間と生活から逃れられず、写真に写る景色とも、それを形作った歴史とも断絶している。さらに、写真を見る私は、その背景にある出来事と私の生活を地続きだと思えていない。福島第一原発事故と自分の生活を結び付けて考えられていなかったように。そして、一度結び付けても、忘れて生きられてしまえたように。

だから、写真というメディアを通じて地続きだと気が付いたとき、情動が動き、身体が副次的に反応するのではないか。岡（2000）は、「完結した物語は記憶を過去に葬り去る」と述べる。「すでに別の物語を生きている者に、完結したはずの物語が実はいつこうに終わってはいないことを、出来事がなお現在形で続いていることを突きつける」ことは嫌悪感を誘発する（岡 2000：104）。写真のファイルを開いたとき、体温が上がった。上着を脱いだ。私の身体反応は、私の生きる世界が終わっていない物語で構成されていること、しかしその物語に気が付かず生きられてしまうことを突き付けられ、生じたものではないかと思う。

＊

まだ終わっていない物語に身体が応答する、と言えば綺麗にまとまるかもしれない。そういう言い回しをしたい欲望がある一方で、私はそんなに格好良くなれないと思う。身体が何を感じたとしても、何にも辿り着けた気がしなかったというのも、確かな感覚である。辿り着けないことそのものへの痛みを感じることも、映し出された景色に横たわる、痛みそのものの形に敬意を持つうえで、重要だろう。

イリッチは、「痛みは損なわれた一つの宇宙についての人間の経験であって、その下位のシステムの機能不全ではない」と述べる(イリッチ 1998: 116)。痛みは個人の内側に生じる症状ではなく、この世界に生じた腐敗が人間の身体に表れたもので、世界と繋がる回路だと理解できる。この視点に立てば、「見る側」が身体に走る痛みを感じる行為は、写真を通じて知覚した世界の歪みを、身体を介して「今ここ」に刻むことだと思う。記憶を過去に葬り去ることへの、小さな、しかし確かな抵抗である。

写真を通じて再現される景色と、それに関する吉成氏のことばそのものに共鳴する痛み。加えて、その痛みにも辿り着けないこと自体への痛み。その両方を見つめ、痛みにも辿り着けない構造そのものを、世界の歪みとして受け取りたい。痛みを感じられなくなることは、世界の歪みに慣らされて、歪みの一部になってしまうことだと思う。痛みが世界の腐敗の兆候なのだとしたら、それに気が付くことのできない人間に罪はないかもしれないが、責任はあるはずだ。

見る身体は、現場に辿り着けない。一度知った痛みすらも忘れて、今日を生きることが優先される。知らなくても生きていける身体をもって忘れることは、終わったことにしようとする社会の一部として機能する。ドゥルーズは、「マジョリティを規定するのは適合を強いてくるモデル」だと言う。しかし「なんらかの面でマイノリティへの生成変化に組み込まれ、その生成変化の道を歩む決意ができていれば、誰もが未知の旅路に分けいっていくことができる」(ドゥルーズ 1996 : 286)。つまり、知らずにいられる身体が、物語を終わらせ忘れようとするモデルに沿って動く一方で、物語を終わらせない方法を探すことを「生成変化」だと理解できる。断絶の痛みを感じながら

生きることこそ、腐敗の一部になることを拒み、「適合を強いるモデル」から外れようとする、生成変化の試みではないか。

どれだけ写真展の内容に引きずられると思ったとしても、涙が出ても、呼吸が浅くなっても、私は暖かくて乾いた場所にいる。ブランチを食べて、おやつを食べられる、2026 年を生きている。この身体にできるのは、痛みへの接続を偽ることではなく、断絶を断絶のまま抱え続けることだと思う。それが見る身体にできる、写真への応答であり、世界の腐敗の兆候に気が付く術だと思う。痛みを感じられる身体を、維持する努力をしたい。

写真展で問われたことと地続きに、私の「今ここ」である台北でも、植民地主義や周縁化の構造を見つめ切れていないと感じる。日本企業や日本のキャラクターを目にしない日はない。台湾人と友達になったとき、「日本大好き」と言ってくれて私は肩の力が抜けたり、マンガとアニメの話で盛り上がったりすることも度々だ。彼らが示してくれる親しみに感謝と喜びを感じると同時に、どうしようもない申し訳なさが沸き上がる。台湾語どころか台湾華語も勉強できていない現実。原住民の人たちのことも、台北の道路の名前が中国本土の地名を冠している理由も、きっと私は分かっていない。

座りの悪さを感じたまま、大好きな友達とサッカーをして、ご飯を食べて、湿気に文句を言う。場所に関わらず論文と向きあうこともあれば、すべてを放り出して寝たり、語学の勉強をして寝不足になったりすることもある。にんじんケーキをたべる「今」も、吉成氏の写真に胸を詰まらせた瞬間も、その積み重ねのうちの一瞬でしかない。私の身体を生きながら、一見何にもならないような一瞬を積み上げる。それこそが、腐敗に取り込まれない抵抗なのだと思いながら、粛々と生きる。

これが写真展へのレスポンスと呼べるのかどうか、私には分からない。ただ、わからないものの「わからなさ」の質が変わったことは確かで、それだけは吉成氏の写真から受け取ったものだと思う。

引用参考文献

イリッチ、イヴァン 1998『脱病院化社会：医療の限界』（金子嗣郎訳）晶

文社。

岡真理 2000『記憶／物語』岩波書店。

ドゥルーズ, ジル 1996『記号と事件 : 1972-1990 年の対話』(宮林寛訳) 河出書房。

吉成哲平 2024「沖縄の風景の中に生きている沖縄戦の記憶を受け止めて」
『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ (OUFC Booklet Vol.18)』
39-43 頁。

吉成哲平・三好恵真子 2025「再帰的な撮影行為を介して拓かれていく「記憶の継承」の可能性—写真家たちが表現し続けた「戦後」を写真実践より問い直していく意味—」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』 51、
45-73 頁。

レスポンス②

伴走する写真家へ

織田 和明*

キリスト教を信仰する小説家の遠藤周作（1923-1996）は、まず何よりも自分自身の弱さを痛感していたので、西洋で一般的な、力強いイエス像についていけなかった。また学術研究の進んだ 20 世紀に生きているがゆえに、実在したイエスが奇跡によって病気を治したとも思えなかった。このような悩みの中で日本におけるキリスト教のあり方を探求した遠藤は、代表作の『沈黙』（1966）で、棄教を強いられて踏み絵を踏む主人公の司祭に対して「踏むがいい」と言うイエスを描いた。遠藤のイエスは、現世利益をもたらす存在ではない。イエスは、主人公の踏み絵を踏む運命に介入するものではなく、彼の踏み絵を踏む痛みを分かち合うものである。『沈黙』の主人公は、外形上は棄教したが、しかし本当は最も深い愛と信仰を知るものとなる。愛は世界に介入して理を捻じ曲げる力ではなく、痛みの分かち合いである。「自分にいちばん実感として把握できるイエス像」を求めた遠藤は、後に『死海のほとり』（1973）『イエスの生涯』（1973）『キリストの誕生』（1978）で「永遠の同伴者」としてのイエスという像にたどり着く。遠藤は、イエスを愛をもって苦境に置かれている人々に寄り添い、共に悲しみ、苦しむ無力な同伴者として描いた。愛は、人生に同伴し、共に悲しみ、苦しむことであると、遠藤は示してみせた。

なぜ織田は遠藤のイエス像と愛の話をしているのかと訝しく思った方も

* 大阪大学大学院人間科学研究科・助教

いるかもしれないが、私は「記憶の継承ラボ」写真展に展示されているのは、まさにその同伴者としての愛の実践であると思っている。レンズが写した長崎、沖縄、福島、水俣は、いずれも近代、あるいは現代の影において深い傷を負った街である。展示されている写真はどれも、その傷の直接の痕跡を生々しく捉えたものではない。多くの人の後ろ姿が捉えられた「那覇市第一牧志公設市場」さえも、静謐の中にある。この静謐さこそが、その土地と、そこに暮らす人がかつて負った傷に対する最も深い愛の伴走¹であることを、現像された写真の前に立った私たちは知らされる。

カメラはレンズを通じて光を集め、その風景を一枚の薄い平面に焼き付ける。写真は、風景そのものをただ写し取るだけである。しかしその「ただ写し取った」だけの写真が、被写体となった人やものの生を大きく変えてしまうこともある。写真というメディアは、使い方次第では大きな暴力として現実強く介入する。しかし「記憶の継承ラボ」写真展に展示されている写真たちに、その種の暴力さはない。この静謐さは、現実への介入を控えて生活に寄り添い、傷を負った土地とそこに暮らした人々の記憶を継承することに徹した結果だろう。静かな写真たちは「インパクト」といった類のものからは最も縁遠い。遠藤の描いたイエスがそうであったように、いずれの写真も直接的にこの現実を変革することはない。しかし、この静謐な写真たちこそが、ゆっくりと、しかしもっとも力強くこの世界を動かせるのだと、私は信じている。

私が最も印象に残った写真は、遠藤が第二の故郷として愛した長崎で撮影された「長崎城山小学校平和祈念館・山口政則さん」だ。この写真のキャプションには「被爆者の方々に加えて、その「伴走者」として長崎で共に「戦後」を生きてきた人びとによって原爆体験の継承が続けられてきたという時間の厚みが、山口さんの背中には凝縮されているようでした」と記されている。この写真は被爆者に伴走してきた人物を写すものであるが、レンズ越しにシャッターを切る写真家もまた、伴走者たる山口さんに、そしてその背中

¹ 後に参照する展覧会のキャプションに合わせて、ここでは「伴走」の語を用いている。本稿では「同伴」と「伴走」は、ほとんど同じ意味である。

越しに被爆者の方々に、伴走している。そして、写真実践に取り組む写真家と比べるとごくわずかなものかもしれないが、「記憶の継承ラボ」写真展で立ち止まり、ギャラリートークを聞いた私たちは、かつて遠い土地で起こった出来事に伴走する。写真は私たちに彼方の痕跡を見せる。写真を見るとき、私たちは彼方に思いを馳せ、そこに伴走している。写真を撮るとは、過去に伴走するもののための縁を結ぶこと。写真を見るとは、かつてそこにあった彼方を共に生きようとする。写真実践を通じた写真家の愛の実践に、たとえわずかであったとしても、私たちは力を添えたい。

写真家は写真を撮り、私たちは写真の前に立ち尽くす。それが直ちにこの世界を変えることはない。しかし写真家の静謐な愛の実践は、私たちを最も深いゆっくりとした変革に巻き込む。あなたに巻き込まれるのであれば本望だ。私たちも伴走者となって、この世界と共にありたいと願っている。

生活者はいかに「生き延びる」のか——コザと内モンゴル、狭間に生きる人びとの思想

朝木日力格*

1. はじめに

「記憶の継承ラボ」が主催した写真展「『戦後』の生活者の思想的営為の記憶とその現在」に足を踏み入れたとき、私の目に飛び込んできたのは、単なる過去の記録ではなかった。それは、剥き出しの瓦礫の上に立ち、あるいは基地のフェンスの傍らで、その土地で暮らしを続けながら、「生き延びる」ための思索を重ねてきた人びとの営みの痕跡だった。展示された長崎、沖縄、水俣、福島風景——そこには、国家の失政や戦争という巨大な暴力にさらされながらも、日々の暮らしを営み、子供を育て、その場所で生きていくことを諦めなかった「生活者」たちの姿がある。彼・彼女らにとって、言葉を操り、思想を持つということは、高尚な文化活動などではなく、その土地で明日を「生き延びる」ための、そして日々の「生業（なりわい）」を守り抜くための、切実な営みであったはずである。

特に沖縄の歩みは、その複雑な歴史の中で人びとがどのように暮らしを繋いできたのかを筆者に問いかけてくる。かつて教室で子供たちの首にかけられた「方言札」（近藤 2005）は、親から受け継いだ言葉ではなく、国家が

* 大阪大学人間科学研究科・博士後期課程

求める「正しさ」に適応することが、社会の中で生きていくための条件として求められていた時代を象徴している。このように自らの言語や文化との距離を調整しながら生きることを求める社会のあり方は、現在の内モンゴルにもどこか重なって見える。外部から持ち込まれた新しい言葉や価値観が広がる中で、固有の文化との距離感が少しずつ変化していく。その背景には、より安定した生活や豊かさ、新しい時代への憧れもまた含まれていたのではないだろうか。筆者が歩いたコザの街角には、そうした大きな社会変化の中で、それらを受け止め、ときに取り込みながら「生き延びよう」とした生活者たちの知恵が今も息づいている。ゲート通りの喧騒、米軍基地のフェンス越しに響く音楽、そして看板に踊る歪な言葉の混濁には、国家が用意した「正しい歴史」からはみ出し、自らのやり方でその土地に根を張り、生業を繋ぎ続けた人びとの切実な思想が刻まれていた。

本稿は、写真展で受け取った「生活者の視点」を起点に、2025年12月にコザを訪問した際の思いを振り返りつつ、内モンゴルという土地を貫く「生き延びる」という営みについて考え直す試みである。

2. コザのまちを歩く

筆者は2025年12月、柔らかな光の中でコザの街に立っていた。遠くから眺め、資料や写真を通して知ったつもりになっていた「戦後沖縄」という時間が、実際にその地に足を踏み入れた瞬間、まったく異なる重さをもって身体に迫ってきた。同じ空気を吸い、同じ道を歩き、そこに流れる時間の中に身を置くとき、過去と現在は決して切り離されたものではなく、連続する「いま」として生々しく立ち現れる。その感覚は、静かでありながらも、内側からゆっくりと揺さぶるものだった。

筆者がコザのまちを歩いてまず目にしたのは、英語と日本語が入り混じる看板の数々であった。ネオンに照らされたアルファベットと、どこか歪んだカタカナや漢字が同じ空間に共存し、そのどちらもが完全にはこの土地に馴染みきれていないように感じられた。その不均衡な風景を見上げるとき、写

真家・東松照明が残した「沖縄に基地があるのではなく、基地の中に沖縄がある」という言葉が、単なる知識としてではなく、剥き出しの感覚として迫ってくる。巨大な基地という存在が、この土地の風景や生活、さらには人びとの言語や身体感覚までも包み込み、覆い尽くそうとしている現実の中に、筆者自身も一瞬飲み込まれそうになった。しかし、そのような環境の中で、人びとは決して沈黙していたわけではないだろう。むしろ、声にならない声を抱えながらも、自らの足でこの土地に立ち続け、「生き延びる」ための道を模索し続けてきた。その痕跡は、かつて米兵相手のバーや仕立屋、理髪店が軒を連ねた通りの一つひとつに刻まれている（加藤 2018）。そこでは、「正しい言葉」を話すことよりも、目の前の客と向き合い、日々の糧を得ることが優先された。英語であれ、日本語であれ、それらは単なる言語ではなく、生活を成立させるための「道具」であり、生き延びるための切実な選択でもあった。その選択の一つひとつが、家族を支え、明日をつなぐための実践であったことを思うとき、言葉は単なるコミュニケーションの手段を超え、命をつなぐ行為そのものとして立ち上がってくるように感じられた。

同時に、筆者はここで改めて、「言葉とは何か」という問いに向き合わされることとなった。日本で出会った内モンゴル出身モンゴル人留学生であるトドさんは、幼少期に短期間だけモンゴル語教育を受け、その後は一貫して漢語教育の中で育ってきた人物である。彼はモンゴル語を自由に読み書きすることはできない（朝木日力格・三好 2026）。しかし、日本で生活する中で、「モンゴル語ができるかどうか」だけでは測ることのできない、自らの文化感覚や身体感覚に気づいていったという。彼にとって「モンゴル人であること」は、言語能力の有無よりも、幼い頃に飲んだミルクティーの味や、家族との記憶、草原をめぐる感覚、馬頭琴の響きに心を動かされる身体の反応の中に存在していた（朝木日力格・三好 2026）。その話を聞いたとき、筆者は、これまで自分が「モンゴル語を話せること」に過剰な意味を与えていたことに気づかされた。もちろん、言語は文化を支える大切な基盤である。しかし一方で、言葉だけでは捉えきれない感情や記憶、身体に宿る文化の感覚もまた存在しているのではないだろうか。コザの街を歩きながら感じたのも、ま

さにそのような「言葉だけでは言い尽くせないもの」の存在であった。

2024 年に開催された「記憶の継承ラボ」によるシンポジウム「ポスト体験時代の記憶の継承—アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ—」において、沖縄市史編集担当の恩河尚氏は、戦後沖縄の文化を象徴する言葉として「チャンプルー」を紹介していた。そのとき筆者は、この言葉を文化の「混合」や「融合」として理解したつもりでいた。しかし、コザの空間に身を置き、その空気を肌で感じる中で、その理解がいかに表層的であったかに気づかされる。「チャンプルー」とは、単なる調和的な融合ではない。むしろ、異なるもの同士が摩擦し、衝突し、ときに違和感や痛みを伴いながらも、それでもなお共に生きていこうとする現実の中から生まれた、生の知恵なのではないだろうか。英語も標準語も、自らのものとして自然に受け入れたわけではない。それらは、生きるために、否応なく取り込まざるを得なかった「外からの言葉」である。しかし人びとは、それを単に受け入れるのではなく、混ぜ合わせ、ずらし、自分たちなりのリズムへと変えながら暮らしの中に取り込んでいった。その姿は、異なる価値観の狭間に身を置きながら、自らの暮らしを成り立たせようとする、静かな営みとして筆者の目に映った。

また、その風景を見つめながら筆者は、「豊かさ」とは何かということについても考えさせられた。近代化や発展の名のもとで、人びとはより便利で安定した暮らしを求めてきた。その願い自体は、誰にとっても自然なものであろう。しかし、その過程で、言葉や記憶、身体に宿る感覚までもが少しずつ変化していく現実もまた存在している。コザの街角に漂う独特の空気には、そうした変化の中でもなお、自分たちなりの暮らしの感覚を手放さずに生きてきた人びとの痕跡が残されているように思われた。

しかし、そのたくましさの背後には、常に歴史や文化が次第に見えにくくなっていくことへの不安も静かに横たわっている。記憶や言語、文化が、大きな社会の流れの中で上書きされ、次第に輪郭を失っていくかもしれないという感覚である。そして、その積み重なった感情が、ある瞬間に強く噴き出すこともある。1970 年の「コザ暴動」(山崎 2014) は、そうした歴史の中

で起きた出来事として理解できるのかもしれない。それは単なる破壊ではなく、「ここに生きている」という感覚を必死に表そうとした人びとの切実な表現でもあったのではないだろうか。コザの路地裏に残る、歪でありながらもどこか温度を感じさせる商いの痕跡——それらは単なる過去の遺物ではない。そこには、どれほど社会が変化しようとも、その場所で呼吸をし、働き、家族を支えながら暮らしをつないできた人びとの営み痕跡が刻まれているように感じられた。その一つひとつは小さなものかもしれない。しかし、その小さな営みの積み重ねこそが、土地の記憶を支えてきたのではないだろうか。

筆者がコザの街角で感じた、狭間に立つ人びとの息遣いは、決してこの土地に限られたものではないように思われた。その震えは、筆者の内側に深く響き、遠く離れた内モンゴルの風景へとつながっていった。異なる歴史と場所に生きながらも、社会の変化の狭間で自らの暮らしや感覚を守りながら生きようとする人びとの姿には、どこか通じ合うものがあるのかもしれない。そんな思いが、筆者の中で芽生えていったのである。

3. 内モンゴルの風景

内モンゴルのまちを歩けば、看板に躍る文字のどこか歪な並びに、否応なく目を引き寄せられる。通りのざわめきの中でふと視線を上げたとき、そこに刻まれた言語の並びは、この土地に積み重ねられてきた歴史の層を、静かに、映し出しているように感じられる。ある場所では、モンゴル語と中国語が並んでいる。しかしその並置は必ずしも対等ではなく、一方が大きく表示され、もう一方が控えめに添えられているような場面も少なくない。また別の場所では、かつて存在していたモンゴル文字が風景の中から姿を消し、中国語のみが整然と並んでいることもある。その光景に触れるたびに、言語の変化とは単なる表記の問題ではなく、人びとの記憶や暮らし方、さらにももの感じ方そのものに関わる出来事なのだということを、筆者は強く意識される。その感覚は、沖縄・コザのゲート通りで目にした風景とも、どこか

重なって見えた。英語と日本語が入り混じる看板の下で、人びとがそれぞれの暮らしを営んでいたように、内モンゴルでもまた、人びとは社会の変化の中で与えられた言葉と向き合いながら日常を生きている。そこでは言葉は単なるコミュニケーションの手段ではなく、学校教育や就職、社会生活と深く結びつきながら、人びとの生き方そのものに影響を与えているように思えた。

しかし、その一方で、言葉だけでは捉えきれない文化の感覚もまた確かに存在している。上述したトドさんは、幼少期に短期間モンゴル語教育を受けた後、一貫して漢語教育の中で育ってきた人物である。彼は流暢にモンゴル語を読み書きできるわけではない。それでも彼は、自らを「モンゴル人」として自然に受け止めていた。そして、日本に来たことで、自分の中に深く根付いていた文化感覚に改めて気づかされたという。トドさんは、モンゴル語を十分に話せないことに対して、長いあいだ後ろめたさを感じていたと語っていた。内モンゴル社会の中では、「モンゴル語を話せること」が民族的な誇りとして語られる場面が少なくない。そのため、モンゴル語を自由に使えない人びとが、自分を「不完全なモンゴル人」であるかのように感じてしまうこともある。しかし、日本でさまざまな人と出会う中で、トドさんは次第に、「モンゴル人であること」は単に言語能力だけで決まるものではないと感じるようになったという。彼にとってモンゴル文化とは、モンゴル語教育を受けてきたか否かという問題だけではなく、幼少期の家族との記憶や、ミルクティーの味、草原の風景、馬頭琴の音色に心を動かされる身体感覚として存在していた。つまり、それは「知識」として学んだ文化というよりも、身体と感情の中に自然と染み込んでいた「生の感覚」であったと言えるのかもしれない。トドさんの話を聞きながら、筆者は、自分自身が「モンゴル語を話せること」に強い意味を与えすぎていたことに気づかされた。もちろん、言語は民族文化を支える大切な基盤である。しかし、その一方で、言葉だけでは測ることのできない記憶や感覚もまた、人びとの中には確かに存在しているのではないだろうか。

内モンゴルでは、近代化や都市化、教育制度の変化の中で、人びとの生活様式も大きく変わってきた。清朝末期以降、放牧地の開墾や漢人の入植が進

み、牧畜を中心としていた暮らしの中に「農耕」という新たな生活様式が広がっていった（巴図 2006）。その結果、人びとは遊牧だけに依拠することが難しくなり、農耕や都市労働など、多様な生業を組み合わせなが暮らしていくようになった。しかし、それは単なる「転換」ではなかった。遊牧か農耕かという二項対立のいずれかに収まるのではなく、そのあいだ——すなわち「はざま」に身を置き続けるという、生のあり方であった（包 2025）。

また、2020 年以降の教育政策の変化は、人びとの暮らしにさらに大きな影響を与えている。「国語」「道徳」「歴史」といった科目が中国語による授業へと順次移行される中で、モンゴル語教育の位置づけは徐々に変化しつつある。この状況に対して、多くの人びとが複雑な思いを抱いているように見える。一方では、社会の中でより安定した生活を送るためには中国語能力が重要であるという現実があり、他方では、自分たちの言語や文化が少しずつ変わっていくことへの戸惑いや葛藤も存在している。しかし、その変化の中でも、人びとはそれぞれのやり方で暮らしを続けている。近年の内モンゴルでは、若者たちが警察官や軍隊、公務員などの公的制度試験を目指す姿も多く見られる。そこには安定した生活への憧れや、家族を支えたいという思いがあるのだろう。その姿は、かつてコザの街で、人びとが英語や日本語を使い分けながら生活を営んでいた様子とも、どこか重なって感じられる。どちらの地域でも、人びとは大きな社会変化の中で、与えられた条件を受け入れながら、自分なりの暮らし方を模索してきたのである。そして、その営みの中には、単純に「失われた」「守られた」という言葉では語りきれない、複雑で繊細な感情が存在しているように思われた。

筆者は、内モンゴルの風景を見つめながら、「生き延びる」ということは、単に何かを守り続けることだけではなく、社会変化の中で揺れ動きながら、それでもなお自分の感覚を完全には手放さずに暮らしていくことなのかもしれない、とを感じるようになった。言葉は確かに大切である。しかし、言葉だけがすべてではなく、人びとの身体に刻まれた記憶や感情、日々の生活の中で育まれてきた感覚もまた、その人がその土地で生きてきた証として存在しているのではないだろうか。

4. おわりに

本稿では、写真展『戦後』の生活者の思想的営為の記憶とその現在」を起点として、沖縄・コザの街の経験、そして内モンゴルの現実を重ね合わせながら、「生き延びる」という営みの中に宿る生活者の感覚や思想について考えてきた。そこに通底していたのは、国家や制度といった社会の大きな変化に揺さぶられながらも、その狭間で日々の暮らしを営み続けようとする人びとの姿であった。

沖縄における「チャンプルー」が示していたのは、単なる文化の混合ではなく、異なる価値観や言葉が交差する中で、それでも暮らしを成り立たせようとする人びとの知恵であったように思われる。同様に、内モンゴルにおいても、人びとは言葉や生業、教育制度や社会の変化の中で揺れ動きながら、その都度、自らの生き方を模索してきた。その選択は決して自由なものばかりではない。しかし、限られた条件の中で、それでも家族を支え、生活をつなぎ、次の世代へ何かを残そうとする営みの中にこそ、「生活者の思想」が現れているのではないだろうか。

とりわけ、本稿を通して改めて考えさせられたのは、「言葉」の持つ重みである。どの言葉を話し、どの言葉で学び、どの言葉を次世代へ伝えていくのか——それは単なるコミュニケーションの問題ではなく、人びとの記憶や感情、生き方そのものと深く結びついている。しかし同時に、言葉だけですべてを語り尽くせるわけではないということにも気づかされた。

日本で出会った内モンゴル出身モンゴル人留学生である出会ったトドさんは、モンゴル語を自由に読み書きできるわけではなかった。それでも彼は、ミルクティーの味や草原の風景、家族との記憶、馬頭琴の響きに心を動かされる感覚を通して、「モンゴル人として生きている」という実感を語ってくれた（朝木日力格・三好 2026）。その姿を前にしたとき、筆者は、自分がこれまで「モンゴル語を話せること」に強い意味を与えすぎていたことに気づかされた。もちろん、言語を守ろうとする思いは大切である。しかし、その思いが知らず知らずのうちに、同じモンゴル人を追い詰めてしまうこともあ

るのかもしれない。

コザの街角で見た英語と日本語の混ざり合う風景も、内モンゴルで見たモンゴル語と中国語の並ぶ看板も、人びとが社会の変化の中で生きてきた痕跡であった。そこには、「何を残し、何を受け入れながら暮らしていくのか」という問いが静かに横たわっている。そしてその問いに対する答えは、一つではないのだろう。人びとはそれぞれの立場や状況の中で、ときに迷い、ときに揺れながら、自分なりの生き方を探している。また、その背景には、より安定した暮らしや豊かさへの憧れも存在しているように思われる。より良い教育を受けたい、安定した仕事に就きたい、家族に安心した生活を送らせたい——そうした願いは、どの社会にも存在する自然な感情である。その中で、人びとは新しい言葉や制度を受け入れながら生きていく。しかしその一方で、身体に刻まれた記憶や感覚、土地に根ざした暮らしの感触までは、簡単には失われないのかもしれない。

写真展で目にした長崎、沖縄、水俣、福島風景、そしてコザの街角、内モンゴルの看板に刻まれた文字——それらはいずれも、過去の出来事として閉じられたものではなく、現在もなお続いている問いであるように感じられた。それは、「いかに生き延びるのか」という問いであると同時に、「何を手放さずに生きるのか」という問いでもあるだろう。しかし、どれほど社会が変化し、言葉や文化のあり方が変わっていったとしても、人びとの日々の営みの中には、完全には失われない感覚や記憶が残り続けているように思われる。その小さな営みの痕跡に目を凝らし続けること——それ自体がまた、記憶を未来へとつないでいく一つの方法なのではないだろうか。

引用参考文献

加藤政洋 2018「基地都市コザにおける門前商店街『ゲート通り』の店舗構成とその特色」『立命館文学』656、236-254 頁。

近藤健一郎 2005「近代沖縄における方言札の実態—禁じられた言葉」『愛知県立大学文学部論集』国文学科編 53、3-14 頁。

朝木日力格・三好恵真子 2026「外側から構築される内モンゴル像と語られ

ない内モンゴルの狭間に生きるということー日本に暮らす内モンゴル出身のモンゴル人留学生の対話的オートエスノグラフィー」『生活学論叢』48、96-110 頁。

巴図 2006「内モンゴルにおける牧畜経営と耕種農業」『横浜国際社会科学研究』第11巻第3号、21-43 頁。

包双月 2025『遊牧と農耕のはざまを生きる 定住モンゴル人の民族誌』京都大学出版会。

山崎孝史 2014「軍民境界都市としてのコザー暴動の記憶とアイデンティティ」、谷富夫・安藤由美・野入直美編『持続と変容の沖縄社会：沖縄的なものの現在』ミネルヴァ書房、218-242 頁。

レスポンス④

写真を通じて「平和」を考える——日常の記憶と市民のつながりから

冷 昕媛*

このたび、「記憶の継承ラボ」写真展『戦後』の生活者の思想的営為の記憶とその現在」に寄稿する機会をいただいたことを嬉しく思う。

長崎、沖縄、福島、水俣など、この写真展が取り上げる場所には、それぞれ深い歴史がある。核兵器、基地、原子力利用、公害病など、そこに刻まれてきた問題も一様ではない。一方では、国家と国家、人間と人間の対立として現れる戦争や紛争があり、他方では、人間の社会経済活動と自然環境との関係のなかで生じてきた公害や環境破壊がある。一見すると異なるこれらの問題をつないでいるのは、底層において共通する価値追求としての「平和」ではないか。写真を見ながら改めて考えたのは、これらの問題の根底に、「平和」を実現しようとする共通の価値追求があるということである。

竹本（2025）は、「平和」の多様性について次のように指摘している¹。平和とは、単に「戦争がない状態」だけを意味するものではない。ノーベル平和賞が、戦争終結や紛争解決に尽力した人びとだけでなく、教育、貧困問題、環境保護などに取り組んできた人びとにも授与されてきたことから、「平

* 大阪大学人間科学研究科・博士後期課程

¹ 竹本真希子「平和とは？多様な定義や世界の平和の現状、私たちにできる貢献を解説」『朝日新聞 SDGs ACTION!』2025年11月5日。

<https://www.asahi.com/sdgs/article/16120203>（2026年8月29日最終アクセス）

和」という概念が持つ広がりを読み取ることができる。

● 「平和」へのアプローチ

私自身、「戦争」や「紛争」はあまりに重いテーマであり、そこに映し出されている悲しみや、取り返すことのできない喪失を想像すると、思わず目をそらしてしまうことがある。

一方、こうした「平和」へのアプローチとして、吉成氏が行っているのが「写真実践」である。そこに写し出されているのは、事件当時の場面を再現したものではなく、むしろ人びとの暮らしや町並みといった日常の風景である。そして、写真に添えられたキャプションや吉成氏の説明を通して、「戦争」「原爆」「基地」「原発」「公害」といった大きな言葉が、そこに暮らしてきた一人ひとりの日常生活の次元へと引き戻されていくように感じた。例えば、原爆の記憶継承のシンボルとなっている「長崎・城山小学校の嘉代子桜」²からは、娘の嘉代子を二度と「おかえり」と迎えることのできなかつた母親の思いが伝わってくる。また、写真に写る折り鶴に込められた「平和」への思いも、見る者の心に伝わってくる。

また、もう一つの「平和」へのアクセスとして、国家間の関係や外交だけによって実現されるものではなく、市民一人ひとりの継続的な実践によっても支えられているということである。これに関して、筆者にとって特に印象に残ったのが、「長崎城山小学校平和祈念館・山口政則さん」という写真である。筆者はこれまで環境 NGO を研究してきた。NGO や NPO は、国家や企業とは異なる立場から社会課題に取り組む市民社会の主体の一つとして位置づけられる。そのため、長年にわたり平和活動に取り組んできた山口さんの姿を見て、中国での調査を通じて出会った環境 NGO のリーダーたちの

²大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト「記憶の継承ラボ」HP「【活動報告】「記憶の継承ラボ」による長崎でのフィールドワーク報告」

<https://relay-memories.hus.osaka-u.ac.jp/2025/09/19/news-26/> (2026年8月29日最終アクセス)

活動を思い出した。

そのなかで、吉林省で 2000 年頃から砂漠化防止活動に取り組んできた W さんとの出会いがある。筆者が W さんに活動を始めたきっかけを尋ねたところ、亡くなられた日本人の活動から影響を受けたと語ってくれた。その人物が、中国内モンゴル自治区の砂漠地帯で緑化活動に取り組んだ日本沙漠緑化実践協会の遠山正瑛会長である³。遠山さんは 1991 年から現地で緑化活動を本格的に進め、厳しい環境のなかで活動を継続し、最終的には 100 万本の植樹を実現したとされる。その後、この活動には日本と中国から多くのボランティアが参加し、長年にわたる植林活動へと発展した。こうした市民レベルでの継続的な交流は、中日間の地方交流、さらには平和交流の一つの実践として捉えることができる。

こうして、「平和」を大きな理念として捉えるだけでなく、日常生活のなかで他者の経験に触れ、理解しようとし、人と人とのつながりを持続させること。今回の写真展を通じて、こうした身近な実践もまた、「平和」への一つのアプローチであると改めて考えた。

³ 日本沙漠緑化実践協会「日本沙漠緑化実践協会の概要」
https://sabakuryokka.org/?page_id=129 (2026 年 8 月 29 日最終アクセス)

写真展を契機とした生活者の思想の継承と実践者の役割に関する一考察

上官 世穂*

1. はじめに

第二次世界大戦の終結から 80 年が経過した現在、戦争体験を持つ世代が減少しつつある一方で、世界各地では新たな戦争や紛争が拡大している。ウクライナでの戦争がいまだ終結しない中、アウシュヴィッツに象徴される悲惨な歴史を記念するイスラエルによるガザ地区での衝突が続き、さらにアメリカも関与する形で、2026 年にはイランをめぐる戦いの影響も深刻化しているように見える。

戦争とは表裏一体とも言えるが、物理的な衝突にともない、インターネットでも見られるように、同一の出来事に対して異なる国家やメディア、さらに人々がしばしば対立する見解が提示されており、これらは批判と反論、加害と被害の論争だけでなく、あえて漠然とした感覚や無関心へも絶えず往復しているように見える。したがって、その背後にある共同意識の分断がより一層顕在化し、近い昔に共有されていた悲しみや教訓を含む戦争の記憶と遺産からは、まさに遠ざかりながらも、再び現実的に上演されていると考えられる。

* 大阪大学人間科学研究科・博士後期課程

そこで出会ったのは、「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」をテーマとする今回の写真展のことである。特に、当時写真を見て、主催者によるギャラリートークを聞きながら、幸いなことに、筆者が以前現場を訪れる中で親しみを持つ機会をもらった長崎の風景と平和活動に奔走する人達の姿が脳内に現れたことで、戦争や災害の記憶が単なる歴史的事実や教訓としてではなく、それを生きてきた人々の、さらにそれに関与していく人々の生活や体験として現在までも持続しているのではないかと、改めて感じられた。

何らかの機能を発揮する知識やシンボルという一面以外に、その表象に圧縮できない当事者たちの生活と体験を含めて、受け止めながら、自分なりに思案することで、持続可能な理解や認識が可能になるのではないだろうか。したがって、戦争や被害と名付けられる事件や教訓に止まらず、実際に事件を生きてきた人々の記憶や体験をなんとか継承する重要性について、感じたことを踏まえて、議論していきたい。

2. 記憶論から見る重要性——独唱より合唱である記憶という現象

そもそも、記憶の継承とは何を指すのだろうか。記憶に関する議論は、心理学や生理学の観点だけでなく、「集合的記憶」や「文化的記憶」といった理論的枠組みにおいて、社会的・文化的な現象として理解されてきた。この文脈では、記憶とアイデンティティは常に密接に結びついている。アスマン（2021）は、記憶が「アイデンティティの痕跡を帯びた知識、すなわち自己に関する知識」であると指摘し、「集合的記憶」という概念の提出者であるアルバックスは、記憶が歴史のような外在的で客観的な知識と異なるのは、個人が現在に立っても過去との繋がりまたは「時間的連続性」を感じ取る点にあると強調した（金 2015）。このような関係性ゆえに、記憶は単なる過去に関する知識にとどまらず、自己の経験や実践行動も支えているものである。

この議論に立てば、記憶とアイデンティティは多様でありながら常に変化

している。人は所属する集団やコミュニティ、信念体系、さらには政治的環境の違いによって、過去を異なる仕方で理解して表現し、そしてその生成や表現は常に社会的枠組みによって影響を受けている (Assmann, 2021)。したがって、原子化の深刻化に伴いより流動的な現代社会においては、記憶とアイデンティティは時空間や伝統的な集団の限界を越えて広がる可能性を持ち、そのあり方もいっそう複雑になっているだろう。

さらに、より広い社会的・集団的なレベルに目を向けると、記憶が「どれほど社会を主導する政治的な力の道具となっているのか」という問題は、常に議論の中心にある (Winter, 2021)。多くの研究は、記念施設やアーカイブの分析を通じて、標準化された過去がいかにして統一的なアイデンティティを形成し、その正当性を支えているかを示してきた。一方で、人々が記念の場や既存の語りに対して主流とは異なる解釈を与え、多様で時に対抗的な理解を生み出すことも指摘されている。

しかし、このような構図は単にどちらか一方の立場を選ぶことを意味していない。むしろ、記憶が社会的現象として成立することは、上からの働きかけと下からの実践が交差する中で形成されることを示している。Winter (2021) が論じるように、「記念とはしばしば単声ではなく、多声の合唱である」。したがって、記憶を単一の語りや主張の伝達として捉えるよりも、多様な要素が結びついて構成される構造として理解するほうが適切であり、それは一枚の「網」と、その「織り目」に近いだろう。この構造の中で、図像、言葉、記録、場所などの要素は孤立して存在するのではなく、具体的な状況と人々の実践の中で結びつき、その意味は絶えず理解され、再解釈され、更新されていくと考えられる。

このような理解に基づけば、記憶の継承は特定の場所や資料を静的に保存することではなく、継続的に展開されるプロセスとして捉えられるべきである (Olick, 1999)。したがって、記憶の継承は制度や象徴的装置だけでなく、日常生活の中で過去を理解し表現し続ける実践者にも依存している。

以上を踏まえて考えれば、戦後を生きた生活者の思考と、実践者の具体的な活動はいずれも重要である。一方で、生活者の思考は具体的な生活経験の

表現として、主流の語りとは異なる「アーカイブ」とみなすことができるだろう。他方で、それらの思考は実践者の関与を通じて、絶えず交流され、理解され、再び表現されることで継承され、変化していく。つまり、生活者の思考は単に保存される対象ではなく、実践の中で絶えず生成され更新される意味の資源であり、また実践者も単なる継承者ではなく、記憶が持続するための条件の一部をなしているのではないだろうか。

3. 写真と実践で受け止める被害のもう一面——広く参加される非公式な記念実践と、地域の物語に根ざした生活と性格

ここで、今回の写真展から得た印象を改めて振り返りたい。

長崎については、筆者の所属する環境行動学研究室の指導のもと、2024年と2025年の「長崎原爆の日」にあわせた同時期に現地を訪れ、8月9日の城山小学校の平和祈念式に参加し、三日間のフィールドワークを行った。現地の平和案内人の案内により、平和祈念式のほか、城山小学校、浦上天主堂、山王神社、さらに如己堂や永井隆記念館などを含めて見学した。今回の写真にも写されていた案内人の語りや、地元の平和祈念式と場所の展示を通じて、個人の語りと集団的实践に基づく多様な記憶表現に触れるとともに、被爆遺構や樹木、建物といった物質的存在から、無言ながら持続する歴史の痕跡も感じ取った。

これらの要素は主に平和エリアやその辺りに集中しつつも、市内各所に広がり、相互に関係しながら重層的に現れている。一方で原爆という出来事と結びつき、他方で長崎の宗教や地域史とも重なっていて、またその表現は公式のイベントに限られず、時空間を越えて継続しているように見え、長崎の原爆記憶に関する祈念は、広く非公式な性格を持ち、地域の歴史と生活に深く根ざしていると考えられる。さらに、被爆者個々の経験や語り、そして現在まで続いている平和案内人やその他の有志の人々などによる実践活動を通じて、この記憶は単なる被害の表現にとどまらず、現在と未来に向けた生

活の意志として語られつつ、人々の生活と結びついている。こうした経験により、私の長崎と原爆への理解は、単なる悲惨さの認識から、地域全体への視点へと変化した。

こうした地域性と、生活意志の伝承は、沖縄の事例にも見られる。展示された写真や、ギャラリートークと解説、さらに沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」の記録を通じて、戦時の被害経験と、戦後の米軍統治下で生まれたコザの街や音楽文化にも代表される「チャンプルー文化」とが重なり合い、「苦難」だけではない重層的な表現が形成され、沖縄という地域と性格の一部が解釈され受け止められているだろう。それは歴史を実際に生きた人々の思想や文化の成果であり、沖縄のことをより具体的に見ていきたいという関心を喚起したと感じた。

こうした経験から、今野（2022）による「自律への教育」に関する議論を想起する。つまり、「自らが主体となること、自我を強化すること、自らが責任を引き受けようという態度、そうしたことがまさに、「アウシュウィッツ以後の教育」で重要な課題であり、だから、「自律への教育」（傍点、今野）なのだろうと思います」（今野 2022：105）という重要な指摘である。戦争記憶の継承は単なる「死の知識」の伝達ではなく、想像力を活用し、不在になった「語られない体験、失われた体験、沈黙と、その重さ」の呼び戻しに直面しなければならない。このような継承は、個人の主体性と市民社会の形成にとって重要であり、戦後を生きた人々の思想を引き継ぐ意義もまた、ここにあると考えられる。

引用参考文献

和文

金瑛 2015『記憶の社会学とアルバックス』晃洋書房。

今野日出晴 2022「なぜ戦争体験を継承するのか―歴史教育の視点から―」
『岩手大学文化論叢』第11輯、89–108頁。

欧文

Olick, J. K. (1999). Collective memory: The two cultures. *Sociological theory*, 17(3), 333-348.

中文

Assmann, J. (2010／2021)「交往記憶和文化記憶」Erll, A.・Nünning, A. (編)『文化記憶研究指南 (A Companion to Cultural Memory Studies)』(李恭忠・李霞訳, pp.109-149) 南京大学出版社.

Winter, J. (2010／2021)「記憶之場与戦争陰影」Erll, A.・Nünning, A. (編)『文化記憶研究指南 (A Companion to Cultural Memory Studies)』(李恭忠・李霞訳, pp.61-94) 南京大学出版社.

レスポンス⑥

イメージが出来事を保存するために

瀧口 隆*

世界は至る所で撮影され、至る所で上映・展示される。小型化したカメラは至る所に配置され、人びとはそれぞれ携帯端末に付属したカメラを手にし、いつでもどこでも撮影は行われる。その撮影されたイメージは、データの海に垂れ流され、監視や情報の流通、または人々の扇動のために利用される。街に出ればデジタルサイネージが溢れ、手にはスマートフォンがあり、いつでもどこでも画面に釘付けになって次から次へと流れてくる画像や映像を目にする。そして今日、溢れかえったイメージのデータを基に AI によって「リアルな」イメージが生成される。もはや「撮影し、編集し、上映する」といったプロセス抜きに、イメージが溢れかえって無限増殖を始めている。そう言っても過言ではないだろう。

今日においてより一層、イメージが人々を扇動し管理する力を強めている一方で、我々は上記のような溢れかえったイメージに惑わされ、イメージには現実や出来事が真に保存されているということへの信は揺らいでいる。イメージが溢れるなかで、何をいかにして撮るべきなのか、そもそも映画や写真は何か表象する力を有しているのか。これら問題は議論されて久しいが¹、視覚メディアが急速に展開しつつ、それら視覚的イメージへの信が危機の時代にあるなかで、ますますそれらは思考されなければならない状況下にあるだろう。

* 高校教員。te2no.kata0[at]gmail.com

それでもなお写真や映像が、ある出来事を、ある人々の思いを、ある時のある場所の姿を保存できる²とすれば、その写真や映像の力はいかに発揮されるのか。イメージに対して問われ続けるのは、このことなのではないだろうか。そして吉成哲平さんの展示会は、今日の状況下でブラックボックス化している「撮影し、編集し（選定・配置し）、上映する（展示する）」といったイメージが生成・流通されるプロセスを取り戻そうとしているのではないか。吉成さんの展示会に行きお話を聞きながら写真を鑑賞するなかで考えられたのは、このことであった。

本展に並ぶのは、「記憶の継承ラボ」のフィールドワークを通じて、長崎、沖縄、宮古島、福島、水俣の各地で撮影された写真群である。被爆地の遺構、戦跡の上に続く日常の暮らし、原発事故後の更地、水俣湾の埋立地。これらはいずれも、「戦後」の時間が今もなお継続している場所の記録である。各地の歴史的出来事は、そもそもどこからどこまでの時間を持っているのか自体、決定的ではない。それゆえにそこに写っているのは、それら出来事の象徴ではない。むしろどれもが、それら出来事は鑑賞者としての私から空間的にも時間的にも「距離」があることを示す痕跡である。しかしとはいえ、吉成さんの展示と、そこで語られる当時を生きた人々や現地を生きる人々の言葉、シャッターを切ったときの思いなどを語る吉成さん自身の案内から、私は写真が保存する出来事に思いをはせる。痕跡を見出そうとする。

吉成さんの写真は、時間の厚みを捉えようとしている。この「厚み」の正体は何か。たとえば、長崎城山小学校の校庭に植えられた嘉代子桜の写真。爆心地からわずか五百メートル、原爆の熱線がかつて浴びた土地に生き、老いゆく木を今は何本もの柱が支えている。被爆当日に仕事へ行きたくないと言っていた娘を送り出してしまった母親の語り得ない思いが、この写真に添えられる。あるいは、城山小学校平和祈念館で机に向かう山口政則さんの後ろ姿を収めた一枚。オレンジ色のポロシャツに「城山小ピースガイド」の文字。長崎での被爆体験を継承するために実際に動いている人の姿が映し出される。この語られるエピソードやそこに映る人々や物の具体性に、出来事から遠く離れてしまった現代の大阪の地で生活しているなかでは想像するこ

とが難しい具体性に、出来事が今でも生きているという時間の厚みを感じる。出来事はある時ある場所で現に生じて、そしてその時からその土地で、その人々のあいだで生きているのだということを感じる。大抵のことが調べれば出てくる現代においてなお、写真がおさめる日常的なありふれたものの具体性を展示会で見るとき、私はそれらを見逃し聞き逃しているのかもしれないとハッとさせられる。

嘉手納基地の写真。奥に小さく離陸する戦闘機が見え、手前にはそれを撮ろうとスマートフォンを構えた手が焦点のあっていない状態で映る。嘉手納基地の展望デッキで戦闘機にカメラを向ける人びとの傍らで耳にした「見れてよかったなあ」という観光客の声が、「棘のように胸に刺さった」と吉成さんは述べる。「基地」を目の前にしてもなお、「基地」と共に営まれる生活の現実との遠さ。これは写真や映画一般に課せられる課題であるように思える。特にそれが、撮影者や鑑賞者がその現実から遠く離れた地で生きている場合、その課題は顕著になる。

吉成さんの写真は、その距離を簡単に埋めてくれるものではない。しかし吉成さんの写真は、その遠く離れた出来事が生きている、あるいは生きていた具体的な証を保存する。それは例えば、「平和祈念公園」の地図や、宮古島の「ツヌジ御嶽」の空間に私はそれを感じ取る。そうか沖縄は、中国大陆や台湾、朝鮮半島、南方の島々と距離が近いのかと。沖縄と本土には空間的にも、文化的にも距離があるのかと。「日本史」のなかで見えにくくなってしまふ、本土と異なる沖縄のネットワークがあることを吉成さんの写真は伝える。吉成さんの写真から、吉成さんは出来事や現実との距離をあけないために、実際にその土地に向かいその生きられた現実・出来事に近づこうとシャッターを切っているように感じた。

吉成さんの写真からは、時間的にも空間的にも離れていってしまいかねない出来事・現実の遠さと、しかし出来事は記憶として人々や風景のなかに現に生きているのだという出来事・現実の近さ、その双方を感じる。「撮影し、編集し、上映する」というプロセスを抜いてしまった画像や映像では、忘却されてしまうこの「距離」の問題を、吉成さんの展示会では提起している。

イメージを撮るとき、それらを見るとき、そこには「距離」の問題があるのだと展示会を通して強く感じた。

吉成さんは、写真を撮るときに関わった人々、そこで聞いた話を大切にす。つまり「撮影し、編集し（選定・配置し）、上映する（展示する）」というプロセスをもう一度、踏まえ直そうとしている。そのプロセスこそ「距離」なのだろうか。鑑賞者である私もまた、吉成さんの写真に乗ってそれを辿り直すことができるのだろうか。ただ確実に私は、吉成さんはイメージが出来事や現実の痕跡を保存する力を写真に返そうとしているのだと感じた。

撮ることは商品を作ることではないし、見ることは消費ではない。「見れてよかった」というものでは決してない。とはいえ撮ることはイメージを生産することであり、展示会はそのイメージを多くの人々のあいだに流通させることである。重要だと思われるのは写真を撮る・見ることに於いて、そこに流れ続けてきた時間と、その時間を生きてきた人びとの思いへと、自分自身を開いていくことである。この「イメージを作って、見る」というプロセスを撮影の場においても、さらには展示会という流通の場においても辿り直し創造すること。この吉成さんの写真実践は、今日のイメージを取り巻く現状に抗して、イメージの力を信じる基本姿勢になるのではないだろうか。

引用参考文献

PP : Deleuze, Gilles. 1990. POURPARLERS. Paris: MINUIT. (ドゥルーズ、ジル 2010『記号と事件』宮林寛訳、東京：河出書房新社。)

¹ クロード・ランズマン監督の『SHOAH』を発端とした議論や近年の濱口竜介や小森はるか+瀬尾夏美のドキュメンタリ映画の取り組みなど、その問題の渦中にあると言えるだろう。

² ここで使っている「保存」とはいかなる意味であるのか、哲学の領野で議論されるべきではあるのだが、それは今後の課題にしたい。ただここで言う保存の問題は、ジル・ドゥルーズが映画批評家セルジュ・ダネの『映画＝日記』の序文にあてた文章のなかで提起される問題であり、ダネが痕跡を保存する映像の力能を指すときに使う〈代捕 *supplément*〉という概念は、デリダ由来であるだろうとドゥルーズは指摘している (PP: pp. 104–105/ 151–153 頁)。

カントと一緒に写真展に行く

中谷 碩岐*

写真展に行くとき、私はいつもある種の引け目を感じている。長い間私は「素養」が無いので写真を「適切」に理解することはできないと思っていたし、あるいは今もなおそう思っているところがある。「適切」などと考えてしまうあたり、私にはあたまでっかちなところがあって、感覚的＝美的な経験も論理的に処理するきらいがあるようだ。

カントは『純粹理性批判』において、経験の素材を受け取る直観としての「感性」と、その素材を統一するための概念的カテゴリを提供する「悟性」によって経験の構造を説明していた。写真展に行くとき、私はいつもカントのことを考えながら写真を見る。写真それ自体から感覚的に意味を引き出すことのできない私は、なんとかそこに意味を見出そうと必死にキャプションを熟読する。この枠組みや「カテゴリ」があってはじめて、私は写真を意味のある経験として受容できるのであり、カントのレンズを通して私は写真を、世界を見る。カントと一緒に、私は写真展に行く。

こうした鑑賞方法は「適切」なものではないように思われるがゆえに、私はある種の引け目を感じる。これはあるいは、自分のフィールドを前にしたフィールドワーカーの引け目のようなものかもしれない。すなわち、自分が不当な、的外れな、あるいは少なくとも不十分な仕方フィールドの文脈を、それゆえ世界を理解しているのではないかという引け目。しかし、とりわけ

* 大阪大学人間科学研究科・博士後期課程/(独)日本学術振興会特別研究員 DC1

「記憶の継承」が問題になるときには、キャプションは必要不可欠でもある。バルトは写真が「そこに―それが―あった」と確信させる作用を有していると述べていたが、写真は「それが何なのか」、「それが何を意味するのか」はやはり教えてくれないからだ。桜や巨木、夜景、そして海。これが「嘉代子桜」や「被爆クスノキ」、「城山小学校の被爆校舎」、そして「磨文仁の海」として経験されるためには、キャプションを通じた文脈の共有が必要であるだろう。カントの言葉を借りれば、「概念なき直観は盲目である」。

ここで興味深いのは、逆もまた然りであるということ、すなわち「写真」が「キャプション」にとって必要不可欠でもあるということだ。私が今回の写真展を訪れるなかで最も印象に残った写真は「沖縄・平和祈念公園」（2023年3月）と題された一枚であった。吉成氏によるキャプションにおいて説明されているように、沖縄島を中心にした地図を撮ったこの写真は、沖縄島と日本本土、朝鮮半島や台湾、中国大陸、そして南方諸島との「距離の近さ」を示すものである。しかしこうした文章の意味は、当の地図の写真そのものをみなければ、理解することが、より正確には感じることはできないだろう。巨大な中国大陸に相対する沖縄島を中心に据えるこの地図において、台湾や南方諸島、そして日本本土は、ひとしく沖縄島を囲う同じ「島々」である。このことは、端的な事実であるが、しかしそうであるがゆえにこそ、文章にしたとき、すなわち概念によって把握されたときには、その印象がいわゆる「日本地図」との差異において持っていた衝撃を失わせてしまう。おそらくは、写真を通じ、出来事が感性的に与えられることによってこそ、見慣れた「日本地図」というカテゴリとは異なる仕方で、世界を把握することが可能になるのだろう。私は、カントが「直観なき概念は空虚である」とも述べていたことを思い起こす。

カントと一緒に写真展に行く。写真展における「キャプション」と「写真」とは、互いに交叉している。アジア・太平洋戦争以来の戦後の歴史や具体的なフィールドの生活の文脈がキャプションによって補足されることなしには、写真はそれが映すものを私に映さない。しかしながら、写真なしには、それらの記述は空虚であり、生き生きとした意味を持たない文字は、同じく

私に何も映さない。これは「記憶の継承」のひとつの図式とも関わるだろう。すなわち、記録なしには出来事は記憶され得ないが、記憶を欠いた出来事の記録もまた、出来事を継承することはないということ。

しかし、それでもなお「引け目」は残る。あたまでっかちの哲学研究者が、カント哲学の（教科書的な）カテゴリで、フィールドを理解した気になってよいのだろうか？吉成氏のキャプションが記述する生活史的な位相を「感性」へと矮小化することで、取り落としてしまうものはないのだろうか？写真展が持っている独自の磁場がある。写真に写った土地、それぞれ名前を持った人々、キャプションが示す連綿と続く歴史、撮影時の吉成氏の思い、そして出来事。こうした要素は、カントのカテゴリには回収することのできない、何らかの構造体を成しているようにも思われる。

しかし、われわれは「カテゴリ」なしで世界を認識することができない。何かを経験するとき、我々は自分のカテゴリによって「わかって」しまう。だとすれば問題なのは、我々が生きている当のカテゴリを自覚し、その上で「事象そのもの」と感性やカテゴリを擦り合わせることはないだろうか。ある写真が感性的衝撃を通じて「日本地図」のカテゴリを更新するように、あるキャプションが「歴史的文脈」を更新するように。そして、この「感性」や「カテゴリ」というカントのモデルが擦り切れるに至るまで。

哲学とは、まさにこうした作業である。カントが提示した純粋理性の構造（つまり、われわれの頭の働き方）は、まさにコペルニクスの地動説がそうであったように、世界中の人間の世界の見方を変えた。カントだけではない。デリダ、ドゥルーズ、フーコー、フッサール…彼らの思想は、それぞれ別の仕方で、世界を見ることを可能にする。この意味で哲学は感性的なものでもある。それは、空虚な概念体系として理解されるべきではない。哲学はまさに世界そのものを創設し、その中で哲学者は生きるのだ。

カントと、哲学者たちと一緒に写真展に行く。もちろんそれは生きることだ。「そこにーそれがーあった」のか、それとも、なんらかの媒介が我々の記憶を作るのだろうか（ロラン・バルト、スティグレール）。キャプションは写真を「説明 **explication**」するのか、あるいはむしろ、写真によってキャ

プシヨンの「含意 implication」が構成されるのか（デリダ）。写真が持つ感性の形式とは、カテゴリとは何か（カント）。そして、いかにして記憶を継承するか。記憶を継承するとは何か。私が写真を前にして抱く疑問に、哲学者たちは答えない。しかし彼らの哲学は、問いかけに応じて世界を創設する。彼らと共に、私はそれを生きる。

付記：本論は科研費 25KJ1726 の支援を受けた。

写真の力

井上 恵子*

はじめにこの写真展に興味をもった理由からご説明します。私は大阪市内のギャラリー¹で勤務しています。吉成さんの写真作品との出会いは2015年3月、所属する大学の学外写真展です。自然風景、街中スナップ、海外の牧歌的な風景に加えて、心象風景に近い写真を展示しておられました。鑑賞者の心に何かをのこしてくれるような作品で、大変印象深かったと記憶しています。学生最後の展示では写真に加え、文章も添えられており、撮影者の優しさと広い視野をもった鋭いまなざしを感じるものでした。吉成さんの切り取る写真には、写真そのものの魅力と、決して押し付けない撮影者の想いがあったように思います。およそ10年を経て写真展の案内を頂いたときは、是非とも直接見て、感じたいと思っていました。写真から繋がったご縁でしたが、これまでに「記憶の継承ラボ」のシンポジウムを拝聴させて頂いており、その中で長崎市にある城山小学校平和祈念館を知ることになりました。私は学生生活を長崎市で過ごしていましたが、その存在を知りませんでした。あとで調べてみると在学期間には一般公開されていなかったようですが、必ずいつか訪れたいと思うようになっていました。

今から3年前に長崎に行く機会が訪れ、当時、頻繁に利用していた路面電車に乗りこみました。懐かしい景色を楽しみつつも、城山小学校平和祈念館

* イロリムラ ギャラリー

¹ 「イロリムラ」HP：<http://irori2005.com/>

につづく急な階段を少し緊張して昇ったのを覚えています。今回の写真展で一番心に残った写真は、城山小学校平和祈念館の山口政則さんが机に向かう後ろ姿です。それは来館した際、展示品の説明や嘉代子桜のお話を丁寧に説明してくださったことを思い出させてくれます。その日は他にも若い方が数人来館していて、同じように対応しておられました。山口政則さんはここで、たくさんの時間を使って、たくさんの方に記憶の継承をされておられました。写真は後ろ姿ですが、むしろその背中から平和を祈る日々の活動が伝わってきて、その時のお姿が思い起こされました。今回の写真展は吉成さんの視点で切り取られた写真とそのとき感じられた文章が添えられていてとてもわかりやすかったです。実際訪れたことのある写真では、より一層深く共感できましたし、初めてみる風景も綴られている文脈から、その土地が抱えている現実と、そこに住む人たちの思いが伝わってきます。写真と文章を組み合わせることで、どちらか一方だけでは伝わりにくいことも表現されていて、長崎以外の土地も機会があれば、実際に訪れたいと思わせてくれる写真展でした。毎日を過ごす中で、多くの情報に流されて忘れてしまいそうな大事な事を、研究者の方々が丁寧にすくいあげて、カタチにして届けて頂いていることに感謝致します。

コラム

その他参加者の声

シンポジウムで数々の写真を拝見し、ゆっくりと見る機会があればなぁと思っていたので、とてもありがたく鑑賞させて頂きました。山口さんのうしろ姿に、今までのご苦勞、そして優しいお人柄を感じました。一枚一枚の写真も素晴らしいのですが、下に書かれているコメントにも心を打たれます。シンポジウムでお聞きし、心に刻まれた言葉「形に残らないものは、記憶に残らない」、この写真展は、戦争で被害にあった方々の声なき声を写真を通して記憶に残るものだと思います。この活動が皆さんに広まりますように！

(学内のある職員より)

「記憶の継承ラボ」写真展を拝見し、「戦後 80 年」という言葉が、歴史的な区切り以上の意味をもって迫ってくるのを感じました。長崎、沖縄、水俣、福島—それぞれの土地に根差した生活者のまなざしを通じて、戦争の「その後」がどのように生き継がれ、語り継がれ、あるいは沈黙のうちに忘却されそうになっているのかが、静かな写真の中に刻まれていたように思います。

(学内のある院生より)

本日の写真展を通じて、去年の長崎の旅についてたくさん思い出しました。長崎だけではなく、まだ語られずにいる沖縄や水俣、今年行った福島の被ばく・被害の側面も印象深かったです。来月のフィールドワークでも、長崎の日常に潜んでいる過去の記憶を新たに感じる事が出来れば幸いです。

(学内のある院生より)

「記憶」をめぐる問いに正面から向き合う誠実なまなざしに深く心を動かされました。単に過去を記録・再現するのではなく、今を生きる人々の思想的営為—語る、祈ること、暮らすことのなかに記憶のありかを探っていく構成がとても印象的でした。

(学内のある院生より)

長崎から沖縄、水俣、さらに福島まで、戦争と災害を生き抜いた人々の生活していた光景、その一隅は、今回の写真を通して、現在の人々の生活の一部という姿として現れてきたのではないかと思います。事件、人々の生活、更により古い歴史の中に残された痕跡は、選択的に残されたのであれ、そうではないのであれ、重なり合いつつ、体験がもたらされたあとの地域の過去を伝えながら、現在の地域に生きる人々の想いを形づくっていると思えました。

(学内のある院生より)

大阪の吹田という地で、2025年の現在において、つながっているにもかかわらず、忘れてしまっているような、沖縄、長崎、福島、水俣の1945年、1960年代、2011年、2020年の出来事に写真と共に思いをはせた。／写真を撮ったときの思いや、現地の人言葉、その土地の歴史について実際に撮られた写真を見ながら、お話を聞いたのは、大変貴重でした。

(学内のある院生より)

水俣病の写真に可愛い猫が映っているが、その子たちも何もわからず、経済重視の犠牲になったという想像までリアルに感じられました。

(ある社会人の方より)

監修者の言葉

多層的な「歴史の厚み」への回路——矛盾や葛藤を抱え傷ついた人々の暮らしに寄り添い共に生きるということ

三好 恵真子*

本書は、『「記憶の継承ラボ」写真展：「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在』の開催記録として総括したブックレット（OUFC（Osaka University Forum on China）Bookletとして刊行）であるが、この写真展が開催された2025年は、「アジア・太平洋戦争」の終結から80年の節目にあたるとともに、奇しくも「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマにした大阪・関西万博（国際博覧会）の会期に遭遇していた。この万博では、「未来社会の実験場」をコンセプトに、DX（デジタルトランスフォーメーション）を駆使した未来社会の構想と同時に国連が2030年を達成目標として掲げているSDGs実現への貢献が目論まれていた。翻って、いまだ続いているウクライナ侵攻や激しい戦闘が繰り返されるパレスチナ情勢の緊迫感が増しゆく中で、市井の人々が無残にも戦いの犠牲となる痛ましい様相を目の当たりにする時期とも折り重なっていた。

このように2025年は、「調和と暴力」、「生と死」、「創造と破壊」、「光と影」というように、「いのち」に関する激しいコントラストを複層的に想起する年でもあったことを改めて認識しておく必要がある。加えて、私自身、この

* 大阪大学人間科学研究科・教授

頃から強く感じていた、ある種の違和感を伴う「雰囲気」、つまり言語化しにくい主観的な感覚をも内包するものの、この冒頭にてあえて二つの側面から書き記しておきたい。

一つに、子供の頃の私的な経験に引き寄せて記憶が蘇ることになるのだが、この「雰囲気」は、今からさかのぼることおよそ半世紀前の1970年頃の自身の身体感覚をまるで呼び起こすかのように感じていた。その当時、世界は東西冷戦下にあり、アメリカとソ連が直接的に交戦することはなかったものの、60年代後半のアメリカによるベトナムへの北爆の開始により、いわゆる「代理戦争」の一つとされるベトナム戦争が、より一層激化の様相を見せていた。こうした渦中において、70年には「人類の進歩と調和」をテーマとしたアジアで初めての大阪万博が開催され、日本の高度経済成長を象徴する盛大な祭典となり、名実ともに戦後日本の経済大国化へと突き進む時代として歴史に刻まれていくことになる。この大阪万博は、およそ6,400万人もの人が訪れる一大イベントとなり、周りの友人の誰もがこぞって出かけていたが、私の場合はその参加の機会が持てず、幼心にどこか後ろめたさを感じていた。万博に行けなかったのは、我が家にとって経済的にゆとりがなかったことも一理あるかもしれないが、その背後にある大きな理由として、同じアジアでベトナム戦争が起こっており、日々傷ついた人々に直面する中で、華やかなイベント参加は自粛したいという両親の考えによるものが大きかったのではないかと、今さらながらその意味する重みを振り返ることもある。

その後、ベトナム戦争は終結したが、戦禍にて枯れ葉剤が激しく散布された地域で生まれた結合双生児の「ベトちゃんドクちゃん」が、ベトちゃんの急性脳症に伴い1986年に来日し、命の危機を脱したという一連の出来事が日本のメディアでも大きく報道された。ベトナム赤十字社が日本赤十字社に緊急援助を要請したことにより精密な医療措置を施すことが実現した¹ので

¹日本赤十字社は、当初、支援に慎重だったという。枯れ葉剤と結合双生児の因果関係は公式に証明されていないために、政治的にデリケートな問題をはらむ中での支援は、日赤の中立性を損なう恐れがあったからとする。次の文献より引用。「ベトちゃん・ドクちゃん「一緒に」生まれ大手術で分離、「兄の分も生きる」

あるが、戦争の「爪痕」を強く感じさせる2人の存在により、日本で世論が形成され、寄付金やおもちゃ・お菓子が続々と日本赤十字社に集まっていた。私自身も、戦争が終わったにもかかわらず、引き続きベトナムの人々の日常に影を落としていることを理解するとともに、緊迫を脱したテレビ越しに映るベトちゃんとドクちゃんの笑顔に心が癒やされつつ、子供心ながらも祈りが安堵に変わっていった²。加えて、1980年にベトナム出身のダン・タイ・ソン氏がショパン国際ピアノコンクールにて数々の特別賞とともにアジア人としてはじめて優勝を果たした際、同氏はベトナム戦時中では本物のピアノが使えなかったゆえに、紙に描いた鍵盤で練習していたという逸話も併せて伝えられた。当時中学生だった私は、戦争の痛ましさとともに、同氏がその戦禍を生き延びながらも類い希な才能を開花されたことに対し、深い敬意の念とともに言葉では表現することのできない感動を覚えたものである。

なお、彼らのその後の人生を辿ってみると、「ベトちゃんドクちゃん」の弟の方であるグエン・ドク氏は、2011年に東日本大地震に見舞われた際、自らの命を救ってくれた日本への恩返しとして、自身が集めた義援金を携えながら同年4月に来日されたこと³は広く知られるところである。また2017年4月より広島国際大学の客員教授に就任し、アジアの交流を深めながら、平和や命の尊さについて講演を続けている⁴。こうして国内外で平和活動に勤しむドク氏は、元々自分の経験を語ることは好んでいなかったようである。しかし兄であるグエン・ドク氏が2007年に26歳で人生を終えたことを切っ掛けに、その考えが変わったと振り返っていた⁵。「自分はベトを犠牲にここ

...1988年10月「あれから」＜37＞『読売新聞』（2023年7月10日）。

² しかし、その後、兄ベトちゃんの「急性脳症」のために二人とも寝たきりになってしまったために、1988年10月に南ベトナムホーチミンの病院で、世界中からの注目を集める緊迫感の中で分離手術が施された。

³ 「ドクさん、義援金携え来日 ベトナムから「恩返しを」」『朝日新聞』（2011年4月14日）。

⁴ 「グエン・ドクさん客員教授に就任～介護・福祉分野でアジア諸国と相互理解深めるセンターの開所も～」『広島国際大学ウェブサイト・ニーストピックス』（2017年4月1日）。

⁵ 「ベトちゃん・ドクちゃん「一緒に」生まれ大手術で分離、「兄の分も生きる」

まで来た。これからはベトの分も生きよう。」と決意し、「自分が語ることに意味がある。」として、自ら設立した非営利組織で講演活動を行いつつ、枯れ葉剤の被害者らへの寄付を続けているという。一方、ダン・タイ・ソン氏は、その後、師匠としてもその卓越した能力を発揮し、その弟子として、2021年第18回ショパン国際ピアノ・コンクールでブルース・リウ氏が、また2025年第19回ショパン国際ピアノ・コンクールでエリック・ルー氏が、それぞれ優勝を果たしている。ブルース・リウ氏は、自身の受賞に際し、「ショパン演奏のスタイルにおいては、師と私は全く正反対のスタイルだが、彼は自らの考えを弟子に押し付けることなく、それぞれの個性を伸ばすことに大変優れている。特に、音楽はその人のライフスタイルそのものや、日々の想いを映し出す鏡だということを深く認識させてくれた。」と師の恩恵を振りかえっていた⁶。これらのエピソードが物語るように、生身の人間にとっての「生きられた経験」があり、それらがどのような形でそれぞれの身心に記憶として宿り、受け止められていくのかについて改めて思いを馳せることにも繋がった。

以上、私の記憶として再び思い起こされた半世紀前の1970年前後の日本は、平和主義、民主主義、基本的人権等の戦後的価値により支えられつつ敗戦からの急速な復興と高度成長の繁栄が頂点に達する時期であり、その一方で、学生運動、公害問題、日米安保改定等により社会が激しく揺れ動く時代でもあった。別の言い方をするならば、「アジア・太平洋戦争」の終結後、アメリカが日本を冷戦下の西側陣営に組み込むために、対日賠償請求権の放棄に象徴される「寛大な講和」を推し進めることで、戦後日本社会は、アジア諸国からの要求を直視することなく経済復興へ専念することができたのである⁷。加えて、こうした戦後におけるアメリカの東アジア政策の展開は、戦前までの日本帝国主義の東アジアへの侵攻の展開を引き継ぐ形で実行され

...1988年10月「あれから」＜37＞『読売新聞』（2023年7月10日）。

⁶ 「第18回ショパン国際ピアノ・コンクール優勝者、ブルース・リウの素顔に迫る～記者会見レポート」『SPICE』（2021年11月16日）。

⁷ 吉田裕 2005『日本人の戦争観—戦後史の中の変容』岩波書店。

の中で、大衆文化の次元では、豊かな「アメリカ」に人々が魅了されることにより、アジアとの関係が忘れ去られていくことになった⁸。

やがて、1989年のベルリンの壁崩壊並びに1991年のソビエト連邦崩壊により、戦後の世界を捉える枠組であった冷戦構造が終焉を迎えるが、国際的な相互依存関係が緊密化する一方で、直接的な全面戦争を避けつつも世界的な分断と緊張が続いており、依然として「継続する冷戦状況」に規定され続けていることが示唆されている⁹。従って、こうした経済的繁栄の物語としての既存の戦後史からは見過ごされがちであった、日々を生き抜く人びとの暮らしの中で直面してきた現実を、「戦後日本」だけに留まらず、近現代の東アジアが経験してきた歴史の文脈の中に位置付け直しつつ、今日への連続性を問い直す必要性が自ずと浮かび上がってくるのである。

にもかかわらず、戦後80年の節目となる2025年において、むしろ閉塞的で縮減する領域へと向かっていくような、ある種の違和感を伴うもう一つの「雰囲気」が（私にとっては半世紀前の「雰囲気」と対比させ、折り重なりつつ）、想起してきたのである。身の回りの留学生たちの何気ない話に耳を傾けてみると、2025年の春くらいから、彼ら彼女らへ眼差される周りの「雰囲気」が明らかにこれまでと異なることを実感するとのことである。たとえば、通りがかりの日本人の年配の方々からあからさまに嫌な顔をされたり、突然、「日本から出て行って」というような罵声を浴びさせられたこともあったようで、それはアジアから、欧州からを問わず、留学生たちは、多かれ少なかれ共通に体験していることでもあった。しばしばネット上で見かける排外主義的な傾向が、現実社会の、ごく身近な生活の場面においても浸透しつつあることに、ある種の驚きと恐怖を覚えずにはいられなくなった。

社会学者の友枝敏雄氏は、「社会的なるもの」の形態である、マックス・ウェーバー氏の「エートス」、エミール・デュルケーム氏の「集合意識」、エーリヒ・フロム氏の「社会的性格」を詳述しながら、これらを客観的に測定でき

⁸ 吉見俊哉 2007『親米と反米—戦後日本の政治的無意識』岩波書店。

⁹ 石原俊 2022「戦後の終わり」にどう向き合うか」、『学術の動向』27(12)、46-49頁。

るのだろうかという問いに答えるために、高校生を対象とした計量分析を行っている¹⁰。その結果、2001年から2013年までの12年間に、高校生の「保守化・右傾化傾向」が顕著になることを明らかにした。その上で、同氏は、このような高校生の傾向は、「エートス」、「集合意識」、「社会的性格」の変化を示しており、そうであるからこそ、このような趨勢が、社会構造全体の変動を引き起こす可能性もあり、混乱や混沌へと向かう変動になることを危惧しながら、人々を不安や絶望へと至らしめないように私たち研究者は考えていく必要があると論じている。つまり、こうした傾向が、単なる現状肯定の意味での「保守」であって日本の伝統を高く評価する態度に留まった脱政治的色彩を帯びた社会観であるならば問題はないものの、保守意識がナショナリズムと結びつき、右傾化し、政治的色彩を帯びた社会観として登場しているのであれば注意を要すると指摘したのである。そしてこの論考が発表された時点（2016年）において、友枝氏は、将来いかなる社会変動が生起するのかは予測できないものの、高校生における保守化・右傾化の趨勢は、政治的エネルギーが蓄積されていることを示しており、それがいずれ「閾値」を超えた瞬間に、劇的な社会変動が起こるのではないかと示唆していた。驚くことに、昨今のこうした異質な「雰囲気」を伴う社会状況は、まさに保守意識がナショナリズムと結びつき政治的色彩を帯びた社会観として醸成されつつあるという危惧が、多かれ少なかれ露呈している動向と捉えることができるのかもしれない。

以上、2025年頃に社会の中に映し出されてきたこの異質の「雰囲気」は、不本意ながら、戦争体験などの過去の教訓からの「断絶」が人々の生活レベルにまで浸透しつつあることを示唆しているように思われ、偽らざる懸念を覚えずにはいられなくなった。現に1960年代以降の都市大衆文化の成立や新中間層の創出などにより、一義性の世界が徐々に崩壊し、生の選択肢が次

¹⁰ 友枝敏雄 2016「モダニティと社会学—「社会的なるもの」の把握をめざして」、遠藤薫・佐藤嘉倫・今田高俊 編『社会理論の再興—社会システム論と再帰的自己組織性を超えて』ミネルヴァ書房、55-75頁。

第に拡大してきたことが、「戦後世界」の大きな特徴¹¹ではある。さらに 1980 年代以降に「ポストモダン」という言葉が浸透するにつれて、フランスの哲学者ジャン=フランソワ・リオタール氏が提唱した「大きな物語の終焉」¹²は、それ以前の時代（モダン）からの断絶を強調するための用語として解釈されつつ、広汎に知れ渡るようになった。他方で近年注目される DX は、「デジタル技術が、人間の生活のあらゆる側面に引き起こす、あるいは影響を与える変化」¹³として目論まれているために、情報通信技術が社会の隅々にまで浸透していく過程において、私たちの日常的な経験が変容していくことは、もはや当たり前のことなのかもしれない。ただし、ここで留意すべきは、リオタールの言説において、科学が自らの依拠する規則を正当化するために「大きな物語」としての哲学を必要としたのが「モダン」の時代であり、またそれに対する不信感が蔓延し、壮大な成長神話や哲学的・教養主義的物語が影をひそめてきている時代を「ポストモダン」と位置づけている点である。すなわち、この言説では、「大きな物語」という言葉が「科学の正当化」をめぐる批判的議論として用いられていたとするならば、昨今加速化している情報通信技術の推進という時好の趨勢に対しても、それに準拠する照準として、ある種の内省を求めるのが必然ではないだろうか。

確かに、同じ事実であっても、「いま、ここに」が変化すると記憶や言説の意味が変化してしまうことは避けては通れない。そこで着目したのが、政治思想史学者の蔭山宏氏が、日常生活の感性と思想の相関を念頭に置き、歴史的位相の内に位置づけつつ提唱した「等価性の世界」という概念である。

¹¹ 有末賢 2011 「生活史の「個性」と「時代的文脈」」, 『法学研究』 82(2)、25-51 頁。

¹² ジャン フランソワ リオタール (著), 小林 康夫 (翻訳) 1989 『ポスト・モダンの条件: 知・社会・言語ゲーム』 岩波書店。

¹³ Erik Stolterman & Anna Croon Fors 2004 “Information Technology and the Good Life”, In Bonnie Kaplan, Duane P. Truex, David Wastell, A. Trevor Wood-Harper, Janice I. DeGross eds. Information Systems Research: Relevant Theory and Informed Practice”, 687-892, Springer Nature.

蔭山氏は、『ワイマール文化とファシズム』¹⁴において、第一次世界大戦での敗戦と革命の中で成立したドイツ・ワイマール共和国時代に現れた独特の政治・社会思潮である「保守革命論」を軸にワイマール期の政治と文化を論じている。そして、このワイマール共和国体制の下で、既存秩序の崩壊が切実に感じ取られているにも関わらず、それに代わりうる秩序理念を持ち得ないゆえの「不安定で動的な心的境地」が、「保守革命論」の社会的根拠を担っているとする。またそうした精神的状況の中では、従来は異質の精神的秩序に属して決して等価ではなかった諸事象が、それ固有の質を主張し得なくなっているとし、この精神世界を「等価性の世界」の出現として捉えたのである。ただし、「等価性の世界」は、両義的意味を孕んでおり、政治的には無原則的な態度の基盤になりやすい一方で、客観的な正当性の根拠を見失っている結果、何かに向けての決断であるよりも、決断すること自体が重視される「決断主義」が生まれ易くなると指摘している。換言すれば、「等価性の世界」が出現することによって、「決断主義」が急進的にプラスの価値として機能する可能性が生まれ、そうした新しい文化状況においては、決断することそれ自体が重視される動態的な心的境位が、現実打破の保守革命の思想を次第に育成することにも繋がり、ひいてはこうした思想と行動がプレ・ナチズムの思潮となり得たことを示唆している。つまり蔭山氏による「保守革命」の意味するところは、現状から脱却するという「動態性」の心的状態にある場合、人々が眼前の「社会的に支える力」の体系から脱却しようとするのと同時に、新たに「支える力」を求める意識も作動しており、こうした異質な動機の交錯する心的状態にあっては、ともすれば、急進主義的意識の基盤でありながら、同時にまた権威主義的な意識の基盤にもなり得るとの見解¹⁵を示す。総じて、こうした蔭山氏の分析は、思想史研究の前提とも言うべき「社会的経験」の層位にも光を当てることによって、「意図せざる」特徴があることを発見し、それは「革命的」でありながら「保守的」でもある社

¹⁴ 蔭山宏 1986『ワイマール文化とファシズム』みすず書房。

¹⁵ 1987「蔭山宏君学位請求論文審査報告」『法学研究』60(10)、147-152 頁。

会思潮が成立していく社会基盤の存在としても描くことに成功している¹⁶と評されている。

このように、蔭山氏の論考における「等価性の世界」が意味する精神世界、すなわち「現状から脱却するという『動態性』の心的状態」（人々が眼前の「社会的に支える力」の体系から脱却しようとするのと同時に、新たに「支える力」を求めるという、異質な動機の交錯する心的状態）は、まさに、このブックレットで照準する、現在まで至る「戦後社会の特徴」の中に照らし合わせながら議論することができるのではないだろうか。よって、これまで論じた内実を踏まえつつ、以下では、時代的文脈に即しながら、まず冷戦体制終焉前後より謳われはじめた「ポストモダン」、続いて 2000 年前後から一般社会に浸透し加速化している「情報通信技術の趨勢」という、二つの側面からこの論点を深めてみたい。

社会学者の有末賢氏は、自身の社会学的な生活史研究と上述の蔭山氏の社会史・思想史的な政治文化研究との学問的距離に自覚的である上で、両者の研究の間に通底する「個性と時代性」というテーマに焦点を絞りつつ、更なる議論を拓いている¹⁷。「等価性の世界」は、1920 年代のワイマール文化当たりから相対化されており、1960 年代以降の都市大衆文化の成立や新中間層の創出など戦後世界の拡大は、近代的世界の重要な精神となってきた「等価性の世界」の普及によるものでもあったと指摘している。加えて、「大きな物語」の終焉という時代状況を「ポスト・モダン」と呼ぶならば、グローバル化と個人化という二つの趨勢による再帰的近代¹⁸と一致するため、自己

¹⁶ 1987「蔭山宏君学位請求論文審査報告」『法学研究』60(10)、147-152 頁。

¹⁷ 有末賢 2011「生活史の「個性」と「時代的文脈」」,『法学研究』82(2)、25-51 頁。

¹⁸ ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックは、近代化を二つの転移位相として捉えており、とりわけ冷戦崩壊後のリスク社会への突入を「ポスト近代」として特徴づけた。すなわち、近代初期では、前近代に比べ個人の自由は大幅に伸張し、国民国家は福祉国家をめざす努力をしていたが、こうした単線的な近代化に対して、再帰的近代への突入を示す新たなリスク社会では、マクロレベルでのグローバル化の拡大とミクロレベルでの個人化が進行する中で、私たちの抱える課題はより複雑になったと指摘している。次の文献参照。Beck, Ulrich 1986

の再帰性や自己決定権がその鍵概念となりつつ、自己の個性や身の回りの日常生活にこだわりながら、自分物語を紡いでいくことに終始することを意味するとする。それゆえに、事實は複数の社会的構築を経つつ、時代状況にも大きく影響されてしまい、まして戦後数十年と時間が過ぎ去ると、戦争体験の記憶も遠くに隔たってしまうことはもはや避けられない¹⁹としながらも、有末氏は、個性ある人間像が要求されている 21 世紀の現代社会において、「個性」と「時代状況」を結び付ける媒介となり得るのが、「生活史」であると、その重要性を宣誓している²⁰。すなわち、生活史研究は、オーラルヒストリーやライフ・ストーリーの様々な意義と多様性を含みつつ、歴史的にも社会学的にも人類学的にも、あるいは生活学や生活科学においても十分に持続的な学問運動としての、「モダン」と「ポストモダン」を貫く一貫した分析視角を保っており、それゆえに現代においてこそ、「生活史宣言」が必要になると強調するのである。こうした点も踏まえつつ、このブックレットで焦点を当てている戦中・戦後の「記憶の継承」も、過去を生きる人々が暮らしの中で感じてきた矛盾や葛藤を、過去に起きた「歴史の事実」として受け止めるのみならず、そうした一人ひとりの生活の歴史の先に、今を生きる私たちの社会や暮らしがあるのだという「連続性」を改めて理解していくことの重要性に繋がっていく。

さらに今日の社会状況に接近しつつ、もう一つの側面である「情報通信技術の趨勢」から議論を重ねてみたい。近年、日常生活のレベルにおいても ICT の発達、SNS の浸透、さらには生成 AI の一般的利用により、利便性のみならず、社会や生活の質そのものを豊かにすることが期待されている。その一方で、例えば行動に至るまでの文脈は、通常、自身の経験を介しつつ、認知→知識→動機→行動意図→行動というプロセスを辿る²¹と言われるが、とり

“Risikogesellschaft”, Suhrkamp.

¹⁹ 有末賢 2011「生活史の「個性」と「時代的文脈」」,『法学研究』82(2)、25-51 頁。

²⁰ 有末賢 2012『生活史宣言—ライフヒストリーの社会学』慶應義塾大学出版会。

²¹ 三阪和弘 2003「環境教育における心理プロセスモデルの検討」,『環境教育』13(1)、3-14 頁。

わけ生成 AI の普及により、外部から情報を得るとすぐに行動に結び付ける急進的な回路が形成されやすくなるという課題が新たに生じてきているのではないだろうか。言うまでもなく、生成 AI から得られる結論は同じだとしても、人間の思考とは異なるプロセスを辿っており、生成 AI の場合、膨大な量のデータから単語の繋がり方のパターンを見出し、統計的な観点から最もらしい文をアウトプットしている。かたや、言葉に表しにくくとも、じっくり考えて言いたいことが言語化できたとき、人は開放感と喜びを感じるが、こうした感覚は、生成 AI から結論を得たとしても経験することはまずないであろう。つまり、生成 AI が人間に近づいてきたのではなく、人間の方が生成 AI に近づこうとしており、それは言語を巡る「体験」の核心部分にある宝物を自ら放棄するのに等しいのではないかという示唆²²は、意表を突いているように思われる。さらに、こうした特徴を上述の「等価性の世界」に照らし合わせてみるならば、政治的には無原則的な態度の基盤になりやすい一方で、「決断主義」が急進的にプラスの価値として機能する可能性が生まれ易くなるという実態と、類似する状況と言えるのではないだろうか。そうであるならば、上述したように、次第に現実打破の保守革命の思想を生み出すことに傾倒していくことはもはや避けられず、既に紹介した友枝氏による高校生の「保守化・右傾化傾向」で議論した内実と重なる部分も少なくない。従って、この趨勢をより良い未来に向かって乗り越えていくためにも、ここでより一層、議論を深める必要があると考えられる。

そこで、とりわけコロナ化で顕在化した、個人情報を利用した感染対策の徹底化とプライバシー保護との相克という問題について、開発経済学・中国経済学を専門とする梶谷懐氏による先見的論考^{23,24}を参照していきたい。梶谷氏は、スマートシティの建設が世界各地で本格化する中で、その背景にあ

²² 大澤真幸、松尾豊、今井むつみ、秋田喜美 2024『生成 AI 時代の言語論』左右社。

²³ 梶谷懐 2020「コロナウィルス感染症 COVID-19 と監視社会」、『サービソロジー』7(1)、15-21 頁。

²⁴ 梶谷懐 2021「コロナ禍への監視国家中国と国民の対応：功利主義を超えて（特集 1 変化する中国社会）」、『研究中国』12、21-28 頁。

る「個人情報収集と解析を通じた便利さの追求」と、「個人のプライバシー保護」との相克が、各国の新型コロナウイルスへの対応にも影を落としているとして、功利主義²⁵と監視社会という切り口から、明快に論じている。ここでは、社会の統治者のみが功利主義に基づいた様々な評価者となることにより望ましい社会の条件であるとするのが「統治功利主義」の立場であるとしている。とりわけ、行政府によってある政策を実行する際に「ナッジ」が用いられる場合は、それに「従う」人々が政策の「意味」や「理由」を理解することは求められてはおらず、むしろ「なぜそうなのか」という背景を理解しないままに「動機付けられ、それに従う」ことこそが人々に求められ、より多くの幸福を得ることができるという統治の在り方が社会によって至高であることを意味する。例えば、監視カメラなどいわゆる監視テクノロジーの偏在化によって社会の治安が改善されるという現象も同じであるとし、人々は、監視社会化についてそれが望ましいかどうかを判断しなくても、あるいはそれに反対したとしても問題にはならず、実際に監視テクノロジーの利用によって、犯罪が劇的に減少するなど「望ましい結果」が得られるのであれば、政府によるその導入は、「統治功利主義的」に支持されるとしている。

こうした傾向に鑑み、梶谷氏は、情報技術の発達とともに監視社会化が進むのは、政府が功利主義的な原則を採用し、市民がそれを受け入れるならば、避けられない現象であると捉える。しかし、そうであるからこそ、アメリカ社会の民主主義の背景となった「プラグマティズム」の思想が重要な意味を帯びてくることを示唆している。思想的には、「プラグマティズム」も功利主義と同様に帰結主義の立場に立つものの、功利主義が、結果として「社会全体の幸福の最大化」という明確な目標を設定し、その実現を目指すのに対し、「プラグマティズム」は、「社会にとって何が目指すべき目標であるのか、

²⁵ 功利主義は、「幸福主義（倫理的判断の基準として、人々の幸福や満足度が増えたかどうかを第一に考える）」、「帰結主義（結果として幸福が増大したかどうかを重視し、そのための手段は問わない）」並びに「総和主義（「最大多数の最大幸福」を重視するという考え方）」という3つの構成要素からなる。

その明確な答えがない」というところから出発し、「経験」に学び、そこからのフィードバックを得ることを一つの指針に位置づけている。すなわち、「プラグマティズム」の根底には、過去の体験や経験を重視して、そこからポジティブなものを作りだしていこうとする思想があるとする。それゆえに、梶谷氏は、アルゴリズムにより「最適な行動」が決定され、人々がそれに従うようになる監視社会では、試行錯誤の末の「経験」を積むことが困難となり、より長期的な視野に立った場合には、社会にある種の「弱さ」をもたらすのではないかと警戒したのである。従って、世界中で監視社会化に傾倒しつつある昨今、私たちにとって、かけがえのない「経験」を見つめ直し、それを守り抜いていくこと、過去を顧みながらそれを考えていく姿勢こそが、何よりも大切になるのではないかという重要な問いかけがなされている。

他方で、梶谷氏は、日本では元々政府が個人情報収集して紐付けることへの抵抗感が強く、コロナ禍の日本において監視社会化があまり進まなかった考察として、古い共同体的なものが残っていること、また個人情報を管理するシステムの導入の遅れ等も考えられるが、より根源的な背景として、日本では国家に情報を渡すのが恐い、という感覚が共有されている側面が大きいとする。その上で、戦後民主主義を代表とする藤田省三氏の思想に着目しながら、そうした源泉にはなにゆえに「戦争・敗戦の経験」と指摘している。すなわち藤田氏の思想には、昭和期の戦争の経験を通じて、社会の激動に揉まれながらも、希望を失わず、新しい社会を作り出そうとした普通の人々の「経験」への深い関与が見られるとし、そこにはアメリカの「プラグマティズム」と極めて近い発想があると強調している。さらに、晩年の藤田氏が、「安楽」を求める一方で、「不快」の源を除去し、見ないように努める高度消費社会のあり方を、「安楽」への全体主義として痛烈に批判する言動活動を行っていた点を踏まえながら、梶谷氏は、「安心」と引き換えに「監視」を受け入れがちな私たちが、コロナ後の世界でいかに自由とその精神を失わずに生きていくかを考える上で、藤田氏の一連の思想の中に、重要な糸口が含まれていることを示唆している。さらには、今を生きる私たちが、もはや戦争体験に頼ることができなくなりつつある時代に差し掛かっている

ならば、監視社会化を乗り越えるためにも、守るべき「価値」や「経験」について考える上で、自身の社会における過去の経験を振り返るとともに、自らも当事者として大きな影響を与えてきた近隣アジアの人々の「経験」に向き合うことが必要になるという、重要な帰結を導き出している。

以上、冒頭で私自身の経験に照らしつつ、50 年前と現在の二つの「雰囲気」を手がかりとして、日常生活の感性と思想の相関を歴史的位相の内に位置づけた「等価性の世界」という概念を基盤に多面的に議論を重ねてきた。それらを踏まえつつ、改めて、本書の焦点に立ち返るならば、戦争体験などの過去の教訓からの「断絶」を生み出さないためにも、情報通信技術の趨勢の渦中にある現代を生きる私たちが、自らの社会における過去の「経験」を歴史的事実と捉えるのみならず、そこから引き継がれる守るべき価値を「我が事」として受け止めていくことこそが、重要な鍵を握ると思われる。アジア・太平洋戦争を巡る体験と記憶は、戦争体験者の証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」へ向かう今日において、未来世代への継承が切実なる課題であり、歴史学や社会学の領域を中心とした議論や AI やデジタルを活用する新しい試み等について、既報でも詳述してきた^{26, 27, 28}。戦後 80 年が過ぎ、戦争体験の記憶との隔たりが増すことは避けられない中で、戦争を直接経験していない私たちが、体験者の経験や記憶を伝え継いでいくために、これまで参照してきたのが、歴史学者のテッサ・モーリス＝スズキ氏が提唱し

²⁶ 三好恵真子・吉成哲平 編 2024『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（「21 世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ②）』OUFC Booklet Vol.18:

<https://hdl.handle.net/11094/94661>

²⁷ 三好恵真子・吉成哲平 編 2025『ポスト体験時代の記憶の継承：アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ（「21 世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ③）』OUFC Booklet Vol.19:

<https://hdl.handle.net/11094/100627>

²⁸ 三好恵真子, 許衛東, 吉成哲平, 王石諾 2026「ポスト体験時代の記憶の継承—アジア地域史の視座からの共振する戦争・戦後体験—」『2025 年度 アジア歴史研究論文集』233-276 頁: https://www.jfe-21st-cf.or.jp/furtherance/pdf_hokoku/2025/a11.pdf

た「歴史への真摯さ」と「連累」という概念である²⁹。「歴史への真摯さ」とは、「歴史のさまざまな声に耳を傾けること」により過去についての自分の理解を形づくり、つくり直す「内省のプロセス」であり、またそうした営みが、直接的には経験していない過去の出来事に対し、いかに応答しうるかを現在の私たちに問いかけているという「連累」の重要性へと繋がっていくとする。従って、「社会的・空間的位置を異にする他者の見解に関わることで、過去についての自分の理解をかたちづくり、またつくりなおす、という継続的な対話」とされる「歴史への真摯さ」は、上述の議論と重ね合わせることで、その重要性がより一層、輪郭を帯びてくることは間違いないであろう。

この度の写真展は、「刊行に寄せて」にも記されているように、2023年6月に大阪大学人間科学研究科附属未来共創センターIMPACT オープンプロジェクトとして立ち上げた「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」³⁰の活動の一貫として開催された。「記憶の継承ラボ」は、次世代を担う学生・若手研究者を主体としながら戦争・戦後体験の意味を問い、未来への展望を描いていくための実践基盤であるが、その根底には、2007年に有志の教員により設立された「大阪大学中国文化フォーラム」³¹の精神³²が受け継がれており、私自身はその黎明期から関わり、現在は代表を任されている。

周知のように、冷戦体制崩壊後の国際関係と秩序が劇的に再編される中で、中国の役割が増大しており、こうした21世紀における「大国」としての中国台頭の直接的契機は、歴史的に見ても、1980年前後における新中国の猛然たる体制転換の中に存在している。それと同時に、伝統的中国文明を基盤

²⁹ テッサ・モーリス-スズキ 2014『過去は死なない—メディア・記憶・歴史』岩波書店。

³⁰ 「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」HP：<https://relay-memories.hus.osaka-u.ac.jp/>

³¹ 大阪大学中国文化フォーラム HP：<http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/>

³² 詳細は以下を参照されたい。田中仁・三好恵真子 編 2012『共進化する現代中国研究—地域研究の新たなプラットフォーム』大阪大学出版会。

とした東アジア諸国家の文化空間の新たな広がりの変容に鑑みれば、中国自身が絶えず制度刷新と文化創造のためのダイナミズムの供給を受けてきたことを示唆する。さらに、国際的環境の変化もまた中国のグローバル大国化を促しており、その際、とりわけ重要になるのが 1970 年代以降に顕著となってくるグローバリゼーションの進展である。すなわちそれは、中国自体に「改革・開放」路線の選択を迫るのみならず、周辺に位置する地域・エスニック集団と中国との間の様々な相互浸透の方式に大きな影響を及ぼすことになり、中国や東アジア地域を「国民国家」という枠組みのみでとらえることを益々困難なものにしている。従って、「大阪大学中国文化フォーラム」は、こうした時代変化に対する基本認識に立ち、中国の変容を中心・周辺（core-periphery）関係の再編過程とみなし、「中国」を中華人民共和国と等値せず、「多元的多民族社会と華人社会」という空間的広がりおよび「近現代の軌跡と前近代からの逆照射」という歴史的射程からその特質を捉えつつ、「20 世紀東アジア」と「21 世紀東アジア」との「連続性」の中からそれらの関係性や変動への討究を領域横断的に試みてきた。

他方で、こうしたグローバル大国化する中国の出現が、東アジアの国際環境における構造的な変化をもたらすことは避けられず、21 世紀のこれからの東アジア地域が、対立や紛争に満ちた時代を迎えるのか、あるいは経済的に繁栄し安定した時代を迎えるのかについて、論者の間での見解を一致させることは難しい。とりわけ昨今の日中関係において、容易に政治化し、緊張関係を増幅していく状況は避けては通れない。加えて、21 世紀の東アジアは、東西冷戦期のアメリカを連結点とした「点と線」よりなる「二国間関係が軸となる国際秩序を特徴とした地域」から、「面」状の大きな地域的広がりを持ち、ASEAN を中心とする「多国間の重層的枠組みを有する地域」へと変貌を遂げたことも念頭に置く必要がある。それゆえに、グローバル大国化する中国および東アジア地域秩序に関わる諸課題は、従来の国家間関係のもとではもはや解決しえないことを認識しつつ、「大阪大学中国文化フォーラム」では、東アジアの国際公共財形成への基盤として、「人間の安全保障」にひとつの方向性を見いだそうと考えたのである。よって新たな視角として、

ナショナリズムや宗教及び環境問題等の緊急性を要するグローバル・ 이슈の観点から、中国および中国を巡る東アジアの国際関係と歴史構造の検討を行い、「交錯・対抗」の関係を乗り越え、「共存・共生・共創」の関係への展望に立って、中国台頭に伴う 21 世紀の東アジアの国際環境変動のダイナミズムに対処すべき処方学際的・包括的に提示することが目指されている。そうした意義を体現する実践的営為として、「大阪大学中国文化フォーラム」では、本フォーラムと中国南開大学歴史学院、台湾国立東華大学歴史学系、韓国ソウル大学校歴史教育科の各大学組織を中心とし、日本・中国大陸・台湾・韓国における国境を越えた学術交流である国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」（会議言語中国語）を十数年間にわたり主宰しており、同時に海峡兩岸を結ぶ若手研究者の育成にも心血を注いできた。

このように、「研究と教育の有機的連携」の活性化を基盤に据えつつ、時代の要請に応えながら、地域研究のあるべき姿を積極的に提示してきた「大阪大学中国文化フォーラム」であるが、その理念や精神が受け継がれた「記憶の継承ラボ」は、若手研究者・次世代という「未来」への可能性に期待すると同時に、いわゆる専門アカデミズムの閉鎖性に埋没することなく、人間そのものの普遍的問題を見極めてゆく新たな役割にも希望が込められた。これまで、長崎、沖縄、福島、水俣等の戦争・災禍の現場を訪れる中で、「記憶の継承」を巡り各地域が抱える複雑な現実があり、またそれらが「戦後」の社会変動の過程で構造的に形成されてきたという看過できない側面も見えてきた。加えてそれらが、東アジアの冷戦体制とその崩壊という激動する歴史的体制転換とも軌を一にしてきたことも分かってきた。それゆえに、「記憶の継承ラボ」では、それぞれの地域に生きる人びとが営み続けてきた戦中・戦後の生活の現場を「複数の歴史空間が重層する場」として捉え直しつつ、それぞれの土地の歴史を背負いながら今と向き合い、さらには未来への展望を拓いていくという「連続性」の中から問い直していくことを重んじたのである。

他方で、それぞれの現場には、歴史的、社会的な出来事の直接的な「体験者（当事者）」ではないものの、平和活動などを通じて、体験者の時に声に

ならない思いをも受け止めながら、忘れてはならない歴史記憶をそれぞれの立場から表現し、自身の経験からも応答させながら、生涯を掛けて伝え継いでいる「伴走者」の存在があることに気づかされた。これまで「戦争体験の継承」に関する既存研究では、体験者と非体験者との間に横たわる「体験の非共有性」の克服に関して、調査者のポジショナリティを問いながら、非体験者がいかに当事者の体験に「参与」していけるのかについて、調査を通じて表現していく試み³³が蓄積されつつある。とりわけ非体験者が体験者の「トラウマ的記憶」を共有することに関心が集まっており、聞き取り等を通じた非体験者による「トラウマの二次受傷」（トラウマの感染）に体験継承への一つの方向性が見出されている³⁴。その一方で、戦争体験世代と戦後世代との間での当時の複雑な対立や当事者の過酷な体験の語り難さ、また、これまで蓄積されてきた膨大な記録などが等閑視されることにより、戦争体験にまつわる記憶が今日の視点から定型的なストーリーとして継承されてしまう危険性³⁵も指摘されている。そこで、「記憶の継承ラボ」では、「体験者／非体験者」という二分法的思考の枠組みから捉えるのではなく、あるいは苦悩やトラウマのみに注視するのではなく、「生活者」として今ある一瞬一瞬を共に生きながら体験者を支えてきた、「体験者」と「非体験者」を繋ぐべく存在としての「伴走者」の実践を重んじた。そして彼ら彼女らが日々の暮らしの中で体験者を支えながら伝え継いできた「生活者の思想的営為」を「ポスト体験時代の記憶の継承の核心」に据えつつ、それぞれの現場での学びを深めていった。なぜなら、記憶の継承の現場には、表面的は同じ日常の

³³ 小倉康嗣 2013「被爆体験をめぐる調査表現とポジショナリティーなんのために、どのように表現するのか」、浜日出夫・有末賢・竹村英樹編『被爆者調査を読む—ヒロシマ・ナガサキの継承』慶応義塾大学出版会、207-254 頁、あるいは屋嘉比収 2009『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす—記憶をいかに継承するか』世織書房など。

³⁴ 蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編 2021『なぜ戦争体験を継承するのか—ポスト体験時代の歴史実践』みずき書林。

³⁵ 福間良明 2020『戦後日本、記憶の力学—「継承という断絶」と無難さの政治学』作品社。

中に埋もれてしまい、外側からは分からないような「語り得ないもの」「語られないもの」（すなわち、AI のデータ化され得ないもの）が潜んでおり、概してナショナルな集合的記憶の内に埋没しがちな、一人ひとりの戦中・戦後体験に目を向けるために、多層的な歴史の層の間に見過ごされてきたそれぞれの人生があることを丁寧に理解していくことが重要になると実感したからである。このように「記憶の継承ラボ」の活動を通じて、現場で学んできた得がたい貴重な事柄とその複層的な重みについて、「写真」を通じて鑑賞者の五感にも訴えかけながら表現を試みたのが、この写真展の企画の意義となる。

加えて、この写真展を中心的に企画し、連日のギャラリートークを担当したのが、「記憶の継承ラボ」の立ち上げ当初から学生たちを牽引してきた吉成哲平氏であり、自らも写真撮影を 20 年ほど続けている表現者でもある。「記憶の継承」の現場にて、多くのことを学びつつも、時に安易に言語化することができない困難さにも直面するものであるが、「写真」と写真家がシャッターを切る瞬間に受け止めた表現は、そこから横溢するものから人々の心に訴え、深く応答するものがあることを、この写真展では伝えようとしている。加えて、その独自性を高める意味からも、ここで吉成氏の研究そのものについて触れておく必要がある。吉成氏の研究は、「戦後」という自明とされがちな枠組みにより見過ごされてきた様々な人びとの暮らしを見据えつつ、写真家の撮影行為とその心象に着目した「写真実践」という独自の方法論を開拓し、同時代を共に生きた写真家たちの当時の視点へと接近することにより「戦後」の生活者の思想的営為を討究するとともに、現在への連続性を問い直しながら「ポスト体験時代の記憶の継承」として未来へと拓いてく渾身の討究である³⁶。さらに、敗戦による軍国主義の終焉並びに対米従属と積極的アメリカ化により作られた「平和」がもたらす「豊かさ」に対峙するオルタナティブな視座として、真の平和を目指すための「アジアとの連帯」

³⁶ 吉成哲平 2025『写真家 東松照明らが表現し続けた生活者の思想的営為—「写真実践」より拓かれていく見過ごされてきた「戦後」の暮らしとその重み—』大阪大学、博士論文。

を希求しているのである。ただし、それらを既存の思想史や論争史から読み解くのではなく、写真家の遺した当時の多様な表現媒体や広域な専門領域の関連文献を渉猟することにより、傷つきながら生きてゆこうとする人々の「生活」に寄り添いつつ描こうとする、誠実な知的態度に根ざしている。加えて、戦後日本社会の現実が「戦後」という言葉の中に回収され定型化していく中で、東松照明氏を軸とする写真家たちの表現活動は、矛盾や葛藤を孕む人々の営みが積み重なる多層的な「歴史の厚み」へと回路を拓くものとして実証することにも成功している。こうした独自の視座は、これまで歴史学、社会学、民俗学、文化人類学において扱われてきた写真の意味付けに新たな知見をもたらすものと期待される。

翻って、吉成氏の編み出す「写真実践」は、現場での目に見えぬモノを含めた苦しみや沈黙への距離をできるだけ埋めていきたいという、駆り立てられる「使命感」からもたらされる思索の深まりが映し出されている。日本近代史家の渡辺京二氏は、かねてから交流の深い小説家の石牟礼道子氏の『苦海浄土』³⁷について、崩壊し引き裂かれる患者とその家族たちの意識を、忠実な聞き書きなどに頼らずとも、自分の想像力の射程内に捉えることができるという独自の方法論を確立したと評する³⁸が、ある意味、それを想起させるものがある。なぜなら、吉成氏は、写真家が現実の向こう側に見た世界を、「生」と「死」が交錯しつつ魂から悶え生む研究者たち、すなわち石牟礼氏の他、文化人類学者岩田慶治氏や社会学者の鶴見和子氏のアニミズム思想と重層させながら、人間の生命を動植物や生命体の中で相対化しつつ、より大きな関わりの中で、人間の生命の根元を表現することを試みているからである³⁹。つまりそれは、石牟礼氏と齊しく、吉成氏が人々の受難に強く感応せずにはいられぬ心の持ち主であるということ、またその土地々々で矛盾や葛藤を抱え傷ついた人びとに対して信頼を持ち続けることができたからこそ

³⁷ 石牟礼道子 2016 『苦海浄土 全三部』藤原書店。

³⁸ 渡辺京二 2013 『もうひとつのこの世—石牟礼道子の宇宙』弦書房。

³⁹ 吉成哲平(著)、三好恵真子(監修) 2021 『写真家 星野道夫が問い続けた「人間と自然の関わり」』大阪大学出版会。

の力量が映し出されている。このように、いまだ言語化されていない、生活者の思想とその営為を写真家の多様な表現媒体をたどりつつ、自らも現場で写真撮影を介しながら、それらを表現しつつ、伝え継ぐという重み。それは、人間にとっての「生活」（生きることを意味する）を探究する研究領域として体系化され、戦後の専門分野の個別化・細分化により失われた、諸学の対話を取り戻そうとする新たな知のあり方を模索する営為なのではないだろうか。

ここでは、吉成氏の「写真实践」が注目した、写真家の撮影行為とその心象の重要性が感じ取れるように、「戦後写真の巨人」として評される東松照明氏（1930-2012）の表現（撮影を介した上での言葉）を、若干ではあるが紹介しておきたい。「写真实践」を方法論に据えた吉成氏の研究では、1960年代初頭に初めて長崎を訪れた東松氏が、被爆から十数年の時間が経つにもかかわらず、いまだ見過ごされたままの被爆者の厳しい生活に直面したことに衝撃を受け、撮影への葛藤を抱えつつも晩年までその現実との「距離」を埋めてゆくことへと突き動かされていく足跡を追っている。被爆後16年の長崎で衝撃を受けた当初は、東松氏は、被爆により負った被爆者の身体の傷を写すことへのためらいを感じつつも、彼ら彼女らがその心に抱き続ける痛みと平行させて個々の暮らしぶりが捉えられていた。つまり、過去から現在へと進みゆく時間の流れの中にある長崎の街と、その傍らで「8月9日」のむごい情景を今なお抱きつつ、依然として厳しい生活状況に置かれている被爆者の諸相が重層的に表現されていたのである。それゆえに東松氏の意味するその「衝撃」とは、以下から垣間見られるように、「過去としての位置をあたえられている現実と、進行するものとしての現実」の「矛盾」を、自らがどのように引き受けることができるという「問い」でもあった。

「しかし、1945年8月の恐怖は、単なる過去の出来事ではなく、現在もなおつづいている痛苦である。死をまぬがれた多くの被爆者が、ぼくたちが生きている、いまを、ぼくたちと同じ時間を生きているのである。（中略）つまり、長崎には、＜11時02分＞で停止した時と、1945年8月9日を基点とす

る現在進行形の時間がある。この二つの時を、私たちは、決して忘れてはならぬ。」⁴⁰

ただし、東松氏は、その後も長崎で長い年月を掛けて写真撮影を重ねていく中で、「歳をとると、風景を見る目が後方に引いていきます」⁴¹と自ら述べているように、それぞれの被爆者の仕事の場、暮らしの場、祈りの場において捉えられた写真を編纂しており、東松氏が後年に以下のように語っている点とも次第に符合していくことになる。

「毎年八月九日には慰霊祭があり、十一時二分にサイレンが町中に鳴り響き、黙とうする。そのとき自分が被爆者だと意識するけど、日常はいつもいつも『被爆者』を意識して生きてるわけではない。一人の生活者として生きてるわけですから、私はその生きざまをまるごとつかむ、というふうに変っていくわけです。」⁴²

すなわち、この語りの「生きざまをまるごとつかむ」という言葉が示す通り、東松氏が長崎での写真表現を続ける中で、やがて「被爆者」から「生活者」へと捉え直していくそのまなざしの拡がりが見えてくるのである。このように、東松氏が長い時間をかけつつ写真撮影を展開する中で浮き彫りになったのは、戦中・戦後の時間を通じて被爆者が歩んできたその生に、老いていく自らの生も次第に重ね合わせていったことである。すなわち、東松氏自身、その間に幾つもの病を抱えつつ、それでも被爆者の「伴走者」として、共にある時代を「生き延びてきた」という感慨と重ね合わせながら、シャッターを切る「いま」という時空間、そしてそれを越えた「未来の生」へと託

⁴⁰ 東松照明 1966『＜11時02分＞NAGASAKI』写真同人社。

⁴¹ 東松照明 1995「リアリティとはなにか」、『現代思想 総特集：ゴダールの神話』青土社、324-331頁。

⁴² 東松照明・中里喜昭 2001「対談 撮ることと言葉—『長崎マンドラ』展にみる日本論の再構成—」、『葦牙』27、6-25頁。

していた。言い換えるならば、被爆者なき時代において、いつか未来で手にする後世のために、「写真」に自身の重層的な思索を内包しつつ、希望を届けようとしていたのである。

「私が初めて被爆者の写真を撮らせていただいたのは 30 歳の時。現在、被爆者の平均年齢は 68 歳といますが、私も 69 歳になり、同世代としてのシンパシーを感じます。私自身、心臓疾患や肝臓病など大病を患っています。高齢化し、病気を抱えた被爆者の状態に近く、わがことのように身につまされるんです。原爆を二度と繰り返してはならないと、証言活動をしている老齢の被爆者がいます。未来の生に向けて、21 世紀に向けて、証言を残そうと命懸けで取り組んでいる人たちがいます。私は被爆者ではないけど、被爆者の伴奏者になることはできます。私の専門である写真で何か役に立つことはできないだろうかと考えて走りつづけています。やがて被爆者はいなくなり、もちろん私も死にます。しかし、写真だけは後世に残ります。」⁴³

以上を踏まえ、「監修者の言葉」として最後に触れておきたいのが、長崎での被爆者であり、長年にわたり証言活動が続けられ、2026 年 3 月に惜しまれつつも引退を表明された、元小学校教師の山川剛氏より受け継いだ「言葉」である。山川氏は、小学校の 6 年間のうち、3 年間を戦時下の国民学校で軍事主義を、のちの 3 年間を戦後の学校で民主主義を習うという戦中・戦後の激動を経験しており、8 歳の時に長崎にて被爆された。36 年間小学校に勤務され、在職中から平和教育に心血を注がれ、1980 年のユネスコ「軍縮教育世界会議」や 1999 年のオランダ「ハーグ平和市民会議」にも参加するなど、国内外にて精力的に証言活動を実践されてきた。2023 年には平和活動に功績のあった人や団体を表彰する「秋月平和賞」を受賞されている。2023 年 10 月に長崎の平和活動の実践者をお招きして開催した「記憶の継承ラボ」の主催による公開シンポジウム（オンライン）「記憶の継承を祈念するグロ

⁴³ 「被爆者の伴走者として撮影続ける」『長崎新聞』（1999 年 7 月 29 日）。

ーバル・ダイアログ」に、山川氏は自ら参加してくださっていた。そこで同氏は、「(歴史的) 事実」とは別に「事実から何を読み取り、理解できるか」であり、また、記憶の継承のためには、モノ（遺構や碑など）を残し、人を育てることが重要であると論してくれた。つまり、モノだけ残しても不十分であり、継承には「人を育てる」ということが肝要になるのではないかと。

かつて、山川氏の平和活動の軌跡をコラム⁴⁴として紹介させて頂いたことがあるのだが、それらを辿っていくうちに、同世代を生きた亡き父のことを思い起こしていた。父は実直な化学研究者であったが、地域ボランティア活動にも熱心で、市の「子ども会育成連合会」の組織を立ち上げ長年会長を務めるとともに、定年退職後にも市の「ユネスコ協会」の事務局長を務めながら平和活動に情熱を傾けていた。そして、晩年は、市内にある2つの小学校で「戦争体験」の話をする授業を亡くなる直前まで行っていた。それは、自分の孫よりも小さな子どもたちに、父自身も子どもの頃に味わった苦しい戦争体験の記憶について語り継いでゆくという試みであった。食糧難の中での経験、6人兄弟の末っ子だった父の兄たちが徴兵された様子、すぐ上の兄が、戦後まもなく亡くなったこと、「兄弟で一番勉強ができたのに....。」と、その早世を悔いながら戦争のむごさをその当時の心で伝えていた。一方で、その語りには、中国との戦争、すなわち1931年に勃発した満洲事変、37年からの日中戦争、41年の太平洋戦争開戦から45年8月の敗戦までの「十五年戦争」についても、「経験」の眼差しから触れられていた。こうした父の平和活動の授業の後に、子どもたちが綴ってくれた感想を小学校の先生が自宅まで届けて下さったのだが、それぞれに大切な何かをしっかりと受け取ってくれていることが理解できた（写真）。すなわち、同じ小学生であっても、戦時中の生活や食事の厳しさ、今、こうして学校で勉強できていることが幸せなことであること、当時の苦しい生活や戦争を絶対にしてはならないこと等、子供たちのそれぞれの心に「我が事」として受け止め刻まれていく様子が伝

⁴⁴ 三好恵真子「他者と「共にある」ということ―ポスト体験時代の記憶の継承に向けて―」『大阪大学グローバル日本学教育研究拠点 2023 年度コラム』

(<https://www.gjs.osaka-u.ac.jp/column/2023/3646/>)

わってきた。実のところ私自身、両親から戦争の話やその経験などを聞くことはほとんどなかった。それでも父は「他者のことを家族のような気持で」と口にしながら、地域の子どもたちのために夢のある環境を整えることに生涯を掛けて力を尽くしていた。また母は3度の食事の前に必ず家族の健康、そして災害や争いが起こらない平和のために祈りを捧げていた。今になって思い返してみても、他愛もない日々の暮らしの中で、戦争体験者である両親の背中から「生きられた経験」を学び取り、普通に暮らすことができる日常の尊さから「平和」への願いを深めることができていたのかもしれない。

私たちに「人を育てる」ことの重要性を諭してくれた被爆教師の山川氏は、独自の「希望の平和学」を提起している^{45, 46, 47}。それは、21世紀を生きる希望と確信を得るために、これからの平和のための教育は、1970年頃から組織的に取り組まれてきた戦争・原爆を柱とする平和教育の豊かな実践を継承しつつ、その基盤の上に「希望を語り、希望を学ぶ」教育に取り組まねばならないと主張する。なぜなら、これまでの平和活動において、戦争やその極限としての原爆被爆について自らの体験を語ってきたものの、そこでとまっていて、「希望」を語ってこなかったことが、若者の悲観的な見方を醸成することに一役買ってしまったのではという内省があるという。よって、人は、古代から「核時代」と呼ばれる現代まで、平和に生きることを願い、平和な世界の実現を熱望して思索と行動を継承し、様々な平和の思想を著し世に問うてきた。それゆえ、人間の英知としての「平和思想」と人間の営みを希望の「証」としたいと山川氏は力強く宣誓する。

振りかえれば、「大阪大学中国文化フォーラム」の設立当初に牽引してくれたのが、西村成雄氏（当時大阪大学人間科学研究科教授；現大阪大学名誉教授）であるが、地域研究に関わりはじめた私に、優秀な弟子を育てて、国

⁴⁵ 山川剛 2008『希望の平和学 「戦争を地球から葬る」ための11章』長崎文献社。

⁴⁶ 山川剛 2014『私の平和教育覚書』長崎文献社。

⁴⁷ 山川剛 2017『被爆体験の継承 ナガサキを伝えるうえでの諸問題』長崎文献社。

内外の多くの大学に研究者を輩出しながら、共にアジアの対話と連帯を前進させいく必要性を教示してくれた。西村氏は、戦後の日本における中国研究を先導してきた中心的研究者であり、20 世紀中国外交と現代ナショナリズムの連動的関係を中心とした領域の諸問題を検証しつつ、先見的視座から中国地域研究の展望を提起していたが、本フォーラムで唯一の戦争体験者でもあった。また、本学にて私の指導学生として初めての大学院生であり、当時 73 歳にて、二つ目の博士（人間科学）を取得された姉崎正治氏からは、戦中・戦後の厳しく苦しい生活に耐え抜きながら、そこで培われた知恵こそが社会をおおきく変革していく動力を生み出すことができるという「生活の必要が生み出す思想」が持つ力⁴⁸を学ばせてもらった⁴⁹。

以上、本稿の冒頭、また締めくくりにおいても、私自身の「経験」に即しつつ、紙幅を割かせて書かせて頂いたが、たとえ、ひとりの人間にできることには限りがあるとしても、それぞれが日常における他者との出会いの中で、身体を介しつつ様々なことを学び取り、時に生涯を通じて未来の他者に伝え継ぐことができることを、先人から身をもって学んでいたのだと実感している。つまり、生きること、それ自体が私たちの表現とその実践なのである。混迷する現代社会において、これから生きる若手研究者や学生たちが主体となる「記憶の継承ラボ」の活動に期待を込めつつ、引き続き、平和な未来への尊厳を温め続け、深化していくことを衷心より祈念していきたい。

なお、今回の「記憶の継承ラボ」の写真展には、3 日間の開催にてギャラリートークも含め、50 名を超える多くの方々が来場し、鑑賞してくださった。部局の教職員・学生はもとより、「記憶の継承ラボ」の活動で知り合っ

⁴⁸ 天野正子 1992「民衆思想への方法的実験―「ひとびとの哲学」から「身上相談」への位相―」安田常雄・天野正子編『戦後「啓蒙」思想の遺したもの』久山社、107-129 頁。

⁴⁹ 三好恵真子「コラム④ 集団就職から戦後日本の鉄鋼業発展を支えた技術を生み出し次世代へと道を拓いたある職人の物語――二つの博士号へと結実させたリカレント教育」三好恵真子・吉成哲平 編 2025『ポスト体験時代の記憶の継承：アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ（「21 世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ③）』OUFC Booklet Vol.19, 169-176 頁。

た方々も遠方より駆けつけてくださり、またキャンパスの異なる授業の受講生や旧知の事務職員の方々なども、昼休みを利用しつつ足を運んでくださった。このブックレットには、その中から学生や若手研究者、さらにギャラリーのスタッフの方よりご寄稿頂いた貴重なレスポンスや展示会場に届いたコメント等を収録することができている。これからも未来世代の可能性に期待を込めながら、このブックレットが、より多くの方々の手元に届けられ、そしてまだ見ぬ未来世代の人たちにも温め続けることを願ってやまない。



父の戦争体験を語る授業の後に子供たちから寄せられた感想(2013年3月 筆者撮影)

執筆者紹介（氏名/所属/主要業績）

【編者】

吉成哲平（よしなり てっぺい）[刊行に寄せて・第一部・あとがき]

大阪大学・人間科学研究科・特任助教

『写真家 星野道夫が問い続けた「人間と自然の関わり」』（三好恵真子監修、大阪大学出版会、2021年）

「復帰後の沖縄の現実から問い直された「戦後」—写真家 東松照明が島々で確かめていった生活の実感—」（『生活学論叢』46号、2025年、共著）

「「私性」から「公性」へと拓かれてゆく「写真実践」—復帰前後の沖縄での表現を巡る東松照明の模索—」（『生活学論叢』43号、2023年、共著）

「写真家 東松照明が直面した「基地の中の沖縄」—日米の狭間で揺らぐ復帰前の現実と歴史への責任—」（『生活学論叢』41号、2022年、共著）

「「戦争の影」を抱え展開し続ける「写真実践」—東松照明が生活の現場から証した、長崎の被爆者の生と死—」（『生活学論叢』39号、2021年、共著）

【監修者】

三好恵真子（みよし えまこ）[監修者の言葉]

大阪大学・人間科学研究科・教授

『現代中国社会変動與東亜新格局第二輯、第一輯』（社会科学文献出版社、2020年、2012年、共著）

『バイオサイエンス時代から考える人間の未来』（勁草書房、2015年、共著）

『共進化する現代中国研究—地域研究の新たなプラットフォーム—』（大阪大学出版会、2012年、共編著）

『現代中国の社会変容と国際関係』（汲古書院、2008年、共著）

『トラウマ的記憶の社会史—抑圧の歴史を生きた民衆の物語—』（明石書院、2007年、共著）

『忘れてはならない環境ホルモンの恐怖—子どもたちの未来を守るた

めに一』(大学教育出版、2003 年)

Gums and Stabilizers for Food Industry, Vol.11, Vol.10, Vol.9 (The Royal Society of Chemistry, 2002, 2000, IRL Press, 1998, joint authorship)

The Series Progress in Colloid & Polymer Science; Physical Chemistry and Industrial Application of Gellan Gum (Springer, 1999, joint authorship)

【執筆者】

藤阪希海 (ふじさか のぞみ) [レスポンス①]

大阪大学・人間科学研究科・博士後期課程／日本学術振興会特別研究員 DC2

「マルトリートメント研究における子どもの不在：学校教師から児童へのかかわりに関する研究の現状と今後の課題」(『共生学ジャーナル』7号、2023年)

『「サバルタンは語るができるか」を共に読み共に書く：共生学の3つのアспектを中心に』(『未来共創』9号、2022年、共著)

「パフォーマンス AE」(土元哲平・桂悠介・サトウタツヤ編『ワードマップ オートエスノグラフィー・マッピング』所収、新曜社、2025年)

“Crystallising Experiences, Creating Pedagogical Space: From Personal Journeys to an Autoethnographic Community in Japan,” in Douglas, K. and Carless, D. (eds.), *Pedagogy and Practice in Autoethnography: Interdisciplinary Perspectives* (Routledge, 2025, joint authorship)

織田和明 (おだ かずあき) [レスポンス②]

大阪大学・人間科学研究科・助教

『九鬼周造の人間学：破綻と再建』(大阪大学出版会、2025年)

『日中の近代哲学・思想の交差とその実践』(法政大学出版局、近刊、分担執筆)

The Dialectics of Absolute Nothingness: The Legacies of German Philosophy in the Kyoto School (Cornell University Press, 2025, 分担執筆)

"Intuiting and Speaking "Truth": Nakai Masakazu and the Encounter with Beauty and Order"(*European Journal of Japanese Philosophy* 10, 2025)

中井正一の映画論：「見る論理」を求めて(『社藝堂』12号、2025年)

朝木日力格 (CHAO Murilige) [レスポンス③]

大阪大学・人間科学研究科・博士後期課程

「外側から構築される内モンゴル像と語られない内モンゴルの狭間に生きるということー日本に暮らす内モンゴル出身のモンゴル人留学生の対話的オートエスノグラフィー」(『生活学論叢』48号、2026年、共著)

「外側から構築される内モンゴル表象と語られない内モンゴルの狭間で生きることー世代を越えて受け継がれる記憶と葛藤をめぐる対話的オートエスノグラフィー」(日本生活学会第53回大会、連名発表、2026年)

「中国内モンゴル自治区の放牧制限化における畜舎牧業一定住化にて生活するモンゴル人がなぜ牧畜から離れないのかー」(日本現代中国学会関西西部会2024年度大会、2024年)

「中国内モンゴル自治区における生業の変容とその影響ー半農半牧村における作物栽培を手がかりとしてー」(日本生活学会第51回大会、連名発表、2024年)

冷昕媛 (LENG Xinyuan) [レスポンス④]

大阪大学・人間科学研究科・博士後期課程

「中国社会転換期における環境 NGO の世代間継承と地域社会再構築への新たな展望ー第3世代環境 NGO リーダーのライフストーリーに基づく分析ー」(『生活学論叢』47号、2025年、共著)

「社会転換期における環境ガバナンスへの参与ー中国環境 NGO リーダーの奮闘記から読み解かれる内在的自律性とその啓示ー」(三好恵真子・吉成哲平編『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ (OUFC Booklet Vol.18)』大阪大学中国文化フォーラム、2024年)

「中国社会転換期における若い世代が牽引する新しい環境 NGO の課題と展望ーライフストーリーから読み解く光と影ー」(『アジア太平洋論叢』24号、2022年、共著)

上官世聰 (SHANGGUAN Shicong) [レスポンス⑤]

大阪大学・人間科学研究科・博士後期課程

「過去を祀るということー『SHOAH』を契機とした集合的記憶の再考と実践的継承」(中谷碩岐・瀧口隆・吉成哲平編、三好恵真子監修『出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる』大阪大学中国文化フォーラム、2025年)

「中国におけるコロナ禍でのロックダウン経験と記憶に関する考察」

(日本生活学会第 51 回研究発表大会、連名発表、2024 年)

瀧口隆 (たきぐち たかし) [レスポンス⑥]

高校教諭

「声を響かせることに向かつて——ジル・ドゥルーズ『シネマ』における〈自由間接話法〉」(『社藝堂』12 号、2025 年)

「ドゥルーズ『シネマ』における視覚的イメージの読解について」(『hyphen』8 号、2023 年)

中谷碩岐 (なかに ひろき) [レスポンス⑦]

大阪大学・人間科学研究科・博士後期課程／日本学術振興会特別研究員 DC1

「ジャック・デリダのデカルト主義とその行方」(『フランス哲学・思想研究』31 号、2026 年)

「『声と現象』における二重のフィンク受容」(『現象学年報』42 号、2026 年)

「現前への信と「吐き出されるもの」：「エコノミメーシス」における「音声＝ロゴス中心主義」と信の問題」(『哲学の門』6 号、2024 年)

井上恵子 (いのうえ けいこ) [レスポンス⑧]

イロリムラギャラリー

あとがき

昨年 2025 年の写真展とその後の本書の刊行準備を進める中で、これまで「記憶の継承ラボ」の活動を通じて長崎や沖縄、福島、水俣などの各地で撮影してきた写真を見つめ直しながら改めてかみ締めていたのは、現場の実践者の方々が、私たちをいつも温かく迎え入れて下さっていることの有り難さです。他方で、現場への訪問を毎年積み重ねていく中で、ご高齢やご体調などの事情により体験や記憶の継承活動の第一線からは退かれる方々もいらっしゃる、いま、このときに時間を共にしながら学ばせて頂く一つ一つの機会をこれまで以上に大切にしていきたいと心しています。

刊行に際しては、筆者の不手際により執筆者の方々を大変お待たせしてしまい恐縮するばかりですが、おかげさまをもちまして「記憶の継承ラボ」による新たな作品をまた一つ、未来に残すことが出来たことを大変有り難く思います。お忙しい中で監修を務めて頂くだけでなく、発刊作業にあたっても様々にご尽力頂いた三好恵真子先生をはじめ、本書の刊行にお力添え頂いた皆様に心より御礼を申し上げます。そして、現場にていつも貴重な機会を頂いている長崎城山小学校平和祈念館の山口政則氏と松尾眞一郎氏、また、沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」に携わる沖縄市史編集担当の恩河尚氏と伊敷勝美氏に改めて深謝申し上げます。

なお、本書は筆者がそれぞれ研究代表を務める大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「東アジアへ拓かれた「戦後日本」の記憶の継承：地域間を結ぶ対話と歴史実践の拠点構築」並びに科研費（研究活動スタート支援）「写真家たちが伝えた東アジアに拓かれた沖縄の生活：「写真実践」から問い直す」（課題番号 25K23028）による支援を受けて実現することが叶いました。記して感謝致します。

2026 年 9 月
編者 吉成哲平

「記憶の継承ラボ」写真展の記録
「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在

2026 年 9 月 8 日発行

編者 吉成哲平

監修者 三好恵真子

印刷・製本 (株)アイジイ

OUFC ブックレット 第 21 巻

<http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/booklet.htm>

ISSN 2187-6487 (オンライン)

大阪大学中国文化フォーラム事務局 (as-c-forum@hus.osaka-u.ac.jp)